鎌倉出土かわらけの系譜と編年
－東国社会の変質と中世の成立（後）：かわらけの編年と中世社会

Lineage and Chronology of Small Earthen Plates “Kawarake” from Kamakura: Social Change and Formation of Medieval Age. Part II: Chronology of Kawarake and Medieval Age.

宗基　秀明

SHUDAI Hideaki

要　旨

かわらけの型式分類とその変遷を遺跡内層序と遺跡間年代差から探り、かわらけは土師質土器が器種単純化と法量の二分化をとげる 12 世紀前半から中頃に生じたと考えた。12 世紀第 3 四半期までには在地土器がかわらけに収斂するのと併行して器種ごとに産地が異なる焼物を搬入する中世土器様式が成立した。その背景には京都における院政の開始と同様に東国社会に家の成立があり、惣領を核とする武士団が海上と陸上の物資流通に大きくかかわっていたことが要因としてあげられる。また、かわらけの変遷に年代を与えるには、共伴遺物よりも伴出遺物の最新年代が有効で、それも生産から廃棄までの期間が短い消耗品である東海系の山茶碗や瀬戸・常滑窯製品の内、碗・皿や鉢の年代を用いた。これらの検討を経て、かつて筆者が示したかわらけの編年に大きな変更を加える必要のないことを確認する一方で、土師質土器からかわらけが生じる点を重視して、かつてのⅠ期とⅡ期をⅠ期の ab 小期に統合し、以後Ⅲ期をⅡ期へと一段階づつ段階を減少させた。

鎌倉におけるかわらけの変遷において、大きな意味をもつのが「薄手丸深」と呼称されていた G 型である。G 型はそれまでの皿形から埦形への移行と大・中・小の法量の 3 分化を特徴とする。この特徴は併存する他型式のかわらけにも影響を与えた。13 世紀第 3 四半期に登場し、1300 年前後に確立して 14 世紀いっぱい生産され続ける G 型を「東国の武家政権のかわらけ」と措定した。ただし、G 型の形成には従来あまり注視されていなかった X 型が影響を与えていたのではないかと考えられるが、今回その証跡を確認することはできなかった。

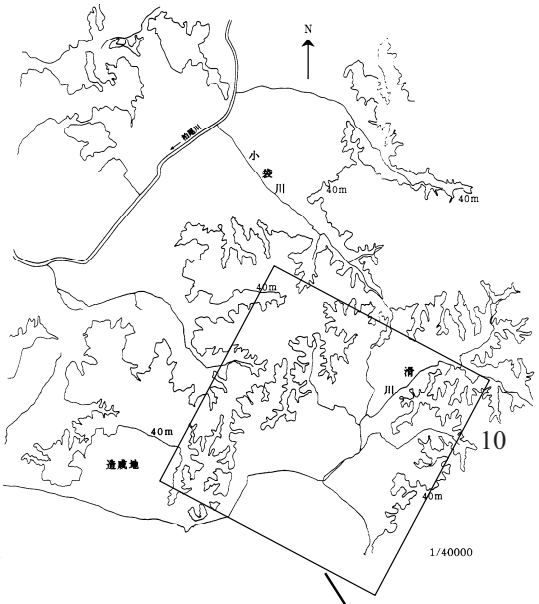
キーワード：中世　鎌倉　武家のかわらけ　中世土器様式　編年

かわらけの分類

かつて筆者はかわらけの型式変遷を探るためには、廃棄行動における同時性が高いと思われるいわゆる“かわらけ溜まり”の抽出と伴出遺物による年代比定を基本とすることが必要であり、中世鎌倉のかわらけ型式の変遷は様式論の複数器形の各型式組み合せに類似する同一器形（器種）における複数型式の組み合せが存在し、その経時的変遷を示した［宗基 1998、2002、2005］。また、複数型式のかわらけが同時に存在することから、複数工房の存在も予想した。よって、以下では既に示している型式の認定を確認した後に、複数型式の同時存在が工房ごと、または工房のグループごとによるものかを考えてみたい。なお、従来の調査では、型式または工房差が納入先、すなわち使用者と工房との結びつきを示唆すると指摘されている［鈴木 2008］。こうしたかわらけの型式把握から工房の多様化とともに型式組み合わせ（セリエーション）の把握とその変化から武家政権の確立も窺える可能性を導き出したい。

鎌倉出土かわらけの分類は、前稿で詳しく見てきたように論者ごとに分類名称とその年代が異なるものの、分類されたかわらけの変遷はほぼ共通している。それはかわらけの各分類形状が型式として設定可能であることを示している。ここでは筆者が示したものを含めて従来の分類名称を一度脇において、改めて各分類形状を型式として捉え、鎌倉以外の地域とも比較対照できるように型式名称として記号を付与する。

鎌倉から出土するかわらけは大きく 2 つの成形技法に分けられる。一つは後述するように鎌倉に武家政権が成立する以前から用いられていた外底面に回転糸切りの痕を残すロクロ成形で、他方は武家政権樹



1. 大蔵幕府周辺遺跡・二階堂字荏柄 38-1
2. 大倉幕府跡・雪ノ下 3-606-1
3. 横小路・二階堂字横小路 110-3
4. 大蔵幕府周辺遺跡・二階堂字荏柄荏柄 58-1
5. 佐助ヶ谷遺跡
6. 佐助ヶ谷遺跡内やぐら・佐助一丁目
7. 千葉地東遺跡
8. 大倉幕府跡（雪ノ下三丁目 701-3）
9. 笹目遺跡
10. 朝比奈砦
11. 上杉氏憲邸跡
12. 保寧寺跡
13. 今小路西遺跡（御成小学校地点）
14. 今小路西遺跡（御成町 200-2 地点）
15. 杉本寺周辺遺跡

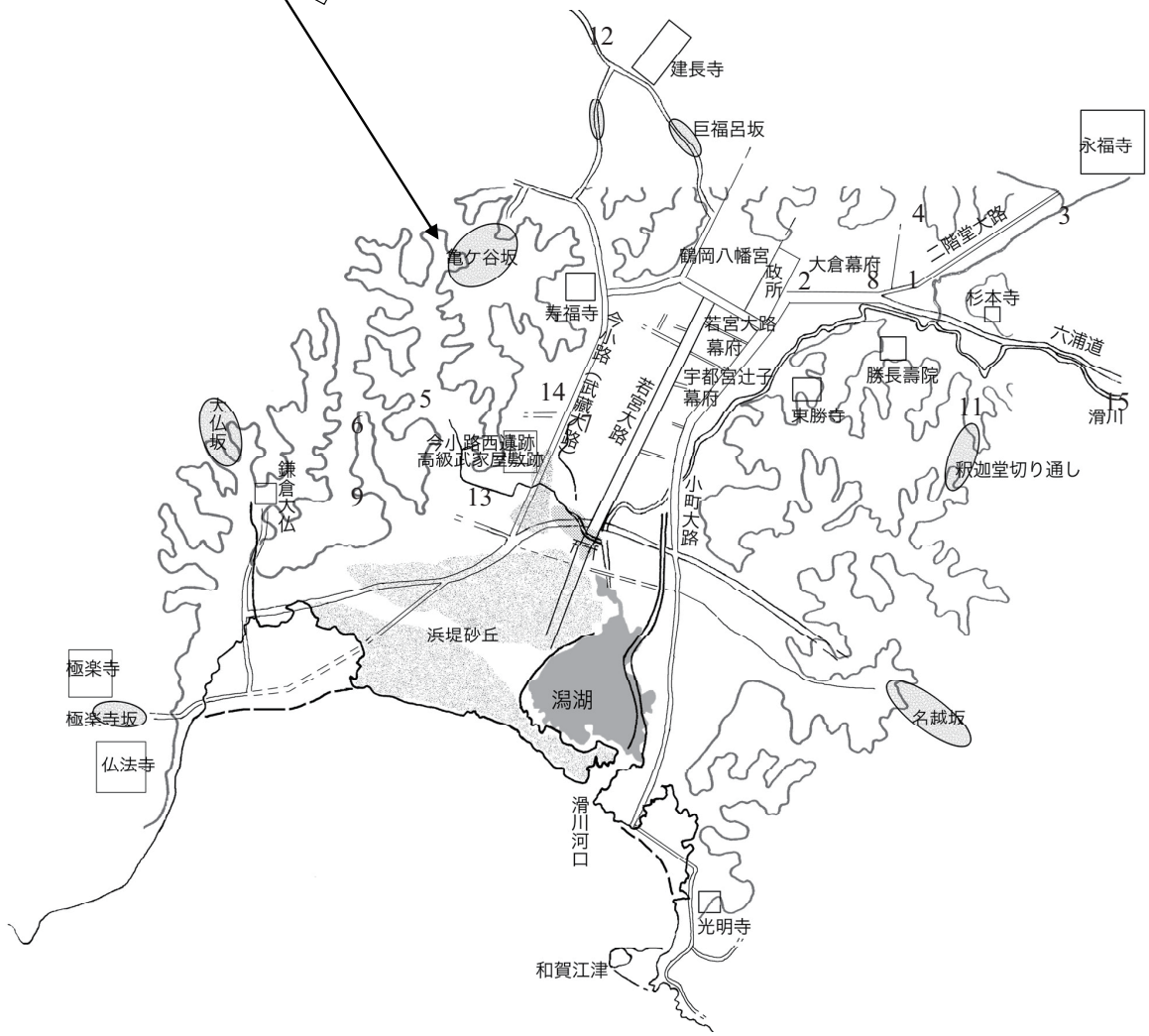


図１　鎌倉市内遺跡位置図

立後にしばらくして現れる手づくね成形である。前者は武家政権樹立以前の鶴岡八幡宮境内の鎌倉国宝館用地内からかわらけと思しき土器の出土の他、相模国中部の宮久保遺跡、武蔵国の落川遺跡や多摩ニュータウン No.692 遺跡出土土器資料によって、鎌倉の都市社会形成以前から用いられていたことを示している。また小島による平塚地域の土師器編年［神田・大野遺跡群発掘調査団編 1984、高林寺遺跡発掘調査団編 1985］の 14・15 期の改定と 16 ～ 18 期の追加は、土師質土器からかわらけへの移行を提示しているが［若林 2009］、12 世紀前葉から末葉の 16 ～ 17 期の間が不明である。それでも、かつて仲田が土師質土器坏は木製の椀皿の影響を受け、回転糸切り底の大小 2 タイプに変化したと指摘したと同様の状況を示している［仲田 1993］。

以下ではロクロ成形を 1 群、手づくね成形をⅡ群として、まずは 1 群から記述していく。

Ⅰ群（表 1・2）

12 世紀前半にまで遡る資料は、武蔵国の多摩ニュータウン No.692 遺跡と相模国中部の宮久保遺跡のそれぞれ 12 世紀前半から中頃ににかけての土師質土器（報文名称に従う）である。宮久保遺跡は層序的に不安定なため、多摩ニュータウン遺跡の土器を取り上げる [1]。出土した土器は全て底部回転糸切りで、分厚い底部から内彎気味もしくは真っ直ぐに開くように立ち上がる。底径が小さく、大型にはロクロ目が強く残され、小型では内底面にロクロ目を残してやや盛り上がる。後述の千葉地東遺跡河川下層出土大型かわらけ成形の所作とよく似ている。さらにこの土器は、すでに大小に法量分化しており、それ以前の土器とは異なっている。大型は口径 14 ～ 15 ㎝、底径 7 ～ 8 ㎝、器高 4.5 ～ 4.95 ㎝で、小型は口径 8.5 ～ 9.5 ㎝と 7 ～ 8 ㎝、底径 5 ㎝前後、器高 2.5 ～㎝と 2 ㎝弱の 2 法量をなす。この多摩ニュータウン遺跡の土器器型をＡ型とし、大型を〆 小型を *s* とそれぞれアルファベットの小文字筆記体で表す。

このロクロ成形かわらけは、脚高高台坏の坏部、そして同時期の相模Ⅶ期の外底面回転糸切り痕を残す坏の形状と良く似ており、まさに底部を高く切り残した小型の器高の高い一群は古代末の土器坏の系譜につながるものと考えられる［國平 1986；宗臺 1998］[2]。しかしながら、器高の高い底部糸切りかわらけが急激に浅い皿形へと変化していく。

鶴岡八幡宮境内遺跡 7 溝と千葉地東遺跡河川下層に 1180 年頃まで遡るとされるかわらけが発見されている。これらの遺構は源頼朝が鎌倉入りした 1180 直後と考えられており、出土したロクロ成形かわらけはいづれもロクロ目を強く残す青味のある灰色または黄褐色胎土であり、糸切り時の回転速度が遅く、ほぼ停止状態である。全体の形状を残す千葉地東遺跡出土例を見ると次の特徴がある [3]。大型では器高の高いものと低いものがある。器形は外底面脇で外反しながら立ち上がるが、その後は内彎ぎみに開いて口縁は立ち上がる。ロクロ目が強いために口縁は外反するように見える。外底面脇の器壁は厚く、とくに底径の小さな器高の高い例に目立ち、多摩ニュータウン No.692 遺跡のＡ型と近似する。器高の高いもので口径 13.0 ～ 13.6 ㎝、底径 7.0 ～ 7.2 ㎝、器高 4.4 ～ 4.9 ㎝である。器高の低いもので口径 13.9 ～ 14.8 ㎝、底径 6.7 ～ 7.8 ㎝、器高 3.6 ～ 4.2 ㎝である。器高の低いものほど底径と口径が大きくなる傾向を読み取れる。坏形から皿形への志向が認められよう。器高の高い坏形のものほど胎土は灰色味が強い。小型も外底面脇で外方に反り上がり、以後は内湾ぎみに開くが、一度の指当て幅で収束するほど浅いためにやや外反ぎみに見える。法量は口径 7.0 ～ 8.2 ㎝、底径 4.8 ～ 5.2 ㎝、器高 1.8 ～ 2.3 ㎝を測る。底部が厚く、やや柱状に粘土を切り残すものが多いため、内面での深さはさほどない。大型の 2 種と小型は共にロクロ目が強く、内底面にロクロ目を残すものがほとんであるが、ナデ消している例も一部ある。

以上のかわらけの内、大型で器高の高いものと小型は多摩ニュータウン例と比してロクロ目がより強くやや内湾ぎみとなっているが、成形所作はほぼ同様であるため、それぞれⅠℓA2、小型をⅠ*s*A2 とする。一方、器高の低い大型は器高と口径の法量が大きく異なるため、B 型式とし、Ⅰℓ B とする。

これらのロクロかわらけのみの時期の後、すでに筆者が示した編年案を含めて大方の編年案において、手づくねかわらけが現れると考えられている［河野 1986a；斎木 1983；宗臺 1998；服部 1984；馬淵 1985］。ここでは［宗臺・宗臺ほか 1996］と［宗臺 1998］をもとに、手づくねかわらけ出現以降のⅠ群のかわらけの分類を示す [4]。

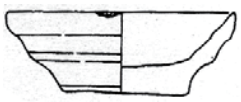
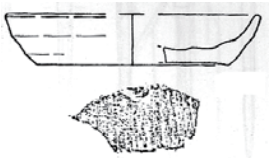
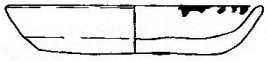
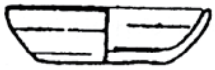
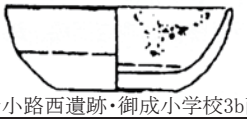
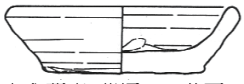
手づくね成形のⅡ群がはじめて現れる時期のロクロ成形のⅠ群は概ね良好な資料が得られていない。これまでのところ、永福寺創建期の整地層や雨落ち溝、それにやはり永福寺と係わる横小路周辺遺跡出土遺物を挙げることができる。横小路周辺遺跡出土品でみるならば、底径の小さな底部脇から強いロクロ目を残して立ち上がり、その後にロクロ目が少し弱くなり器壁も薄く、口縁は若干外反する。口径 12.6 ㎝、底径 5.9 ㎝、器高 4.8 ㎝程である。外底面脇の器壁が体部と比べて厚いⅠℓA2。このⅠℓA2 の胎土は雲母片を交えて砂が多く、青味の灰色を呈する。次に底径は相変わらず小さいものの口径が大きくなり、Ⅰℓ B より低平化して

表１　ロクロ成形かわらけ大型・中型品器型分類表

器型		器型	
Ⅰℓ A1	多摩ニュータウン692	Ⅰℓ A2	千葉地東河川下層　横小路周辺遺跡溝2上層
Ⅰℓ B1	千葉地東河川下層	Ⅰℓ B2	横小路周辺遺跡溝2上層
Ⅰℓ C1	横小路周辺遺跡溝2上層		
Ⅰℓ D1	大倉幕府・荏柄38-1		
Ⅰℓ E1	今小路西遺跡・御成小学校4面	Ⅰm E	今小路西遺跡・御成小学校4面
Ⅰℓ F1	今小路西遺跡・御成小学校3b面	Ⅰm G1	今小路西遺跡・御成小学校3b面
Ⅰℓ G1	今小路西遺跡・御成小学校3b面	Ⅰm G2	笹目土壙16
Ⅰℓ H1	上杉氏憲邸	Ⅰm H1	上杉氏憲邸
Ⅰℓ J1	大倉幕府・荏柄58-4	Ⅰm J1	大倉幕府・荏柄58-4
Ⅰℓ K	大倉幕府・荏柄38-1井戸13	Ⅰm K1	大倉幕府・荏柄38-1井戸13　縮尺不同

いるⅠℓB2は、口径14.5㎝、底径6.1㎝、器高4.2㎝を測り、器壁のロクロ目はほとんどなく、緩やかに立ち上がり、丸く内彎する口縁が少し尖るようになる。この段階で、ⅠℓA2の一部に見られた口縁の強い外反は消失する。器壁の立ち上がりと口縁端部の形状は、大型の手づくねかわらけのⅡℓB1に似ている。他方、完全に皿形器形に低平化し、外底面にスノコ痕が残るⅠℓCが現われる[5]。口径14.4センチ、底径10.45㎝、器高2.2㎝と完全な皿形である。東国の中世かわらけの確立に向けた端緒と考えられる。

表 2　ロクロ成形かわらけ小型品器型分類表

器型		器型		器型	
Ⅰ*s*A1	 多摩ニュータウン692	Ⅰ*s*A2	 千葉地東河川下層	Ⅰ*s*A3	 横小路周辺遺跡溝1
Ⅰ*s*C	 横小路周辺遺跡溝1				
Ⅰ*s*D1	 大倉幕府・荏柄38-4土壙1	Ⅰ*s*D2	 長谷小路周辺溝31	Ⅰ*s*D3	 佐助ヶ谷5期基壇
Ⅰ*s*E1	 今小路西遺跡・御成小学校4面				
Ⅰ*s*G1	 今小路西遺跡・御成小学校3b面				
Ⅰ*s*H1	 上杉氏憲邸Ⅲ面炭化物層				
Ⅰ*s*J1	 大倉幕府・荏柄58-4	Ⅰ*s*J2	 大倉幕府・荏柄38-1井戸13		
Ⅰ*s*K1	 大倉幕府・荏柄38-1井戸13				
Ⅰ*s*N	 大倉幕府・荏柄38-1井戸13				縮尺不同

ほぼ同時期の小型のロクロ成形かわらけには、2 種類がある。分厚い底部から、外底面脇でいったん外反してから内彎し、口唇は太るようにして丸い。胎土は砂粒が非常に多くザラついて、赤褐色に焼き上がる。上記までの小型ロクロ成形かわらけと厚い底部とその立ち上がり方は同様ながら、口唇の形状の他に法量と胎土が異なる。口径 8.4 ㎝、底径 5.2 ㎝、器高 1.7 ㎝とやや大型化し、胎土も砂質であるが焼き上がりは赤い。これを Ⅰ*s*A3 とする。もう一方は静止糸切りの幅広い底部から直線的に器壁が立ち上がる。内底面に非常に強いロクロ目を残す。胎土は黒色砂粒を交えるものの、きめの細かな淡い肌色を呈して瓦器に似た滑らかさを持つ。口径 9.5 ㎝、底径 7.25 ㎝、器高 1.85 ㎝である。これを Ⅰ*s*C とする。

以上のロクロ成形かわらけには、大型と小型の各 ABC 型式で法量の変化がみられたが、以後の整形処理とは異なり全ての内底面にナデはほぼみられず、また焼き上がりの発色は灰色から赤色へと移行するものの砂質胎土であることが共通している。

こうした砂質胎土を用いたロクロ成形による一連のかわらけの後に粉質の胎土で橙色から赤褐色に焼き上がり、整形の所作も異なるものが現れる。それらの年

代的位置づけは、1192 年創建の後に消失と建て替えに伴う廃棄年代のほぼ明確な永福寺瓦と伴出した事例から想定できる[6]。1244 年に廃棄された永福寺Ⅰ期瓦を伴出するかわらけは永福寺跡遺跡Ⅱ期建物遺構の他に、大蔵幕府周辺遺跡群・二階堂字荏柄 38 番 1［馬淵 1993］と雪ノ下三丁目 606 番 1 地点［菊川 1993］に確認できる。前者は中世の基盤層が削平を受け、本来の層位関係を確認できないが、永福寺建立に伴う二階堂大路の整備に係わる地割を示し、ここで取り上げるかわらけを出土した土壙 1 は 13 世紀第 2 四半期と考えられる。土壙からは手づくねとロクロ成形かわらけの他に永福寺Ⅰ期の平瓦、常滑窯の片口鉢Ⅱ類 5 から 6a 段階[7]、黄釉盤底部片に青白磁梅瓶の蓋が出土している。ロクロ成形かわらけは大型と小型があり、いずれも砂粒を含みながらも粉質胎土で灰色ぎみの例もあるが、概して褐色から黄褐色である。器型は、大型で底部脇で若干の外反が見られるが、ほぼ緩やかに内彎しながら立ち上がり、小型でやや開きながら内湾ぎみに立ち上がる。大型・小型共に底部厚と底部脇の器壁が全体として肥厚せず、従来の器型とかなり異なる。その理由はいずれも内底面に強いナデが施されたことと糸切りを高く残さないようになったことによる。その結果、器形全体としても底部脇の外反傾向が薄らいでいる。また成形後の取り扱いに係わる痕跡として、外底面にスノコ痕を残す例が増加する点もこの器型の特徴である。大型で口径 12.2 ～ 13.5 ㎝、底径 7.4 ～ 8.7 ㎝、器高 3.0 ～ 3.8 ㎝、小型で口径 7.1 ～ 9.05 ㎝、底径 5.3 ～ 7.1 ㎝、器高 1.2 ～ 1.9 ㎝である。これら灰色気味胎土の色調に従来の胎土と焼成傾向を残しながらも調整手法が従来と異なって内底面にナデが施された一群をＤ型とする。ⅠℓＤとⅠ*s*Ｄである。

雪ノ下三丁目 606 番 1 地点では、永福寺Ⅰ期瓦を伴出する溝 11 上層より時期的に遡る下層から二階堂字荏柄 38 番 1 地点と同様のかわらけが出土している。その一方で、Ⅰ期瓦を伴出した溝 11 上層からは次にみるⅠ・Ⅱ期瓦を共に伴出する長谷小路周辺遺跡・由比ヶ浜三丁目 228・229 番他地点出土に類似した器高の高くなったかわらけが出土している［宗臺ほか 1994］。

長谷小路周辺遺跡のⅠb 面最古の溝 31 から永福寺Ⅰ期とⅡ期の剣頭文軒平瓦の他に 6a 段階と思われる大小の常滑Ⅰ類片口鉢、白磁口兀皿（白磁皿Ⅸ－1c）がかわらけと共に出土している[8]。かわらけは大小の組み合わせで、いずれもが褐色から橙色の粉質性が高く粉っぽい胎土である。大型は法量に差異がないものの形状の異なる 2 タイプが見られる。一つのタイプは法量、形状ともにⅠℓＤと同様。一方のタイプは 2 点が出土し、その法量は口径 13.1、底径 7.3 ㎝、器高 3.3 ㎝と口径 13.3、底径 7.4 ㎝、器高 3.45 ㎝を測る。口径と器高では前者と同様であるが、その形状が大きく異なっている。全体に器壁が薄く、底部脇の肥厚を見せずに見込みから体部下半までの器壁はほぼ均一である。その体部はⅠℓＤより小さな底径から緩やかに丸く内彎して立ち上がり、口唇部下でやや外反する。坏形から皿形へと変化してきたかわらけが埦形への傾向を示している器型である。この埦形をⅠℓＥとする。

小型では法量と緩やかに内湾気味に立ち上がる形状に大きな変化はないけれども、器壁が全体に薄くなるようで、とくに外底面の糸切りが底部脇の立ち上がり部で行なわれているために内法は少し深くなっている。これをⅠ*s*Ｄ2 とする。なお、内底面のナデや外底面のスノコ痕などは大小共にⅠℓＤとⅠ*s*Ｄと同様である。

Ⅱ期瓦は永福寺に留まらず、その後半期には称名寺や極楽寺でも用いられていたためにⅡ期瓦の廃棄はⅢ期の建て替えを待たずに行なわれていた可能性がその後半期に高く、Ⅲ期瓦の廃棄と重なることを念頭に置く必要がある。他方、永福寺Ⅲ期瓦も永福寺の建て替えばかりでなく、鎌倉内の寺院を初め武家屋敷の軒にも用いられたことが判っている［原 1986、1992；小林 1989；佐川 1995］。そのため、瓦の廃棄は永福寺の建て替えを待たずに、製作から程なく鎌倉とその周囲で廃棄が始まったことを確認しておく。

さて、そのⅢ期瓦とかわらけが伴出する遺跡は当然増加するが、1 遺跡で 2 時期に亘って出土している佐助ヶ谷遺跡・鎌倉税務署用地［斎木 1993］を取り上げる。より下層の 7 期遺構群の建物 17 の室 1、上層の 5 期遺構群の建物基壇と土壙 376 からⅢ期瓦とかわらけが出土している。建物 17 は「板壁掘立柱」とされるもので、発見された建物の床面、または床下などの土層の確認は判然とせず、出土遺物の帰属にもやや不安を残すが、頻繁な建て替えによる混入があってもさほど大きな時期差はないものと考えられる。常滑片口鉢Ⅰ類 6a が伴出しているかわらけは小型の手づくね成形が数点出土するが、ほとんどはロクロ成形である。大小のかわらけの器型と法量は長谷小路周辺遺跡のそれらと変わらないものの、大型ではⅠℓＥの埦形が増加し、口径 12.1 ㎝、底径 6.8 ㎝、器高 3.7 ㎝や口径 12.2 ㎝、底径 6.3 ㎝、器高 3.8 ㎝など底径が小さくより埦形化が進んでいる例が見られる。ただし、それらの器壁が若干厚くなっており、埦形の増加と共に、作りが粗くなっているのではないかと思われる。これらをⅠℓＥ2 として、長谷小路周辺遺跡出土の丁寧な作りのものをⅠℓＥ1 とする。

なお、おそらくこの前後に相当する時期の今小路西遺跡（御成小学校地点）の第 4 面で小型かわらけにも

緩やかに内湾する埦形が現れている。口径 7.2 ㎝、4.3 ㎝、器高 2.4 ㎝の Ⅰ*s*E である。さらにこの第 4 面で中型製品がはじめて現れている。形状は E 型で口径 11.2 ㎝、底径 6.9 ㎝、器高 3.6 ㎝を測る。Ⅰ*m*E である。

佐助ヶ谷遺跡の 5 期遺構群の土壙 375 では大型の法量が口径 12.55 ㎝、底径 6.3 ㎝、器高 3.1 ㎝や口径 13.4 ㎝、底径 7.85 ㎝、器高 3.25 ㎝がみられて、大型のより大型化した埦形が現れる。これを Ⅰ*ℓ*F とする。建物基壇の構成土から出土したかわらけでは、口径 7.3 ㎝、底径 5.1 ㎝、器高 1.65 ㎝の小型製品に器壁の薄手化を見ることができる。これを Ⅰ*s*D3 とする。

これ以後に現れるかわらけについては、既に何度か論じている。円覚寺旧境内遺跡に発見された複数枚の火災層出土かわらけから 13 世紀末の変遷、そして建長寺境内遺跡では 14 世紀第 2 四半期初頭、嘉暦二（1327）年の法塔立柱に伴う整地層出土かわらけを基点とするかわらけの変遷である［宗臺 1992、20002］。以下の 13 世紀の末から 14 世紀代と思われるかわらけについては、遺物が多く出土している今小路西遺跡（御成小学校地点）のかわらけをもって代表させ［河野ほか 1990］、15 世紀代については上杉氏憲邸跡や保寧寺跡の成果を中心にをまとめた［田代 2002］と［宗臺 2005］を下敷きにしてその器型を示したい。

小型の埦形が現れた今小路西遺跡第 4 面に続く第 3b 面で Ⅰ*m*E に続く中型かわらけが現れる。口径 11.4 ㎝、底径 6.6 ㎝、器高 3.0 ㎝のゆっくり内彎して立ち上がる埦形である。このかわらけは、口径と器高の比からすれば、埦とも皿ともいえる形状だが、その胎土が従来の橙色、または赤褐色の粉質土とは大きく異なり、明橙色の非常にきめ細かで緻密な粉質土であり、焼き上がりも硬質となる。また、器壁は Ⅰ*ℓ*E1 型式と同様であるものの、口唇部の薄化がさらに進んでいる。埦形化、薄手化が進行する Ⅰ 類のなかでもその胎土の緻密さと焼きの良さは特筆でき、その後も引き続き製作される埦形の中で確立した系譜を示す。このタイプのかわらけを Ⅰ*m*G1 として、その後底径口径比が小さくなり、器高も 3 ㎝を超えるものを Ⅰ*m*G2 とする。

中型製品の登場とほぼ同時に現れた Ⅰ*m*G に加えて、小型と大型製品でもこの G 型が現れる。他型式かわらけも埦形化する中で、中型と同様に G 型は底径が小さく、より埦形化を強く示している。大型では口径 13 ㎝内外、器高が 4.5 ㎝内外でも底径は 7 ㎝を超えない。大型を Ⅰ*ℓ*G とし、小型を Ⅰ*s*G とする[9]。これをもって、中世かわらけの大・中・小セットが確立することになるが、その端緒は E 型における埦形化と中型の出現である。

大・中・小セットを確立した G 型の出現は、他の DE 型のかわらけにも影響を与えたようで、中型製品がそれぞれの型でも現れる。各型の表記に *m* で中型を示した、同時に F 型がその後出土しなくなるため、F 型は大・中型分化の前に現れたかわらけの転換点に位置していようか。ここで注意が必要なのは、各型に中型と埦形が現れる中で E 型を G 型として報じられる例が散見されることである。G 型は胎土と焼成の特徴を抜きにしては型式認定できないことを強調しておきたい。

G 型と E 型の大・中・小型をセットにしたかわらけがおそらくは 14 世紀いっぱい継続したと考えられる。ABCD タイプが続々と現れた 12 世紀から 13 世紀の状況と比べて、非常に停滞、別の言葉でいえば安定した型式存続である。そして、14 世紀末と考えられる今小路西遺跡第 1 面で大型かわらけの口径が縮小するまで継続する。E 型では大型の口径が 12.3 ～ 13.6 ㎝まで小さくなる。それまでより 5 ㎜～ 1 ㎝も縮小する。

さて、安定した型式とセット関係を保持した 14 世紀に対して、15 世紀代に入るとそれまでとは大きく異なるかわらけの形状となる。上杉禅秀の乱で知られる氏憲邸跡の調査では応永二十三（1416）年に氏憲（禅秀）が興し、翌年の一月に氏憲の自害で収束した乱に係わるとされる資料が出土している［馬淵ほか 1995］。

小型は従来型式を維持しているが、大型が大きく形状を変化させている。大型は皿形になり、底部脇が内彎して立ち上がるものの口縁が強く外反するものが現れる。法量は、小型が口径 7.7 ～ 9.0 ㎝、底径 4.2 ～ 4.5 ㎝、器高 1.85 ～ 2.3 ㎝、大型が口縁の外反するタイプで口径 12.6 ～ 13.7 ㎝、底径 8.0 ㎝、器高 2.85 ～ 3.1 ㎝である。底径が D 型に比べてずいぶんと大きい。この皿形で外反するタイプを Ⅰ*ℓ*H とする。一方、従来の D 型で口径 11.2 ㎝、底径 6.0 ㎝、器高 2.95 ㎝は中型をなす可能性がある。それは、以下の J 型と K 型に明瞭な中型が存在するからである。

Ⅰ*ℓ*H 型がさらに器高を高くし、いわゆる箱形を呈するものが Ⅰ*ℓ*J で、外反は弱くなるが、口唇で外反する。この段階では大蔵幕府周辺遺跡（荏柄 58−4 地点）のかわらけ溜まり 2 に見られるように小型も器高が高く口唇の外反するものが現れる［原（編）2002］。Ⅰ*s*J である。法量は小型が口径 7.2 ～ 9.3 ㎝、底径 5.21 ～ 5.25 ㎝、器高 1.25 ～ 3.3 ㎝、大型で口径 11.7 ～ 14.75 ㎝、底径 6.0 ～ 9.0 ㎝、器高 3.45 ～ 3.9 ㎝を測る。ここに取り上げたかわらけ溜まり 2 では不明瞭だが、同じ生活面上に発見されたかわらけ溜まり 4 では中型が明らかに存在し、口径 10.5 ～ 11.8 ㎝、底径 6.6 ～ 7.8 ㎝、器高 3.0 ～ 3.5 ㎝を測る。

箱形のかわらけが再び口縁の外反を強めるのが次の

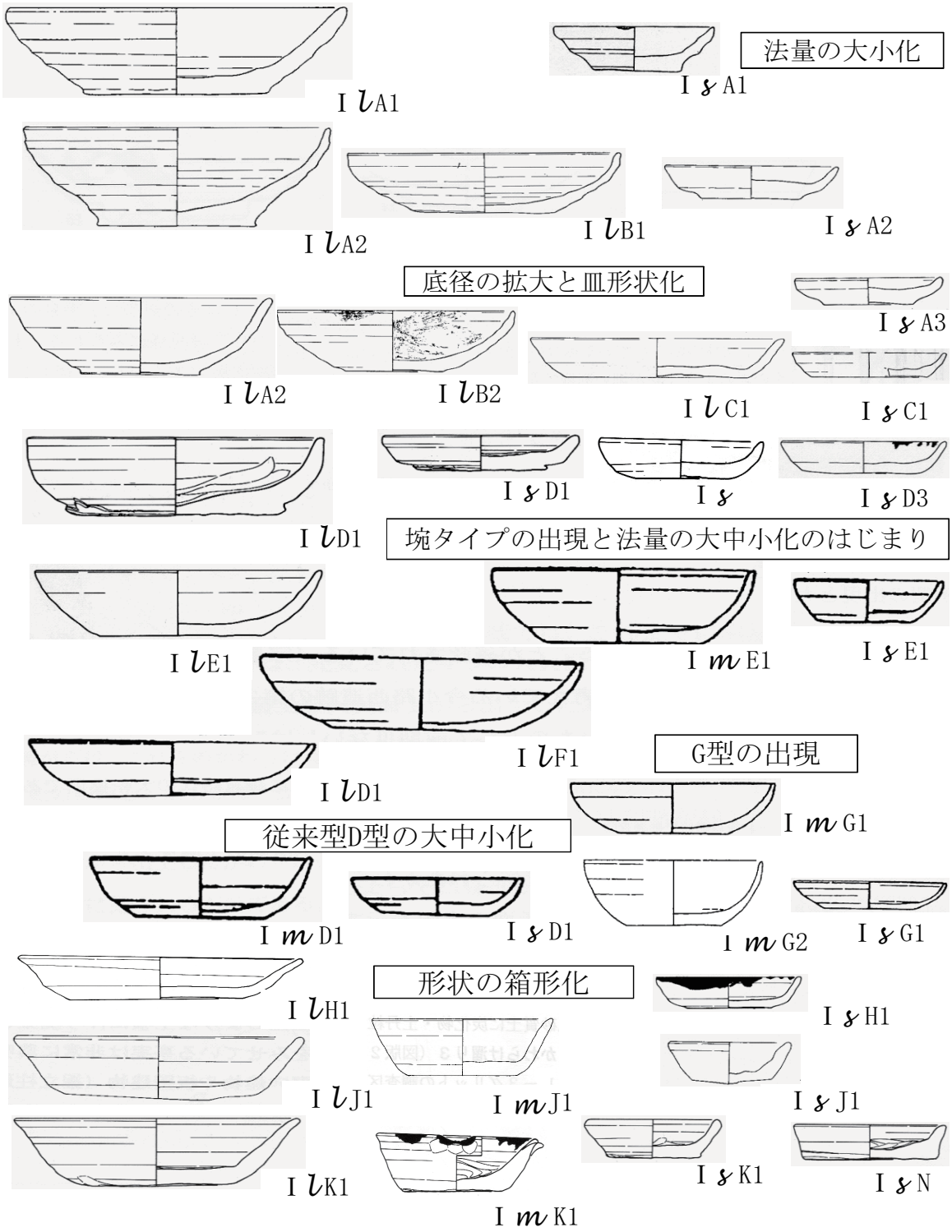


図２　ロクロ成形かわらけ型式変遷図

段階である。底部脇の立ち上がりの内湾傾向も弱くなり、全体に外反するような口の開いた箱形となる。Ⅰℓ K とする。小型ではＤ型のように外反して立ち上がってから内湾する形状も見られるが、全体にぼってりとしており、Ｄ型とできないが、全体にⅠs J の口唇を厚ぼったくしたものである。Ⅰs J2 とする。そうした前タイプを引き継ぐ一方で、大型のⅠℓ K を小型化し、体部の立ち上がりの短い箱形が現れる。Ⅰs N である。各型式の法量は次のとおりである。Ⅰℓ K は口径 12.4 ～ 13.6 ㎝、底径 8.8 ～ 11.3 ㎝、器高 3.1 ～ 3.85 ㎝、

Ⅰ*s*J2 は口径 8.2 ～ 9.4 ㎝、底径 5.7 ～ 7.1 ㎝、器高 1.7 ～ 1.9 ㎝、Ⅰ*s*N は口径 8.6 ㎝、底径 7.2 ㎝、器高 1.6 ㎝。中型は不明瞭だが、口径 10.0 ㎝、底径 6.3 ㎝、器高 3.3 ㎝の口縁が外反する箱形を 1 例のみ確認できた。

この箱形で外反する形状が戦国期の 16 世紀へと引き継がれて行くが、以上に見てきた箱形のかわらけには内底面にナデが施されており、戦国期の小田原周辺で出土する内底面に渦状のロクロ成形痕の高まりはない。

次にⅡ群の手づくね成形の器型分類を示す。

Ⅱ群（表 3・4）

手づくね成形かわらけは、ほぼ肌色から淡橙色の粉質胎土である。砂質ぎみの例も見受けられるが、器型との関係はいまのところ見出せない。以下、手づくね成形に伴う成形手法と形状、それに法量を中心に横小路周辺遺跡の事例を利用して器型分類をする。Ⅱℓ*A*1 は溝 2 下層より出土し、器高が高い。内底面脇の指頭押圧が強く、口縁ヨコナデとの間に強い段を作る。口唇の面取りナデ後の口縁内外面 1 段ヨコナデは強く、面取り部に沈線を作るように段をなす。口径 14.5 ㎝、底径 12.2 ㎝、器高 3.3 ㎝以上を測る。同遺構の上層出土品は低平化しⅡℓ*A*2 とする（中世京都での伊野分類 Jb）。この溝 2 上層で口径 12.15 ～ 15.4 ㎝、底径 10.6 ～ 13.4 ㎝、器高 2.8 ㎝、溝 1 上層で口径 14.35 ～ 15.0 ㎝、底径 11.3 ～ 12.8 ㎝、器高 2.8 ～ 3.1 ㎝である。Ⅱℓ*B*1 は平底に近く、内底面脇にやはり強い指頭押圧部があり、その部分をヨコナデするために内面口縁部のヨコナデは 2 段になる。上段のナデは外面の 1 段と共に行なわれる。口唇は面取りされずに丸い（伊野分類 Ab）。同遺跡最古の土壙 1 で口径 14.3 ㎝、底径 13.2 ㎝、器高 3.9 ㎝、溝 2 下層で口径 13.5 ～ 14.7 ㎝、底径 12.6 ～ 12.65 ㎝、器高 3.4 ㎝、さらに溝 2 上層では口径 13.3 ～ 14.55 ㎝、底径 12.4 ～ 12.85 ㎝、器高 2.6 ㎝となり、口径の拡がる傾向と共に器高が低下する溝 2 上層出土例をⅡℓ*B*2 とする。この内、溝 2 下層のⅡℓ*B*1 の内底面にササラ状のナデが強く残る例もある。Ⅱℓ*C*1 は器高が低く、指頭押圧部とヨコナデ口縁部の間に段をもつ。口唇は面取りされる。やや赤みを帯びた焼き上がりになるが、13 世紀代のもののように内底面にナデは見られない[10]。ヨコナデは 2 段。口径 12.85 ～ 13.55 ㎝、底径 10.6 ～ 11.45 ㎝、器高 3.25 ㎝、後にヨコナデが 1 段となり、指頭押圧部が深くなるⅡℓ*C*2 に推移する。口径 14.35 ～ 14.0 ㎝、底径 12.6 ㎝、器高 2.95 ㎝を測る。

Ⅱ*s*A1 はⅡℓ*A*1 と同様の器型である。ただし口唇の面取りは顕著でない。口径 9.4 ㎝、底径 9.3 ㎝、器高

表 3　手づくね成形かわらけ大型品器型分類表

器型		器型		器型	
Ⅰℓ*A*1	横小路周辺遺跡溝2下層	Ⅰℓ*A*2	横小路周辺遺跡溝2上層		縮尺不同
Ⅰℓ*B*1	横小路周辺遺跡土壙1	Ⅰℓ*B*2	横小路周辺遺跡溝2上層		
Ⅰℓ*C*1	横小路周辺遺跡溝2上層	Ⅰℓ*C*2	横小路周辺遺跡溝1上層	Ⅰℓ*C*3	大倉幕府・荏柄38-1

表 4　手づくね成形かわらけ小型品器型分類表

器型		器型		器型	
Ⅱ*s*A1	横小路周辺溝2下層	Ⅱ*s*A2	横小路周辺遺跡溝2上層		
Ⅱ*s*B1	横小路周辺土壙1				
Ⅱ*s*C1	横小路周辺遺跡溝2上層	Ⅱ*s*C2	横小路周辺遺跡溝1	Ⅱ*s*C3	大倉幕府・荏柄38-4
Ⅱ*s*D1	横小路周辺遺跡溝2下層	縮尺不同			

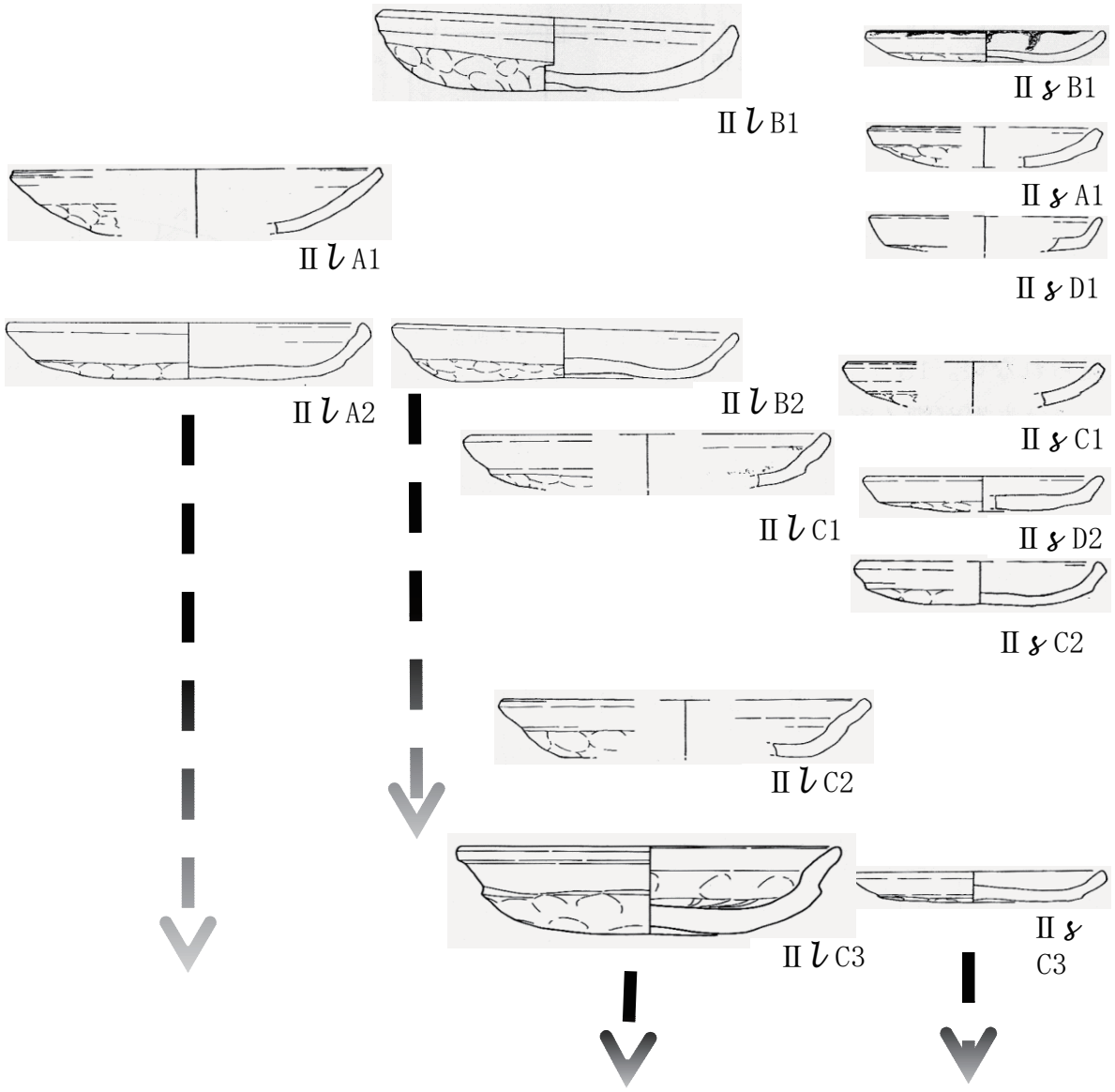


図 3　手づくね成形かわらけ型式変遷図

2.2 ㎝で、溝 2 上層の段階に口径 8.6 ～ 9.55 ㎝、底径 6.0 ～ 8.2 ㎝、器高 1.3 ～ 2.0 ㎝、溝 1 で口径 8.45 ～ 9.8 ㎝、底径 7.5 ～ 8.6 ㎝、器高 0.9 ～ 2.0 ㎝と低平化するⅡ*s*A2 となる。Ⅱ*s*B は平底状の指頭調整部からヨコナデの口縁部が立ち上がるものの、ヨコナデ部は非常に狭く、口唇は丸い。土壙 1 の段階で口径 9.05 ～ 9.2 ㎝、底径 7.7 ～ 8.3 ㎝、器高 1.25 ～ 1.65 ㎝、溝２上層で口径 8.4 ～ 8.85 ㎝、底径 6.8 ～ 7.9 ㎝、器高 1.55 ～ 1.6 ㎝、溝 1 で口径 8.45 ㎝、底径 7.65 ㎝、器高 0.9 ㎝を測る。これ以降の出土はなく、消失する。Ⅱ*s*C はⅡℓC と同様の器型で、溝 2 上層で現れる。口縁のヨコナデ部と底部の指頭押圧部の境に段を作る。口唇は面取りされ、その後の口縁に施された強いヨコナデによって浅い沈線を作っている。口径 8.7 ㎝、底径 7.45 ㎝を測る。後の溝 1 の段階より低平化が顕著となり、口径 8.6 ～ 6.7 ㎝、底径 7.0 ～ 8.5 ㎝、器高 1.6 ～ 1.7 ㎝、さらに溝 1 上層で口径 9.35 ～ 9.65 ㎝、底径 7.5 ～ 8.6 ㎝、器高 1.5 ～ 1.9 ㎝を測る。これらをⅡ*s*C2 とする。Ⅱ*s*D は平底に近い指頭調整部から緩やかに開く口縁のヨコナデが 1 段ないし 2 段残り、口唇に面取りが施される。溝 2 下層で口径 9.36 ㎝、底径 8.15 ㎝、溝 2 上層で口径 9.25 ㎝、底径 8.4 ㎝、器高 1.5 ㎝を測る。

これら手づくね成形の指頭による底部調整部分は、丸いものと平底状の 2 種がある。この 2 種はともに内底面脇に強い指頭押圧が行なわれ、技法的には同一であるものの、プロポーションの違いは京都における浅

皿と深皿に対応するものと思われる［宗墓 1998］。内底面外周のナデは口縁部のナデの前に行われるが、その間に稜を作る。口縁はナデの強弱によって内彎と直線的の 2 つの傾向を示す。外底部に乾燥時のものと考えられるスノコ痕が残る。

以上に分類した手づくね成形の中でも比較早い時期の胎土は全般にきめの細かな粉質土で、大型は淡い灰色を呈するが、小型は焼きもよく淡い橙色である。これらの内、大型、小型共に C 型、すなわち、ヨコナデと外底面指頭押圧部の間に段を作る器型がこれ以降の時期の主流となる。比較的器高の低い A 型も存続するものの、おそらくは 13 世紀代手づくねへと引き継がれた C 型は、再び器高を高くして深めの形状となり、ヨコナデ部と外底面指頭押圧部間の段差が強く、口縁二段ヨコナデの B 型が C 型の影響によってヨコナデ部と体部指頭押圧部の段差を強くして、器高も深くなって現れる。これの型式群は全体に器壁が厚い。それぞれを IIℓA3、IIℓB3、IIℓC3 とする。小型でも同様の器型変化を見せており、やはりそれぞれに II*s*A3、II*s*B1、II*s*C3 とする。法量はいずれも大型で口径 13 ～ 14.5 ㎝、底径 4.5 ～ 8.0 ㎝、器高 3.0 ～ 3.5 ㎝、小型で口径 9 ～ 10 ㎝、底径 3 ～ 7 ㎝、器高 1.5 ～ 2.7 ㎝で A ～ C 型へと器高が高くなる。

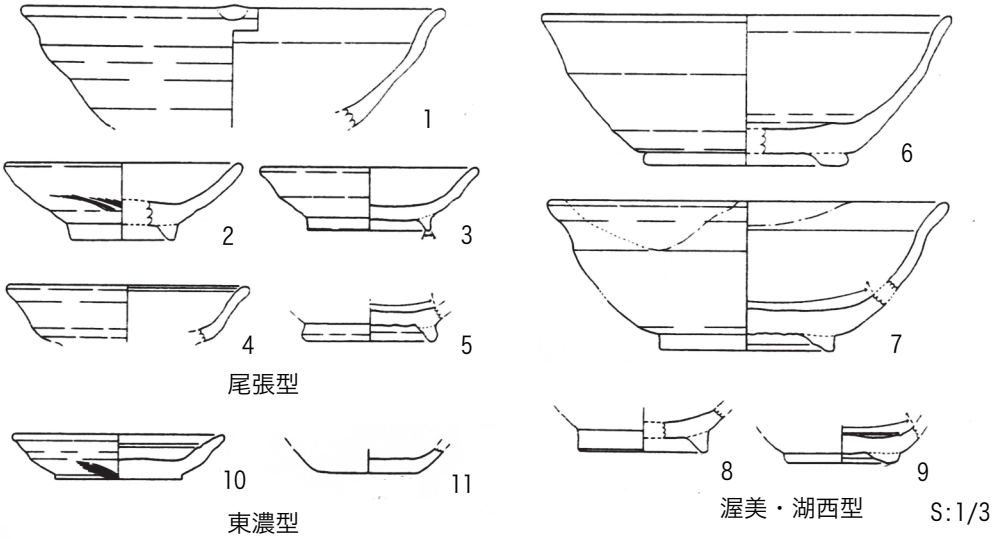


図 4　多摩ニュータウン No. 692 遺跡　伴出山茶碗

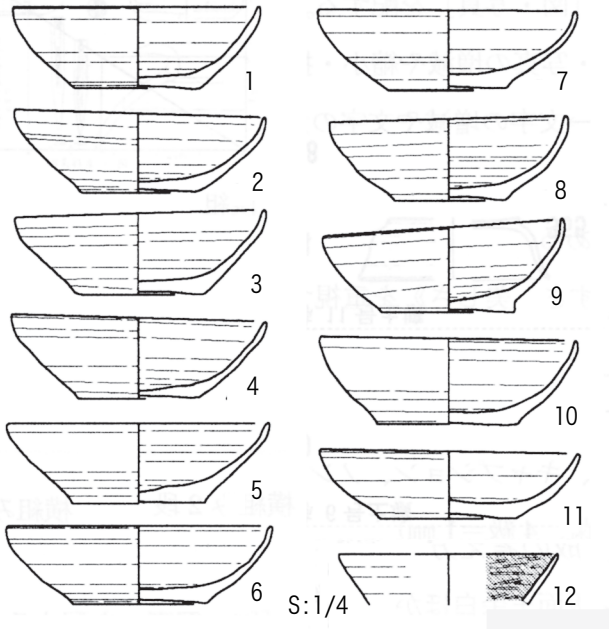


図 5　蓼原遺跡土器だまり出土遺物

編年作業

編年のための視点

鎌倉を中心とした地域から出土したかわらけの分類を行なった（表 1 ～ 4）。それらを出土層位を主な観点として並べたのが、図 2 と 3 である[11]。これに年代を与えるにあたっては次の 3 つの課題がある。すなわち、遺物編年において一括遺物を重視する見解（①）は、指標となる紀年銘資料や年代をある程度推定できる遺構に伴う遺物資料が得られない時に順列組み合わせの論理を用いるとする考古学の基本的手順を示している。いわゆる hord と記述される単独埋納品の複数の遺物群を比較する手法である［レンフルー・バーン

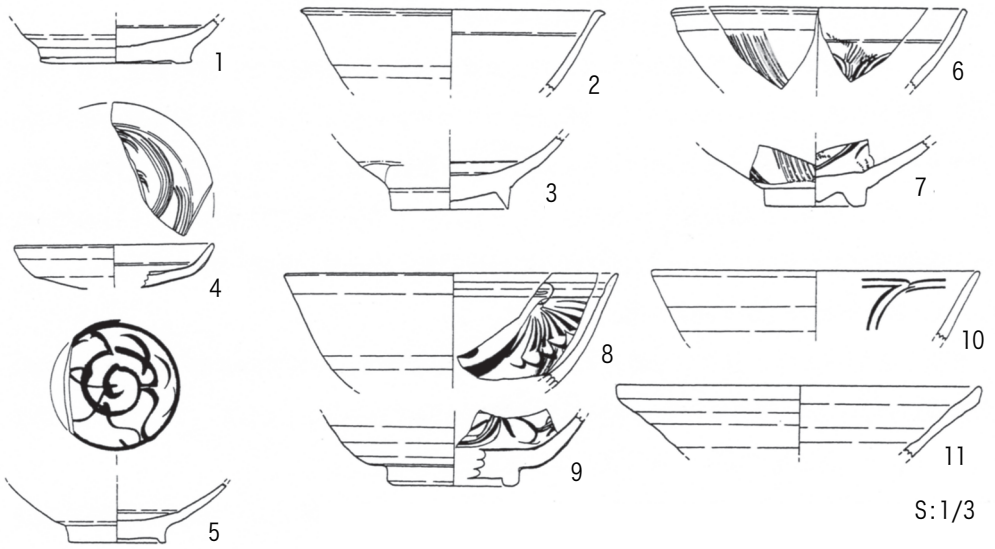


図６　千葉地東遺跡河川下層伴出遺物

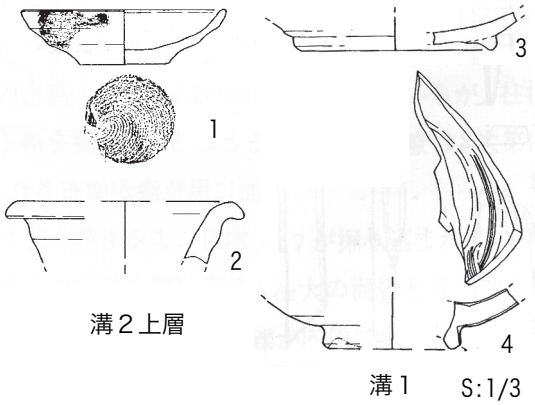


図７　横小路周辺遺跡伴出遺物

2007]。そして、近年の編年研究で一括遺物に重きを置こうとする意見（②）では、編年対象となる遺物種とともに出土する共伴遺物種の年代をもって対象の年代を比定し、編年を組み立てようとしている。さらに大点数の編年対象遺物が出土することをもって一括遺物と呼称する場合は、対象遺物の同時点における複数型式の同時性を認め、それら型式群の中における主体的型式をもって所期の年代指標型式を見出そうとする（③）ものである［かわらけ研究会（編）2016］。最後の視点は、いわゆる考古学用語の「一括遺物」ではなく、「大量廃棄遺物群」とでも言えるもので、そこに同時期性を示す一括性は保証されていない[12]。

さて、70 年代以降の調査と出土状況を鑑みるならば、①の視点を振り回す理由は見あたらない。他方、②の視点は編年作業にあって、対象とする遺物の編年がある程度拠り所となりえるものであれば、基本的手法である。しかしながら、共伴と伴出を混同している場合は大きな過ちを犯す危険性を孕んでいる。他方、③の視点にもとづく手法を用いるとしても、そこに同時期性を担保する一括性の確認が必要である。つとに出土点数の少ない資料しか扱えない状況下では、心しておく必要があり、それを克服するためには愚直に層位と層序関係を基礎とし、伴出事例を数多く積み重ねることが肝要である。（②と③の一括遺物による年代決定法がかわらけ編年において、ずいぶんと危なっかしいことを筆者はかつて示した［宗臺 2005］[13]。）

その様な遺物出土状況下においては、一括遺物の事例をも視野に入れながら、一定程度の年代を想定しうる遺構出土の伴出遺物群の検討と、さらにある程度の同時性を窺える事例を積み重ねることが大切であろう[14]。そうした伴出遺物の検討にあって、本稿では生産後に比較的短期間に廃棄された可能性が高く、鎌倉での出土が頻繁であり、さらに近年、その生産年代が明らかになりつつある山茶碗に焦点を当てることとする［藤澤 1994、1995、2002、2013；河合 2004；松井 1993；溝口 2005；尾野 2013；鉈（編）2013；中野 2013a・b；柴垣（編）2004］[15]。しかしながら山茶碗、とくに鎌倉にもたらされた山茶碗は、尾張型のなかでも知多半島産のものがほとんどをしめているため、13 世紀後半には姿を消してしまう［宗臺富貴子 2004］。そのため、山茶碗だけを基準指標とするわけにはいかない。そこで、常滑窯の甕の型式変遷や鎌倉に数多く搬入された古瀬戸製品の年代を手がかりにする[16]。その他に、当然これまでに触れてきた瓦の廃棄年代や、寺院堂塔の建立年代などと他の遺物との関係などを主な視点とし、加えて少数ながら理化学的年代測定結果

も参考する。

伴出資料年代

古代末の土師質土器にかわらけ作出に向けた端緒を大小に法量分化した武蔵国多摩ニュータウン No.692

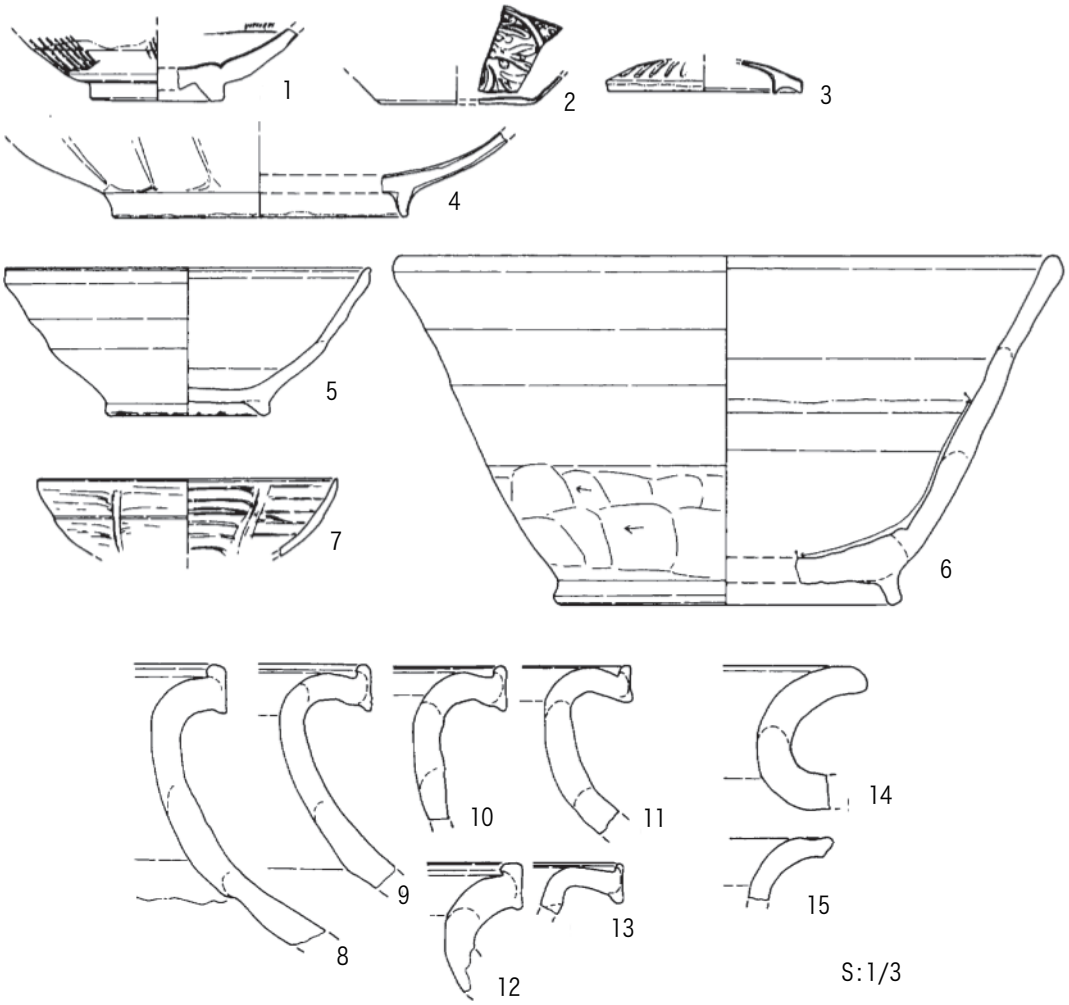


図 8　大倉幕府周辺遺跡（雪ノ下 3-606-1）溝 11 下層伴出遺物

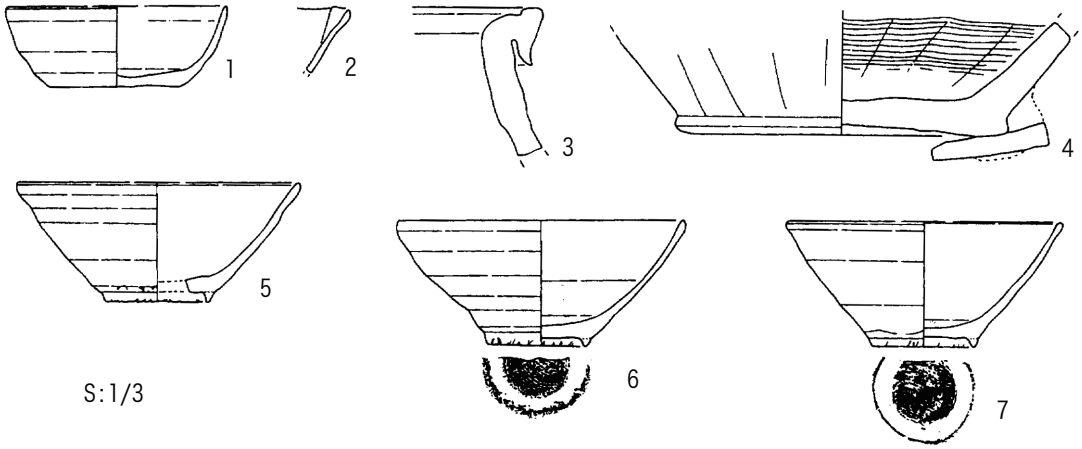


図 9　笹目遺跡土拡 16 伴出遺物

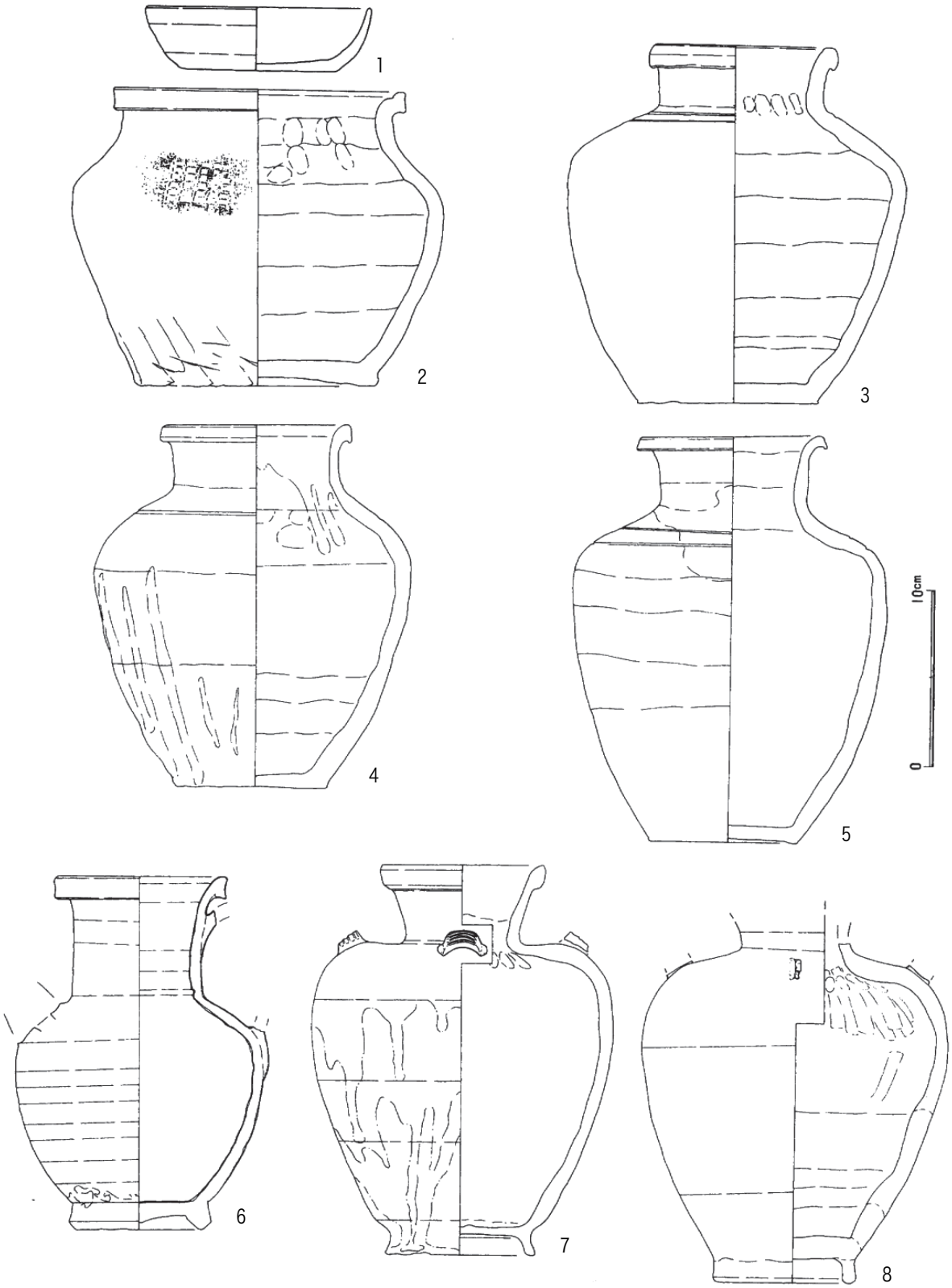


図 10　佐助ヶ谷やぐら伴出遺物

遺跡例に見い出しえる。多摩ニュータウン遺跡の全てが底部回転糸切りで、分厚い底部から内彎気味もしくは真っ直ぐに開くように立ち上がるかわらけは、蓮生寺との係わりが想定されている平場作りのための段切り遺構下層から出土している。同下層からは、舶載磁器をはじめ国産陶器類が出土している。なかでも入手から廃棄までの期間が短い山茶碗を見ると、尾張型、渥美・湖西型と東濃型がある（図 4）。報告では尾張型の碗と小碗ともに、口縁の外反が残っていることから 12 世紀中ごろ～後葉までの渥美・湖西型の碗形とされているが、高台が潰れ、また東濃型に皿形が出現していることから、12 世紀第 3 四半期と考えられる。

三浦半島の東京湾側の地域でも古手のかわらけが出土している。横須賀市の蓼原遺跡 JK グリッド付近の土器集中地点、同八幡社遺跡神社前地点砂堆上、それに蓼原東遺跡などから 12 世紀代とされるかわらけの出土が報じられている。なかでも蓼原遺跡の事例は口径 14 ㎝前後・底径 6 ～ 7.2 ㎝・器高 4 ～ 4.7 ㎝の法量にロクロ目が顕著である［中三川 1998、2009、2015］。その内湾気味に立ち上がる器型は、前節の分類における I*ℓ*A2 と 1*ℓ* B1 である。八幡社遺跡神社前地点のかわらけは、 I*ℓ*A2 と同時期の 1*s*A2 である。ただし、蓼原遺跡ではかわらけに伴って黒色土器が出土しており（図 5−12）、これをどのように理解するのか、課題として残る。

1*ℓ*A2 が出土した千葉地東遺跡河川最下層からは白

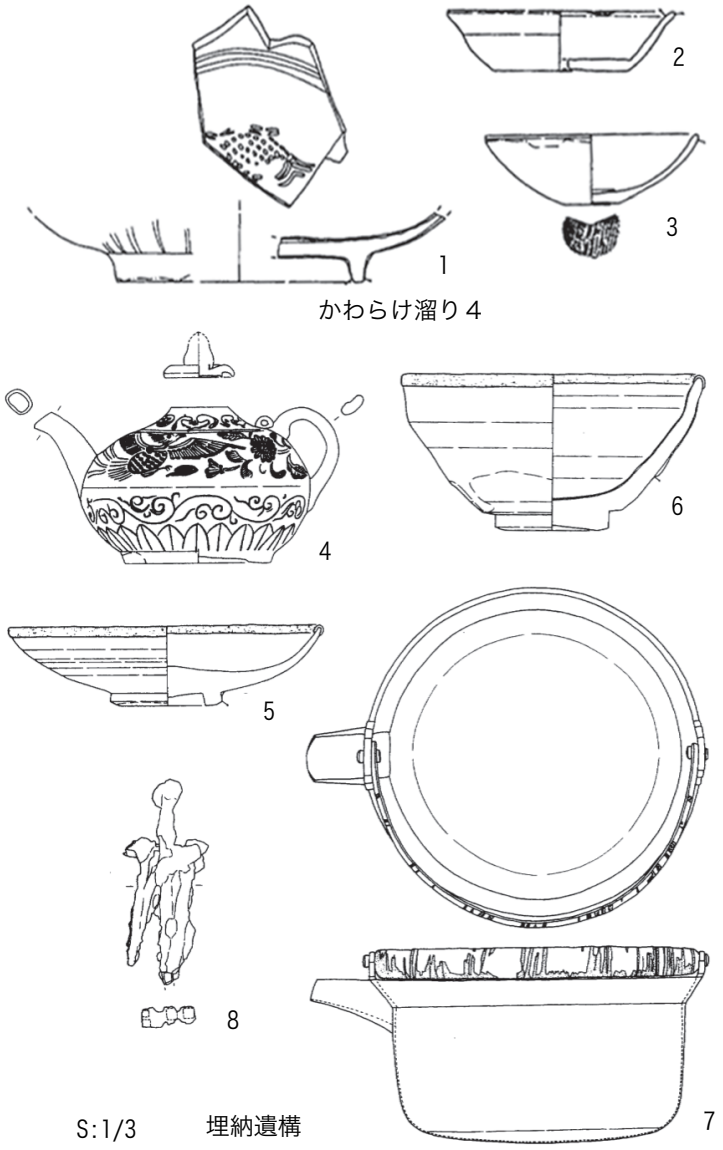


図 11　笹目遺跡第 1 面遺構伴出遺物

磁の碗（椀Ⅴ4a)、櫛目文青磁碗（椀1b)、龍泉窯青磁碗（椀Ⅰ）に猿投窯（尾張型）の山茶碗（図6−11）が伴出している。山茶碗は口縁が厚くなるものだが、玉縁状になりきっていないものの口縁の外反傾向を窺うことができ、5型式古〜中段階の間を示している。これらの遺物群は舶載磁器が12世紀の中ごろより古いものから後半を、山茶碗は12世紀第4四半期の中ごろを指し示している。他方、千葉地東遺跡と多摩ニュータウンNo.692の小型かわらけ器型（1*s*A1と1*s*A2）の中間と思われる小型かわらけを出土する鶴岡八幡宮境内の国宝館用地では白磁碗（椀ⅡまたはⅤ）が伴出しているという［服部1992］。国宝館用地の出土遺物が若干遡る可能性があるものの、Ⅰ*ℓ*A2とⅠ*s*A2は12世紀第4四半期の後半までは降らない中ごろと位置付けられる。そして、鎌倉で用いられたⅠ*ℓ*A2が三浦半島の蓼原遺跡など平作川流域の谷戸地域でも使用された可能性が高く、鎌倉に限らず広く相模南部の12世紀第4四半世紀中頃に用いられたのだろう。

図7−1・2は1*ℓ*A2とⅠ*ℓ*B2さらにⅠ*ℓ*C1が出土した横小路周辺遺跡溝2上層の伴出遺物である。1の山皿は東遠江型のⅡ期の後半（12世紀第4四半期）の所産。2は渥美窯産の小壺の口頸部である。口唇部が折り返された2a段階（12世紀第4四半期）であろう。横小路周辺遺跡の1遺跡内だけの推移では、この溝2上層以前の溝2下層、さらに古い土壙1の時点で手づくねかわらけが存在している。本遺跡開始期もしくは、その直前に手づくねかわらけを使用するようになったと考えられる。その横小路周辺遺跡の中世最新遺構である溝1出土品にはⅠ*ℓ*A2、Ⅰ*ℓ*C2、Ⅰ*s*C、Ⅰ*s*A3とⅡ*ℓ*A2、Ⅱ*ℓ*B2、Ⅱ*ℓ*C2、Ⅱ*s*C2のロクロ成形と手づくね成形のかわらけの低平化した型式が併在し、伴出遺物には常滑窯（尾張型）の3または4ではないかと思われる山茶碗底部の他に龍泉窯青磁椀Ⅰ−3aがある（図7−3・4)。いずれも12世紀後半、山茶碗の年代をとれば、第4四半期末となる。同一遺跡内の短期間の遺構変遷のなかで、手づくねかわらけが現れ、急速に器型が移り変わっていることがわかる。

Ⅱ*ℓ*C1とⅡ*ℓ*C2を出土した遺跡に大蔵幕府周辺遺跡・荏柄38−1のかわらけ溜まり1がある［馬淵1993］。

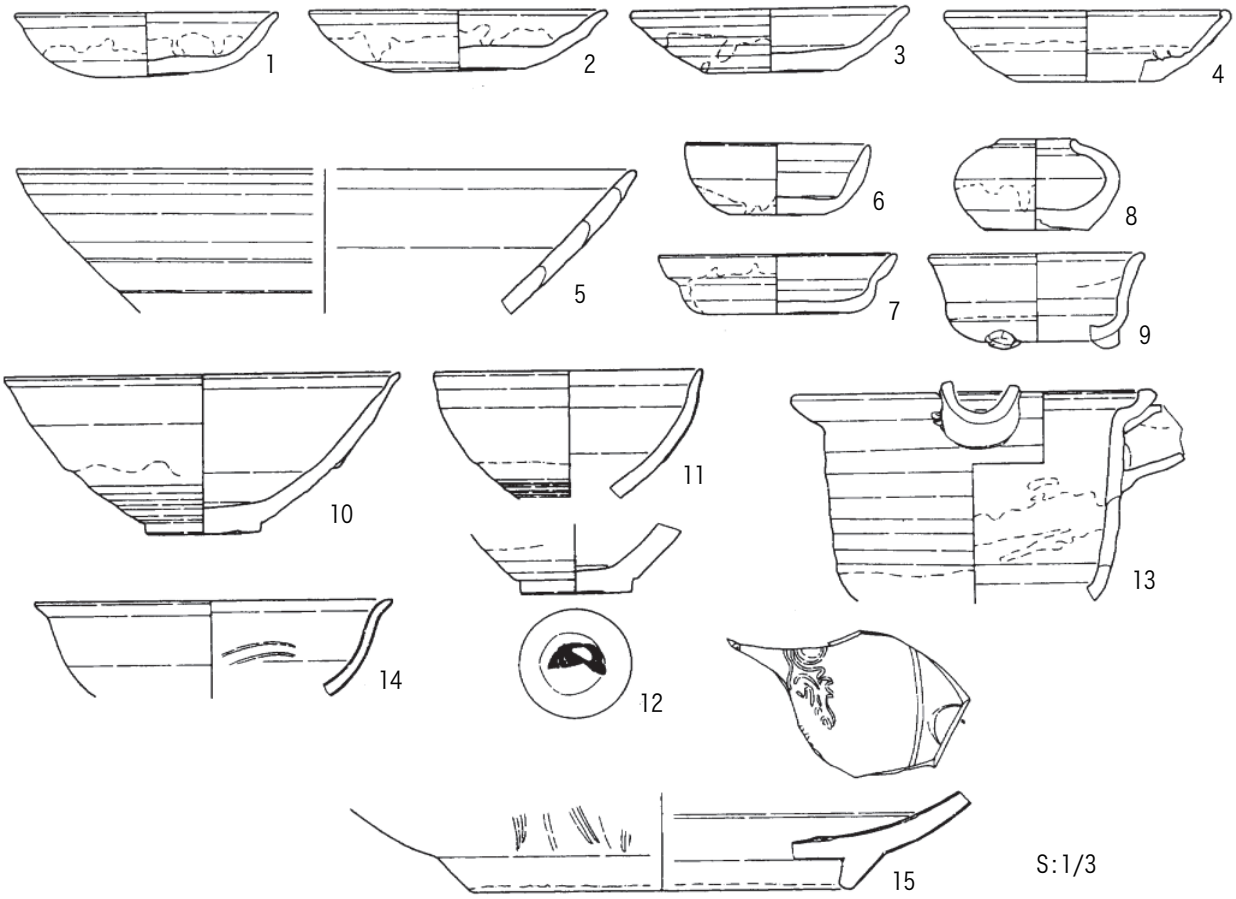


図12　上杉氏憲邸跡伴出遺物

伴出した遺物は上に挙げた手づくね成形かわらけの他に、ロクロ成形 I ℓD1 の器高のやや低いものと龍泉窯青磁椀 I−4a と I−6a で横小路周辺遺跡の伴出遺物との齟齬はない。次の D 型の伴出遺物年代を考慮に入れると、横小路周辺遺跡の溝 1 や荏柄 38−1 のかわらけ溜まりに現れる C 型の出現時期を 12 世紀末から 13 世紀初頭にまで広げて考えてよさそうである。

同じく大蔵幕府周辺遺跡・荏柄 38−1 で I ℓD1 が現れた土壙 1 の伴出遺物は、永福寺 I 期瓦のみであったが、ほぼ同様のかわらけと永福寺 I 期瓦を出土する遺構が大蔵幕府跡周辺遺跡・雪ノ下 3−606−1 地点の溝 11 下層である［菊川編 1993］。櫛目文青磁椀 I−1b、

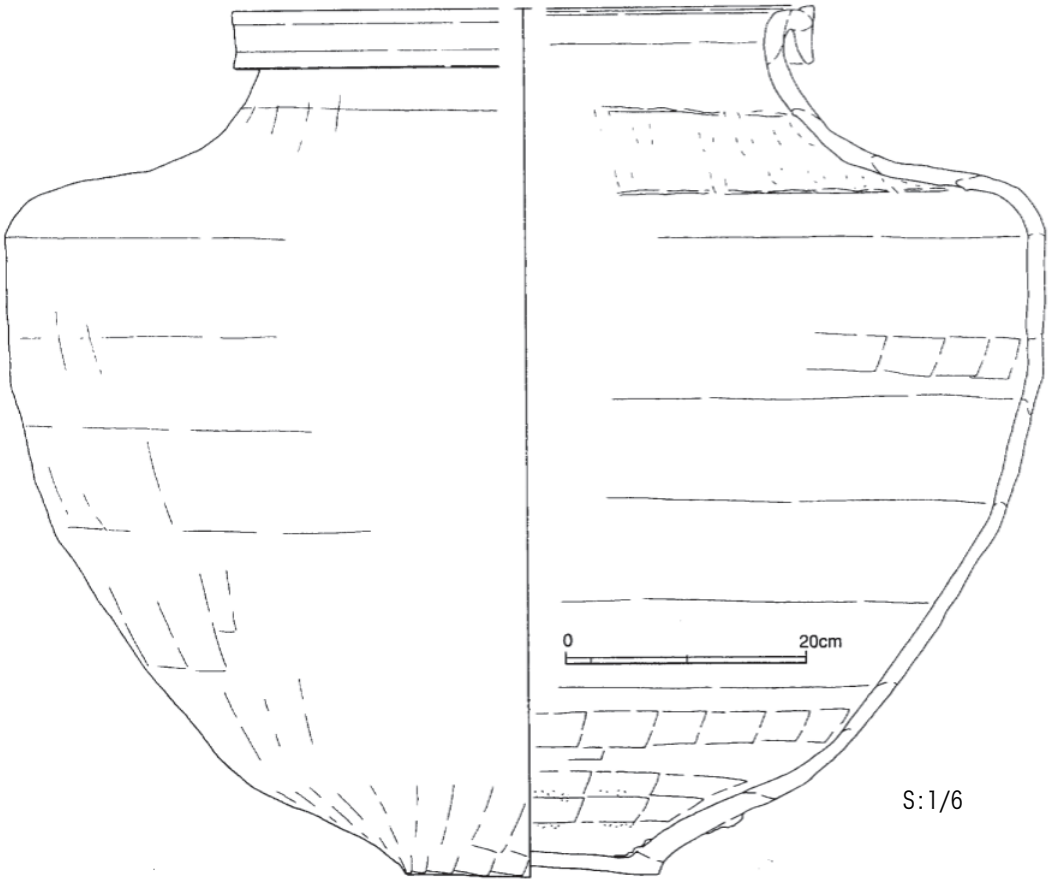


図 13　朝比奈砦納骨穴骨蔵器

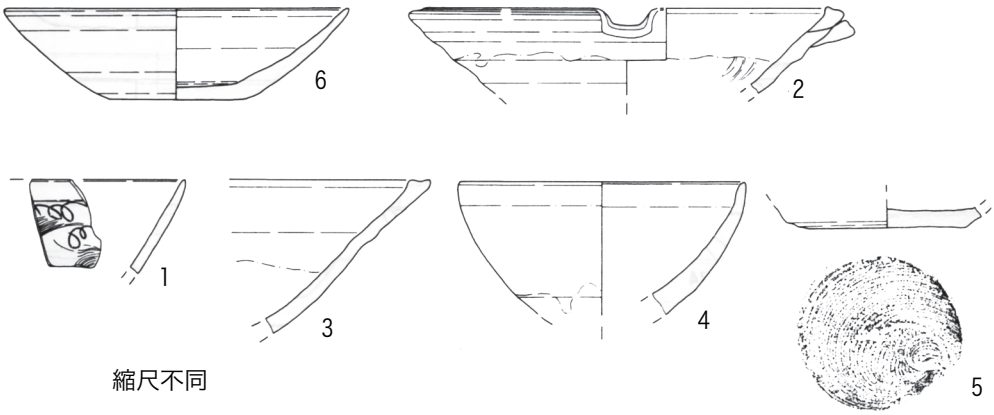


図 14　大倉幕府周辺遺跡（荏柄 58-4）かわらけ溜り 4 伴出遺物

青磁蓮弁文鉢、白磁皿X-b、青白磁合子蓋などの舶載磁器に、楠葉型瓦器埦、尾張型（常滑窯産）山茶碗第2段階5型式、片口鉢Ⅰ類5型式や常滑窯産甕4～5、さらに渥美窯産甕の2a・bの口縁部片である（図8）。渥美窯産甕は古いが、常滑窯産の甕は4型式を中心に5型式への兆候を示すもので12世紀末から13世紀第1四半期を中心としているものの、13世紀中ごろまでの山茶碗や片口鉢が指標となろう。

1ℓE型が現れる時期の良好な伴出遺物を伴ったかわらけの出土は見られないが、型式分類で取り上げた今小路西遺跡（御成小学校内）の第4面では舶載磁器の龍泉窯青磁椀や鉢（坏）のⅢ類、白磁皿Ⅸ類とX類、国内陶器の常滑窯産甕5～6a型式、尾張型と東濃型山茶碗、片口鉢Ⅰ類がそれぞれ6a型式とその併行期を示している。常滑窯産甕の搬入から廃棄までの期間がかなり短くなっているが、いずれもが13世紀中ごろから後半、片口鉢と山茶碗では13世紀第3四半期を指し示している。この時期を最後にして鎌倉には山茶碗がほぼ搬入されなくなる［宗臺富貴子1996、2004］[17]。

また、この時期を最後に手づくね成形かわらけが姿を消す。Ⅰ類のE型が中型製品を作り出し、それまでの大・小のセットで用いられていたかわらけが大・中・小の新たな用いられ方を示す新たなセットを生み出したこと、そして次にみるそれまでの器型変遷から一線を画した器型と従来になかったほど精良な胎土を持つ新たなG型が生み出される事象が手づくね成形かわらけ消失の背景にあったと思われる。

従来「薄手丸深」と呼ばれたG型の出現時期を示すような伴出遺物を伴うかわらけがまとまって出土する遺構はE型と同様に確認されていない。筆者はその確立期に建長寺法塔再建立柱年である1328年（建長寺元弘指図）を挙げている［宗臺1992、2002］。法塔再建時である建長寺ⅡA期とほぼ同時期と考えられるのが、今小路西遺跡（御成小学校内）の第3a面であり、より下層の3b面がG型出現期にあたる。今小路西遺跡（御成小学校内）北谷3面5区かわらけ溜まり1が3b面の古層を示している。Ⅰℓ D1が残るなかでⅠℓE1の他にⅠ㎡Eが少数ながら現れている。加えて若干の手づくね成形のⅡsC3も数点残されることが、この一群の古さを示している。伴出遺物は14世紀初頭を下限とする龍泉窯青磁鉢（坏）Ⅲ-1類が1点出土している。

今小路西遺跡の3a面でもやはり良好なかわらけと伴出遺物の組み合わせを見出すことはできない。そのため、3面全体の伴出遺物として国内陶器の瀬戸窯製品を上げるならば、前Ⅰb期の四耳壺、前Ⅳ期の卸目皿それに中Ⅲ期の折れ縁深鉢を挙げることができる。折れ縁深鉢の14世紀前葉以降をG型の確立期と措定したい。

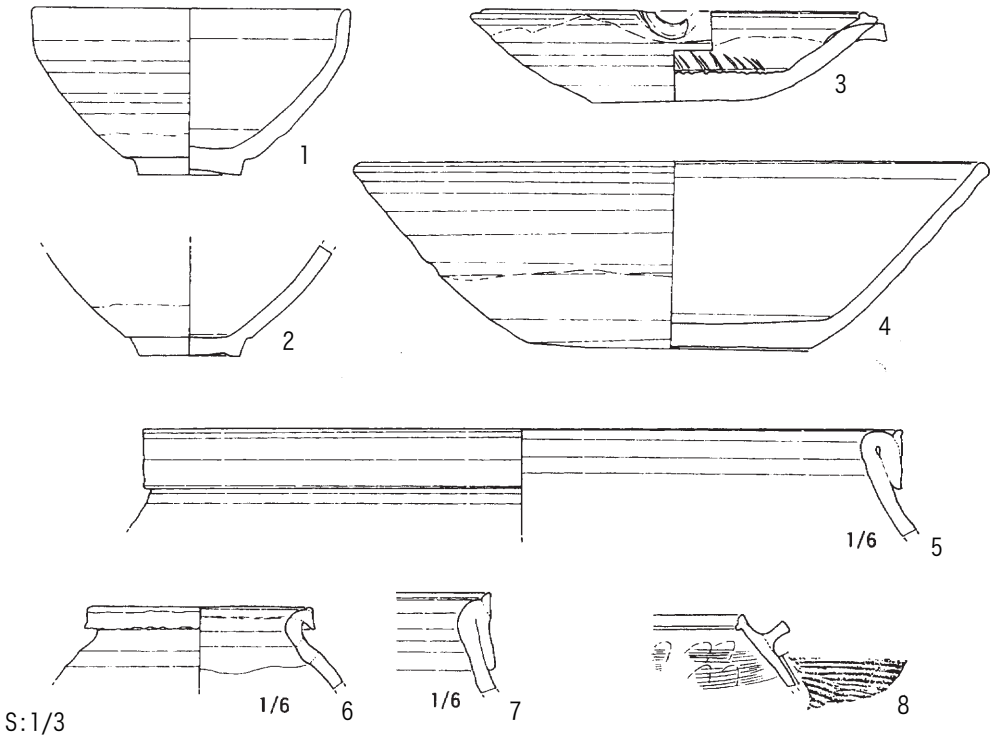


図15　保寧寺跡伴出遺物

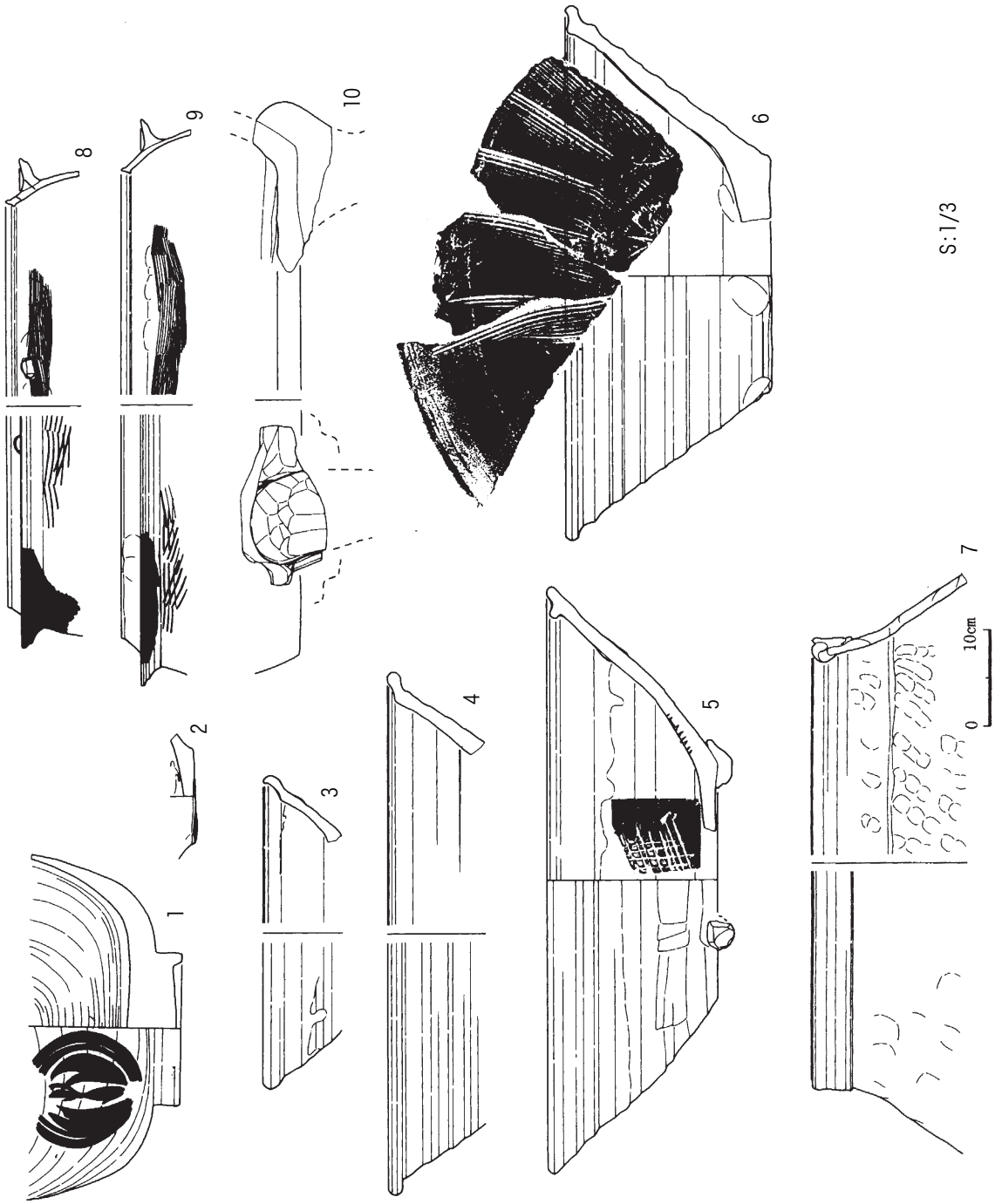


図 16　大倉幕府周辺遺跡（荏柄 38-1）井戸 13 伴出遺物

これに続いてＧ型に加えてＤ型の大・中・小化が始まる時期として笹目遺跡の土壙 16 の伴出遺物を挙げる(図 9)。瀬戸窯入子中Ⅰ・Ⅱ期、常滑窯産甕 6b(？)に東濃型山茶碗が 3 点出土している。東濃型山茶碗は第 5 型式から第 7 型式にかけての 13 世紀前半から半ばのもので、年代指標とはならい。笹目遺跡土壙 16 とほぼ同時期と考えられるやぐら内出土遺物群がある。佐助ヶ谷遺跡内の 2 号やぐら枡状遺構（納骨穴）にかわらけと共に蔵骨器の常滑窯（図 10-1 ～ 5)、瀬戸窯（図 10-7・8）の壺、それに白磁水注（図 10-6）が出土している。常滑窯産では 6 型式の広口壺とおそらくは 6 型式の玉縁壺。瀬戸窯製品では前Ⅱ期の四耳壺である。国産陶器は 6 点が 13 世紀代を示している。墓などの埋納品は特にやぐら内では随時追葬が行なわれ、やはり同一地点出土のかわらけとの同時代性を示していない。

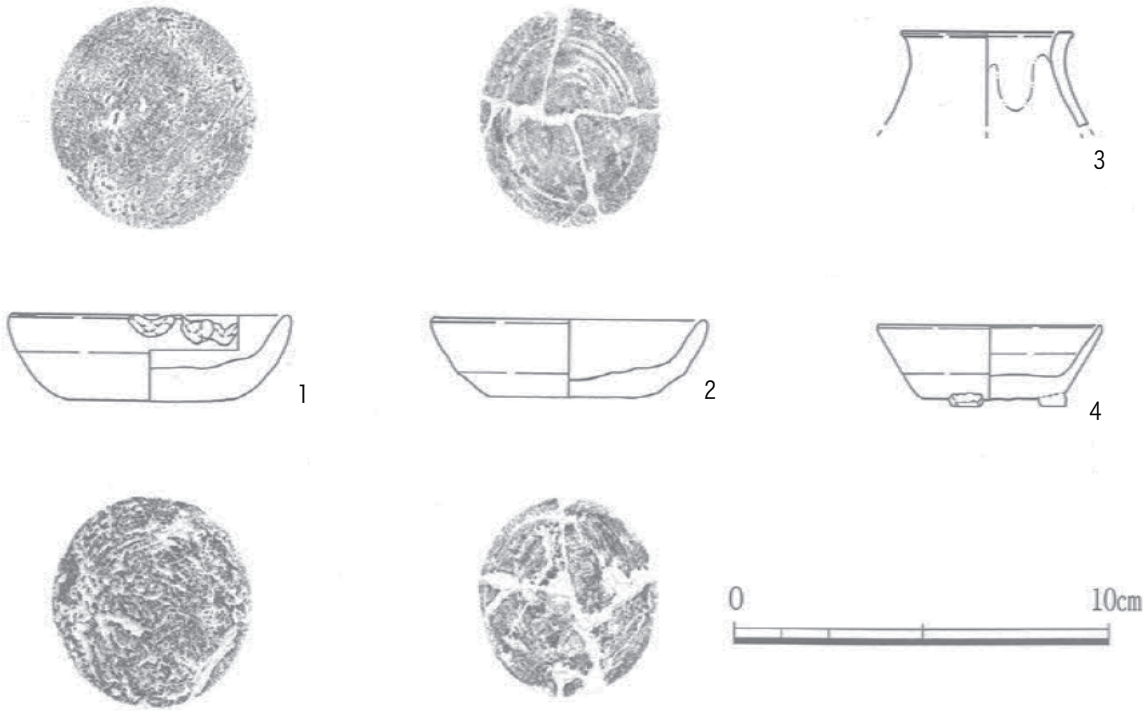


図 17　覚賢塔下出土遺物

これら伴出遺物が遺物の年代を示さない事例にたいして、埋納遺物において同時代性を示す一群がある。まずは先と同様に笹目遺跡第 1 面かわらけ溜まり 4 である。かわらけは 1*m*G の口頸が縮小して 12 ㎝に満たない G 型の後半期を示す。これらと伴出したのが、白磁皿Ⅸ−1a、龍泉窯青磁鉢（坏）Ⅲ−3c と搬入品は 14 世紀前半までを示すが、東濃型山茶碗は東大洞 1 号様式の底径の非常に小さな無高台のもので尾張型の 10 型式、古瀬戸の後Ⅱ期に相当するものである。14 世紀末期から 15 世紀前葉となる。また、同遺跡同面の埋納一括遺物群は、銅製銚子の中に瀬戸窯天目茶碗、白磁水注と皿が納められていた（図 11）。舶載品の水注は元代の 13 世紀後半から 14 世紀中ごろのものだが、覆輪のある白磁皿は 14 世紀後半から 15 世紀前半代に帰属する。そして、瀬戸の天目茶碗は古瀬戸後ⅡまたはⅢ期の所産で同一面に発見されたかわらけ溜まり 4 と同年代を示している。瀬戸窯製品と舶載の白磁皿がほぼ同時期のものであり、入手後に間を置かずに埋納された例であり、G 型の最終時期を明示している。

これまで数は少ないながら、各かわらけ型式ごとの伴出遺物を見てきた。G 型の初現と確立期については同型のかわらけが複数の生活面にわたって確認されている今小路西遺跡（御成小学校内）の第 3a・b 面に置き換えて確認した。そして、G 型の後半期の年代を笹目遺跡の第 1 面に求めた。その結果、G 型は非常に長期間にわたって存続し、さらにその形状は D 型にも及び、鎌倉のかわらけを特徴づけるものであった。その G 型が消失した後には、器高を高くした G 型の後半期を継ぐようにして、新たな H 型が登場する。遺構出土ではないが、禅秀の乱による火災層出土品に H 型とともに多様な伴出遺物が上杉氏憲邸跡出土品にある（図 12）。古瀬戸後Ⅰ～Ⅱ期の縁釉小皿、卸皿、折縁小皿、平碗と柄付片口、古瀬戸後Ⅱ期の天目茶碗 B 類と直縁大皿、それに中期後半ほどの小碗や瓦質火鉢などがある。

これより時期の下る 1*s*H1 と 1*s*J1 の中間の小型かわらけを 1 点のみ出土した朝比奈砦の納骨穴出土の臓骨器は常滑窯産甕 9 型式で 15 世紀前半代の所産である（図 13）。

Ⅰ*ℓ*J1 型のかわらけを確認した大蔵幕府周辺遺跡・荏柄 58−4 地点のかわらけ溜まり 2 と同一面発見のかわらけ溜まり 4 に伴出遺物がある（図 14）。白磁の碗は内面に劃花文を施すもので、Ⅷ類か。2 と 3 は常滑窯産片口鉢Ⅱ類の 9 ないし 10 型式であろう。4 は古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ期の天目茶碗。5 は入子で、底部片のみのため型式判断できないが、14 世紀代までのものであろう。片口鉢Ⅱ類と瀬戸天目の型式からは 15 世紀の中ごろが考えられる。また、保寧寺跡の第 1 面遺構内出土遺物群にこれらと似た遺物構成と年代を窺うこ

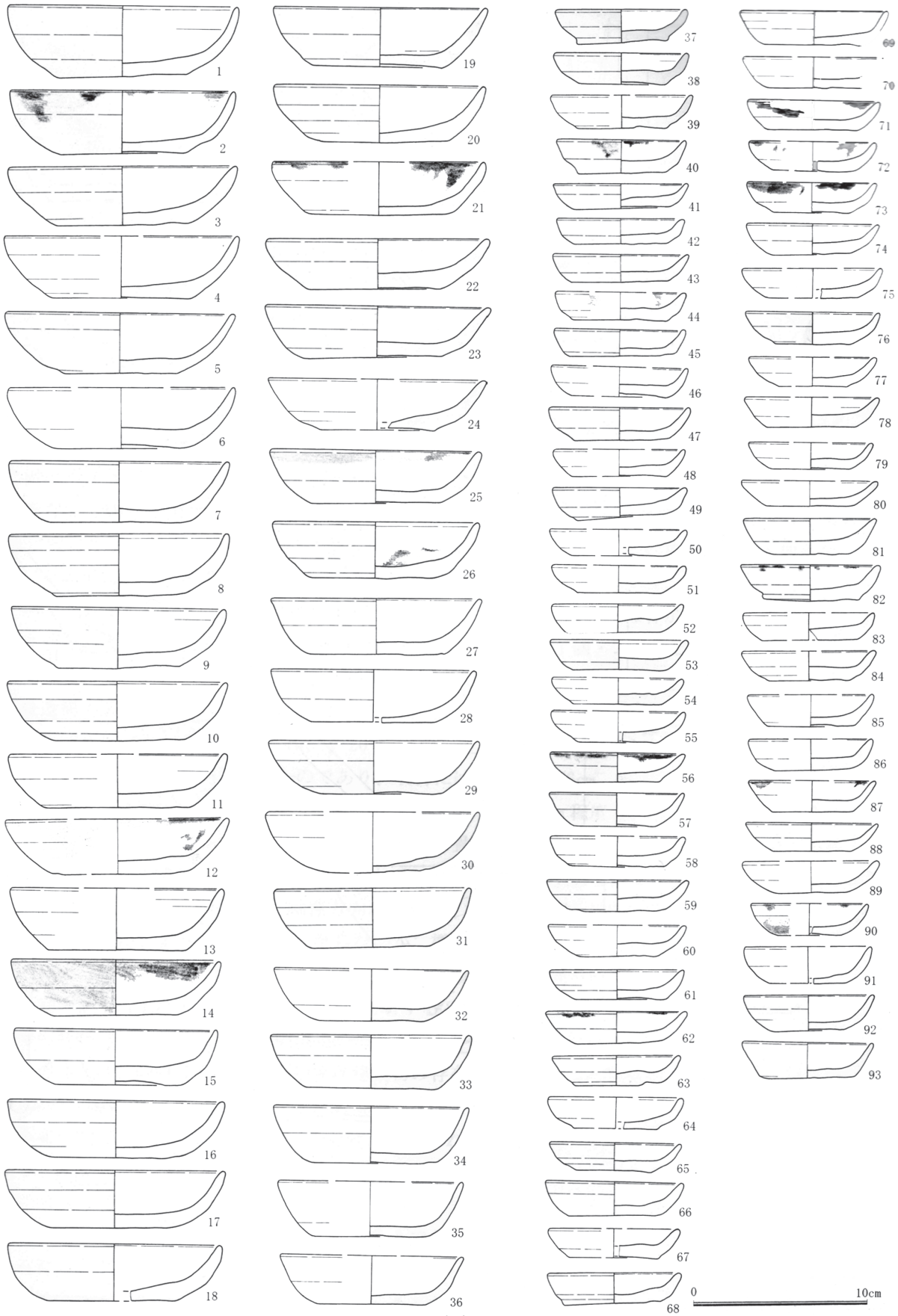


図 18　若宮大路周辺遺跡（雪ノ下 1-1484・190-1）建物 1 出土遺物（1）

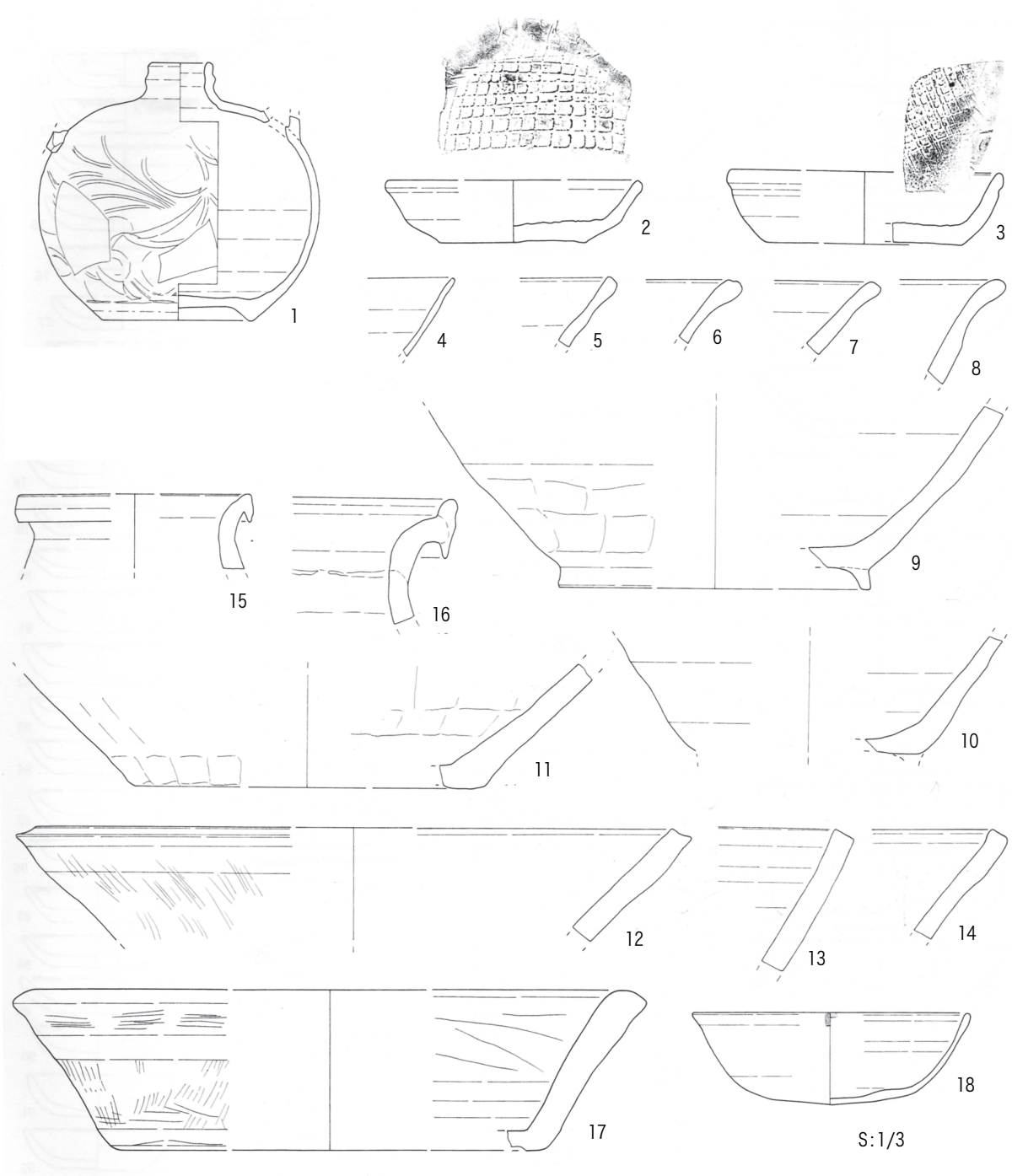


図 19　若宮大路周辺遺跡（雪ノ下 1-148・190-1）建物 1 出土遺物（2）

とができる（図 15）。常滑窯産甕は 9 型式で、古瀬戸後Ⅱ～Ⅲ期の直縁鉢と卸皿それに古瀬戸後Ⅲ期の天目茶碗である。8 は東海系の A4 類土鍋である。

さて、本稿で取り上げる最後のかわらけ型式 I ℓK 型を認めた大蔵幕府周辺遺跡荏柄 38-1 地点井戸 13 の伴出遺物は、10 型式の常滑窯甕［中野 2013a］の他に古瀬戸後Ⅱないし Ⅲ期の折縁中皿に古瀬戸後Ⅲ期の折縁大皿、古瀬戸後Ⅳ期古～新段階の卸目付大皿と擂鉢 A 類、それに尾張型と思われる内底面にロクロ目を残す平底の山茶碗底部片がある（図 16）。8、9 は東海系の A4 類土鍋である。10 は土製火鉢。東海系の陶器は 15 世紀後半の所産を下限としている。K 型のかわらけは、遅くとも 15 世紀の後半に存在し、陶器の保有期間を考えるならば、16 世紀前葉までの時期を

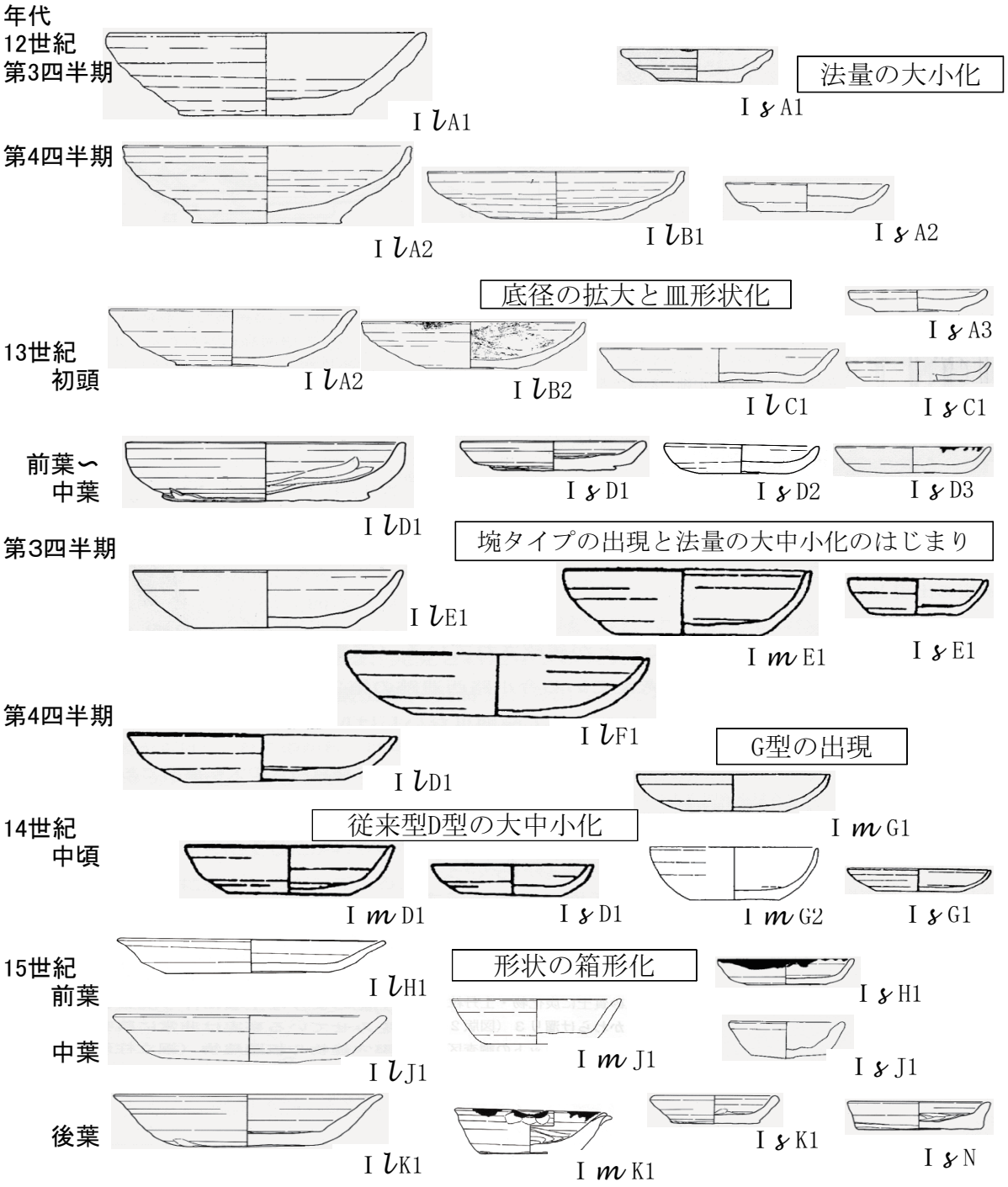


図 20　ロクロ成形かわらけ型式年代

想定しておく必要があろう。

16 世紀前葉以降のかわらけと他の遺物群の有り様は小田原地域でより詳しく調査されているため、ここでは立ち入らない。しかしながら、15 世紀末から 16 世紀前葉にかけての推移については［宗臺 2005］にて提示しているので、そちらを参照願いたい。

紀年銘資料

鎌倉およびその周辺から年号が記されたかわらけは出土していないが、紀年銘のある木簡や石塔が存在する[18]。なかでも 12 世紀後半に多宝寺住持であった覚賢の遺骨が葬られた覚賢塔は、14 世紀初頭の造立と考えられている。蔵骨器銘文により嘉元四（1306）年

二月に覚賢が亡くなったことが確認され、その追善のため翌年の徳治二（1307）年に五輪塔が現在の浄光明寺東方山腹に立てられたことが金沢文庫文書『覚賢一周忌諷誦文』に認められる。1976 年、石塔の解体修理に伴って発掘調査が行なわれたが、出土品の実態は不明のままであった［文化財建造物保存技術協会 1976］。近年、当時の参加者の聞き取りを含めた考古学的報告がなされた［古田土 2009］。

出土品は五輪塔下の納骨穴出土のかわらけ 2 枚と周囲の平場から古瀬戸鉄釉小壺 1 点、さらに出土地点不明の古瀬戸入子 1 点である（図 17）。古瀬戸製品は中Ⅱ期以降であろうが、型式限定は難しい。五輪塔造立時に埋納されたであろうかわらけは、1*s*D2 型の器高が高くなりつつあるもので、E 型で中型が現れ、G 型で確立して埦形化への影響を受けたものである。よって、からわけの型式年代と 14 世紀初頭と考えられる五輪塔造立年代との間に齟齬はないと判断できる。

放射性炭素年代測定値

年輪年代の植物学的年代測定の他、理化学的年代測定の例はほとんどないなか、2017 年に建物床下出土のクルミを用いた ^{14}C 年代測定が行なわれた［滝沢・安藤 2017］。建物は掘立柱板壁建物と称されるもので、その建物範囲内から出土した遺物を図 18・19 に掲げた。図 18 のかわらけは E 型を中心に D 型を含めた大・中・小型があり、小型には D 型が目立つ。明瞭な G 型は見出せないが、D 型にも大・中・小の 3 法量が現れているのが特徴である。図 19 はかわらけと共に伴

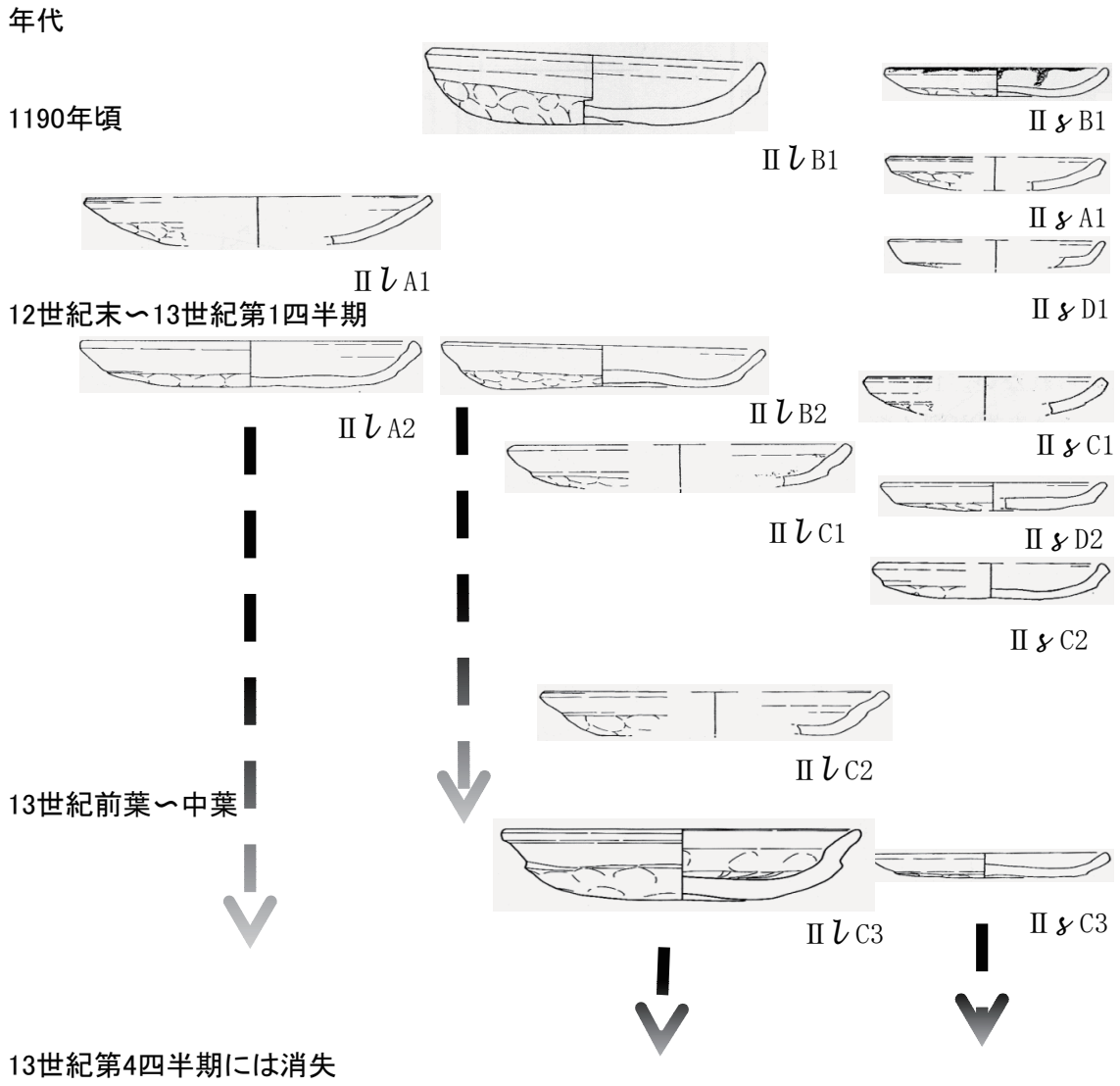
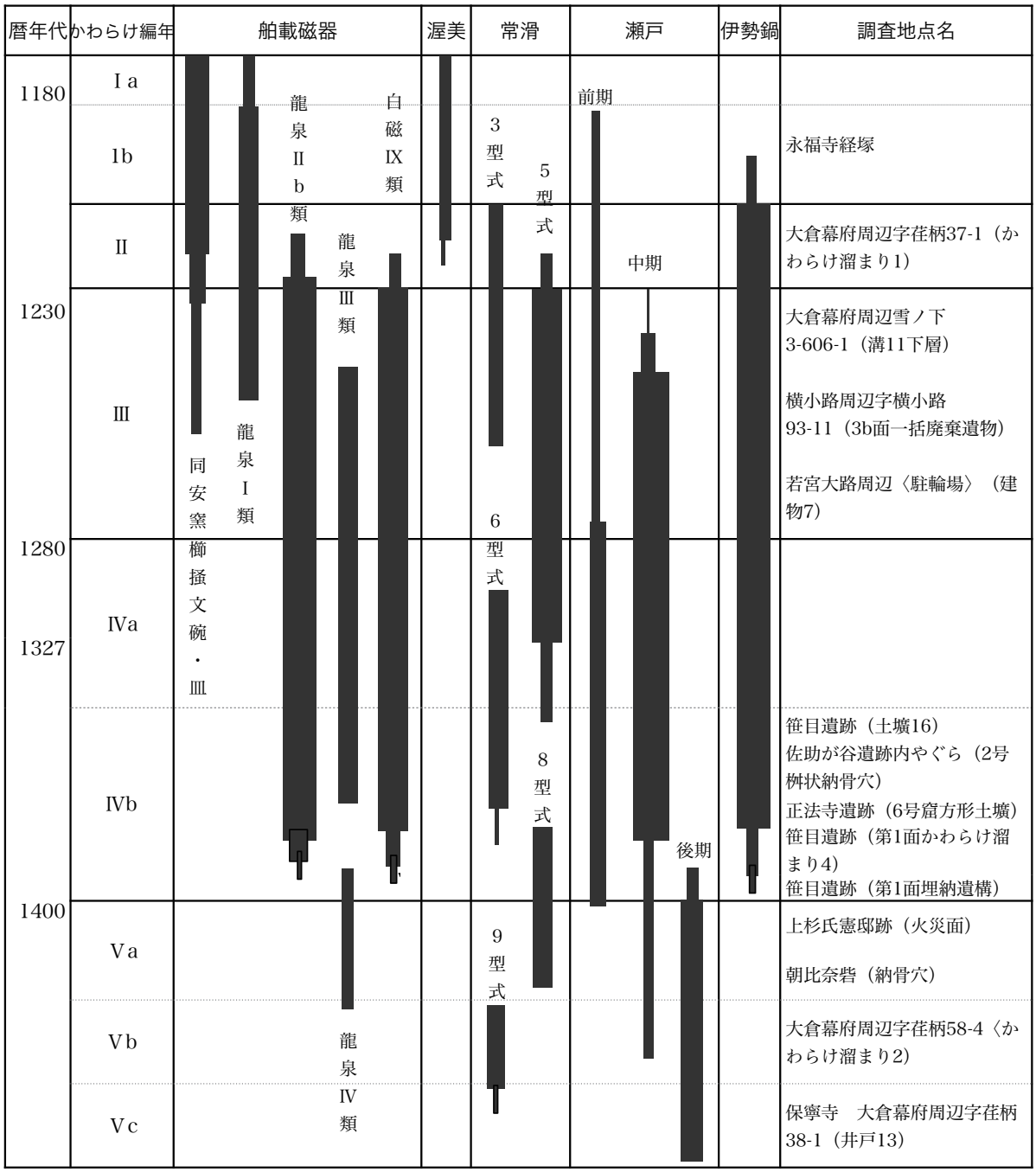


図 21　手づくね成形かわらけ型式年代

表５　鎌倉出土の土器・陶磁器消長概要



出した舶載磁器、国産陶器・土器である。国産陶器では、2・3が古瀬戸前ⅡとⅣ期の卸皿、4は東濃型山茶碗の明和あたりであろうか。5～10は常滑窯片口鉢1類で5～6a型式であろう。11～14は片口鉢２類で7型式である。8型式に向けて口縁端部の内側への張りだし傾向が見られる。15・16も常滑窯産の広口壺と甕で、ともに6a型式である。17は瓦質火鉢に18は瓦器質黒縁皿。かわらけと国産陶器類からは14世紀の中頃を想定できる。

こうした遺物群を内包した建物の床下から出土した2点のクルミの測定結果は次のとおりである。^{13}C濃度の補正を行なった^{14}C測定地は、600±20と650±20BPで暦年代範囲は1σと2σでそれぞれ複数示されているが、ここでは2σを示す。No. 1：1298calAD－1372calAD (73.4%)、1378calAD－1405calAD (22.0　%)；No. 2：1285calAD－1320calAd (41.1%)、1350calAD－1392calAD (54.3%) となる[19]。理化学的方法による年代測定は、測定資料が測定目的に

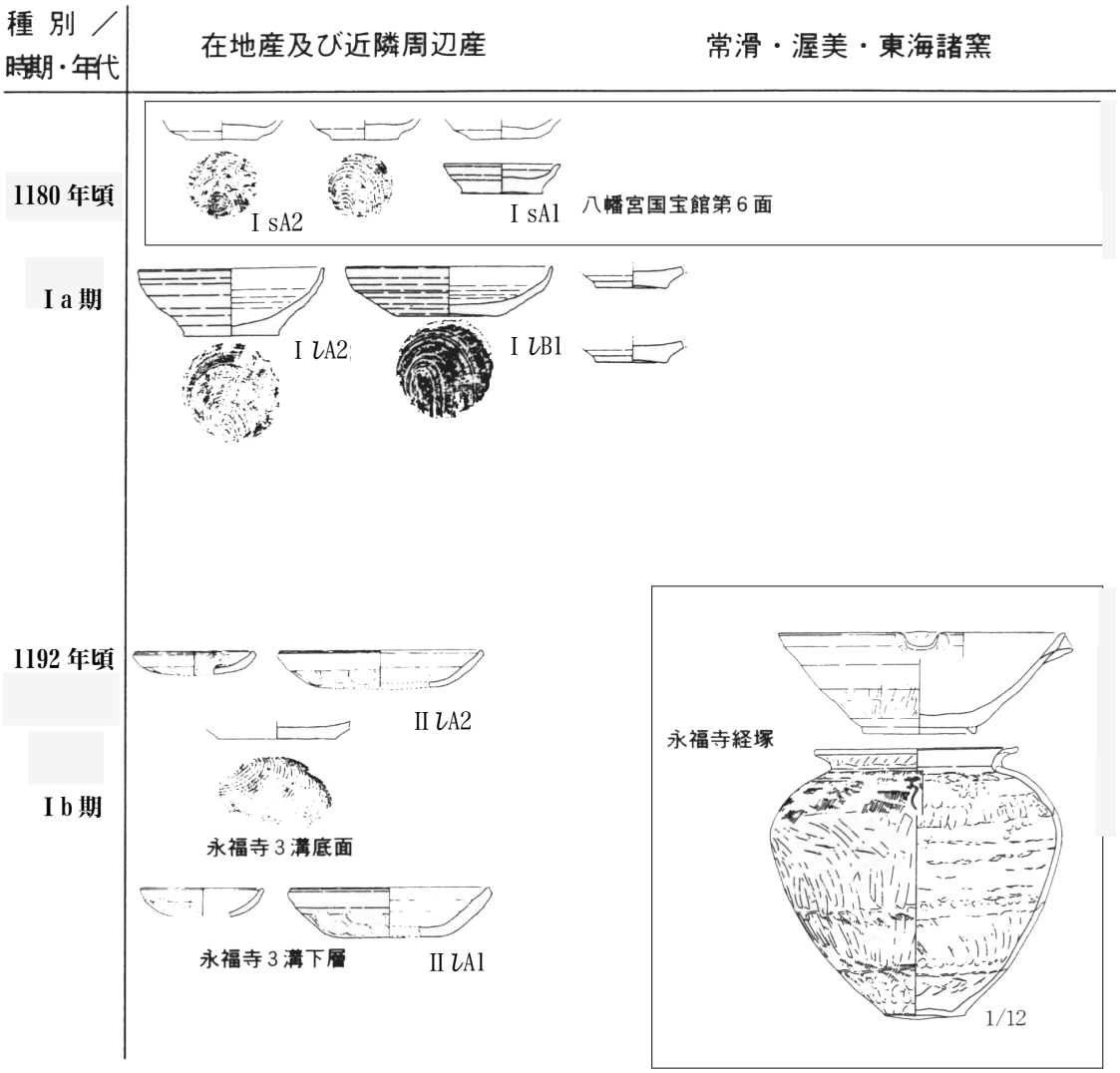


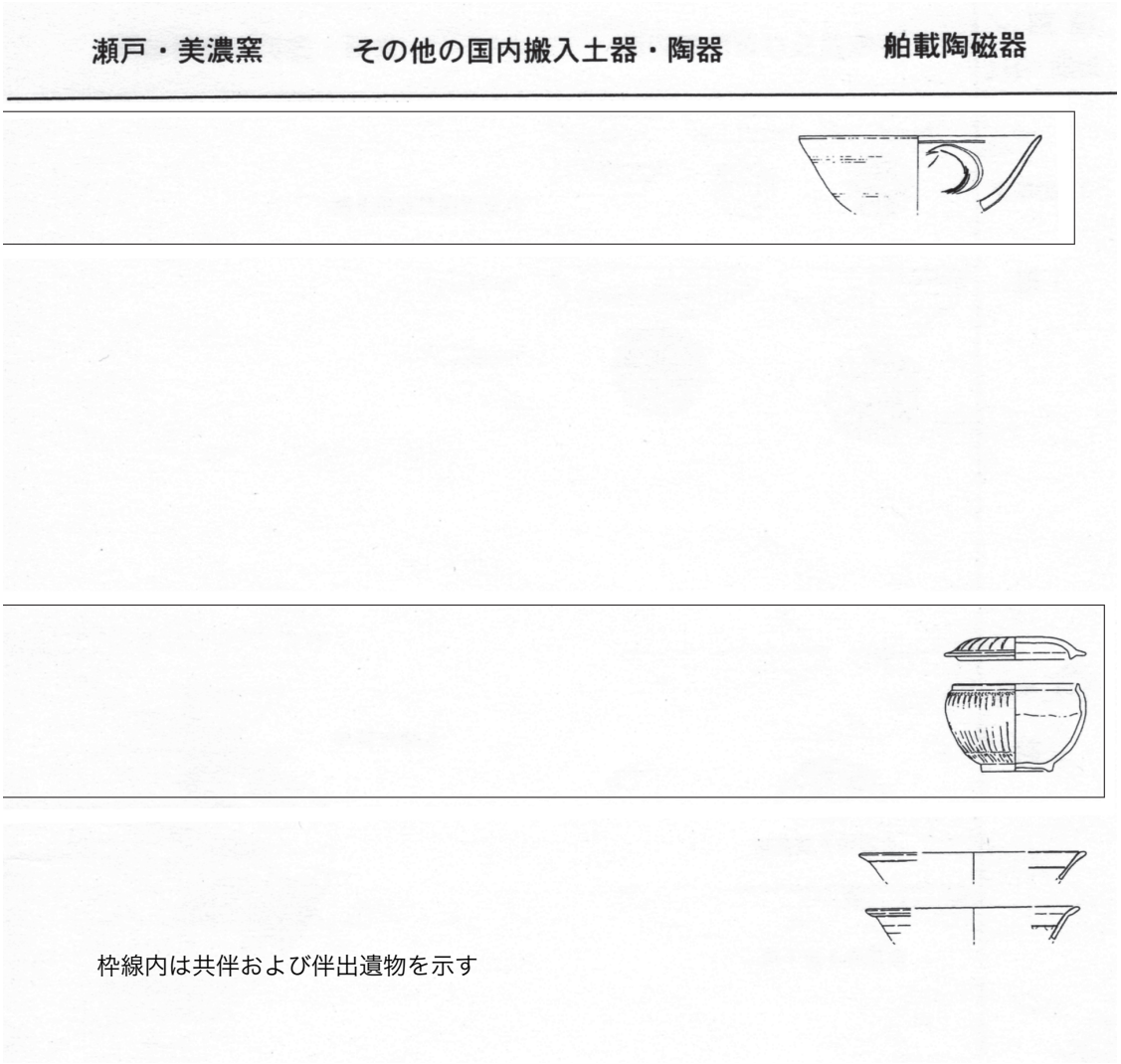
図22　出土遺物

とって最良であるのかといった資料属性の問題、そして数多くの資料測定結果から測定結果の蓋然性を高めなくてはならない。こうした前提条件があるなかで、1例だけの結果を云々するのは慎むべきであるが、測定結果と伴出遺物から導き出された型式年代の間に乖離がないことをここでは確かめておくにとどめる。

かわらけの編年

かわらけ各型式の年代はここで改めて述べるまでもなく、すでに伴出遺物を検討した節の中で記しておいたため、ここではすでに示した型式変遷表に年代を付与した図を再度掲げておく（図20・21）。年代決定の根拠となったのは、かわらけの各型式と共に基本的には同一遺構、良好な遺構出土品群が求められない場合は同一生活面から出土した伴出遺物であった。年代を求める主な視点は廃棄年の明らかな永福寺瓦であったり、使用期間が比較的短くその生産推定年代の蓋然性が高まった山茶碗、それに長期使用を想定できるものの出土例の多い常滑窯産甕などであった。加えて、型式を示さずに同様の作業を行なった結果を筆者は既に示しているが［宗臺2005］、多少の訂正が必要であることと、提示の際の印刷不良によって共伴資料を示す罫線等が不明瞭または不可視となっていたため、ここに再提示する（図22～28）。

これらの図から読み取れることは、本来の共伴遺物群が短期の使用で廃棄されるかわらけの年代を示す場合は非常に稀であること、舶載磁器や国産陶器にあっても長期使用を想定できる甕類は甕そのものの編年の幅が広いこともあり、伴出遺物群の廃棄年を想定するにはおおまかな括りでしか有効でないことを示している。本稿で扱った遺物群にあっても、多くはそれら遺物群の上限を限定しえても、下限や廃棄年を推し量る



編年図（1）

材料となることは少なかった。また、瀬戸窯製品でも壺類も同様であるが[20]、消費財であったろう卸皿や折縁皿などは年代決定に有効な資料であることがこれらの図から読み取れる（表5）[21]。

今一つ重要な視点は、かわらけの特定型式、D、E、G型式、なかでもDとG型式が多年にわたり存続し、また各型式が併存して展開する様相である。なかには法量を変えながら存続する例がある。Ⅰℓ D1・2・3やⅠ㎡G1と2などである。法量をもって型式差とするならば、別型式を設定するべきかもしれないが、内底面のナデや外底面のスノコ痕など技法的、そして胎土にも違いは見られず、プロポーションを決定する成形時の所作を念頭に新たな型式を設定しなかった。そうした成形時の所作、そしてG型における胎土の特異さと長期におよぶ型式存続は、多型式の併存と共に土器生産における複数の工人集団を想定させる。そうした工人集団を探る前提として、法量の変化を論じた宗墓富貴子の論考を見ることとする［宗墓富貴子 1991］。

宗墓はかわらけの法量計測結果を今小路西遺跡（御成小学校地点）の各生活面ごとの口径、器高、底径そして底径口径比で示している[22]。口径は小型の大小分化を経て中型が現れるとし、15世紀末から16世紀初頭、本稿におけるⅠℓK型の時に大・中・小の各器形でそれぞれが大型化して従来の分布傾向と異なるとする。器高では、本稿でも指摘したようにG型の器高がその後半期に増大するとしたように、14世紀前葉からは1.5㎝以下のものがなくなって器高が高くなるとする。また、このG型の登場と共に底部厚が薄くなるものの、15世紀末から16世紀初頭に再度厚くなるとする。さらに、底径口径比の観察では、埦形の出現によって、その比は大きくなることを確認する

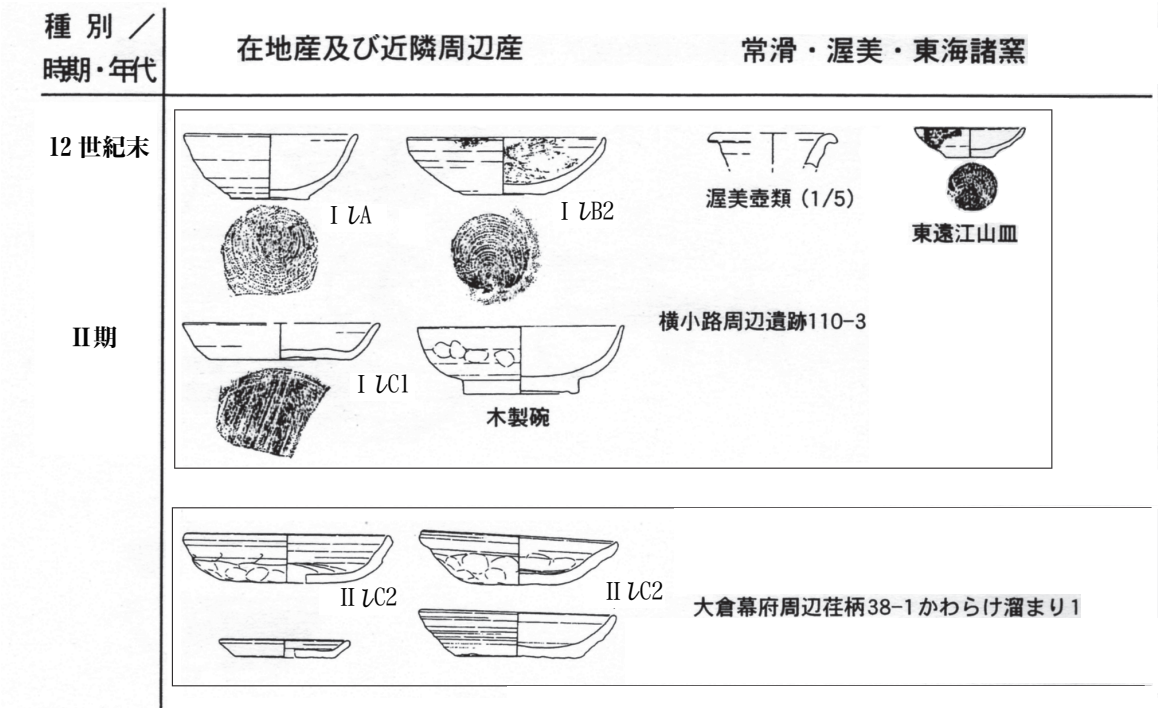


図23　出土遺物

が、本稿でのG型後半期の中型の器高増大までは大形の方がその比が大きかったものの、やはりIℓK型の時期以降に底径口径比が小さくなる傾向があるとする。この底径口径比の推移は、G型や中型の出現に際して、超大型のF型や埦形のE型が先ず現れてから、G型やD型の埦形化の進行後に器高の高い埦形であるImG2の登場を意味しており、15世紀末から16世紀初頭におけるIℓK型が鎌倉地域における中世かわらけの大きな分岐点であったことをも示している。

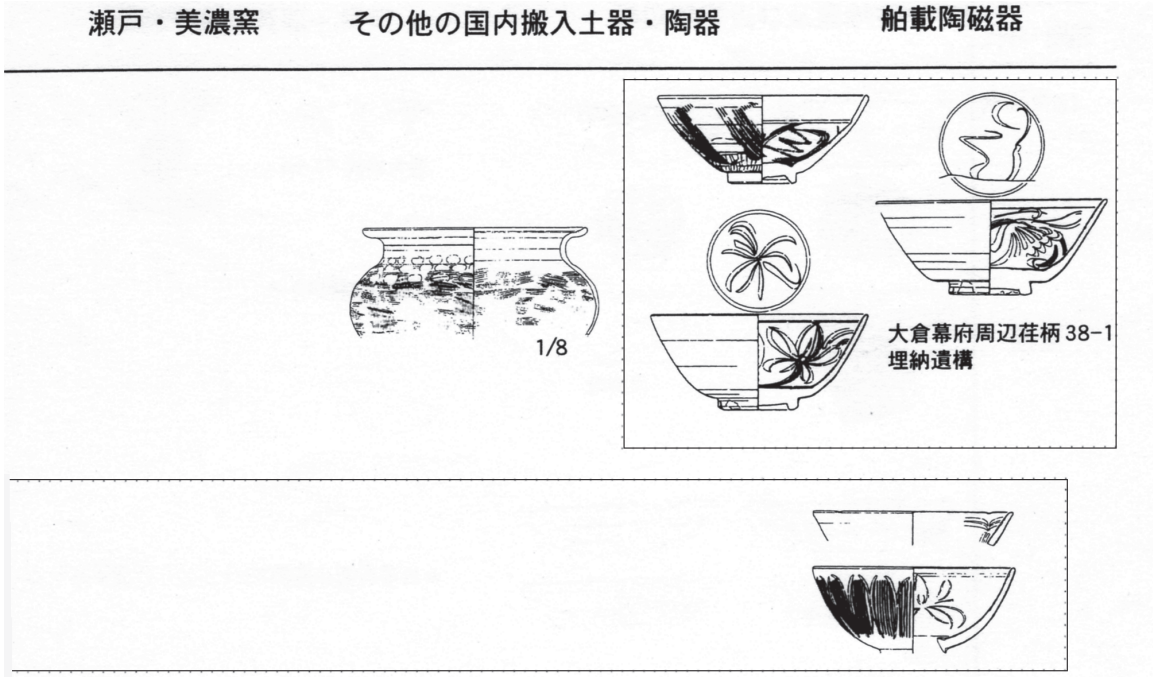
かわらけの法量を統計的に処理分析した宗墓富貴子が提示したかわらけの推移は、本稿でのかわらけ型式分類に大きな誤りのないこと、そしてその法量分布は同一型式内においても漸次的に推移するものである一方、IℓK型のように素早く変異することも示している。すなわち、法量は時期を把握する際には有効であるにしても、法量のみでの型式分類は意味がなく、成形手法を前提とした分類にあって意味をもつものと考えられる。加えて、複数型式の同時併存においてもそれぞれが併行して法量の変化を起こすことも了解しておくべきことが判る。そこに社会的要請が潜んでいるのであるが、それは後述する。

工人集団

ロクロ成形と手づくね成形の製作技法の差は、複数型式の併存の可能性を顕著にあらわしている。今小路西遺跡（御成町200番2地点）では、13世紀前半から中頃の屋敷地内に掘り込まれた苑池から特異なかわらけが出土している［原ほか2005］。それは胎土が橙色精良で、焼成も堅緻であり、器壁が薄く大型では口径12.2～13.8㎝、器高が3.5㎝以上の埦形を呈する（図29）。また、このかわらけには口径10.4㎝、底径4.0㎝、器高3.3㎝の中型も数が少ないながら存在する。これだけの記述であれば、G型と捉えられがちだが、内底面のナデが無く見込みにはロクロ目が残り、見込み中央が窪む。そして、小型では器高2㎝ほどの埦形がある一方で1.5㎝内外の皿形が多数見られる他、大・中・小型ともに口縁端部が内湾しないなどG型とは異なる点が多い。これらをIℓX、ImX、IsX型とするが、同一地点から出土したかわらけはIℓD1とIsD2・3型であり、IsXも形状はIsD2・3型に類似している。年代は13世紀の前葉よりも中葉であろう。G型ではあり得ない。

特異な器型と技法

苑池から出土したかわらけ総数605点の内、20％ほどの124点がこのIℓX、ImX、IsX型で、IℓXがその65％と他のかわらけ型式と比べて、大型の比率が高く、製作工人集団の差異だけでなく、用途も異なっていたと指摘される［原ほか2005：215］。IℓX型は千葉地遺跡から2点の出土が報じられたとされるが［同上；手塚ほか1982：



編年図（2）

142］、これまではほとんど認識されなかった型式であり、上記の調査地点が千葉地遺跡に近接していることを勘案すれば、特定の使用者のために製作されたものである可能性もあろう。この事例と同様に特定地域から出土するかわらけが他にも存在する。

鶴岡八幡宮の東隣に位置する「政所跡」と称される地点の調査で鶴岡八幡宮前面の東西道路、横大路に面する道路側溝から6mほど北側の建物の南端に発見されたかわらけ集中出土地点の下層から、おそらくは荒縄などで重ねられた底部回転糸切りと静止糸切りの異なる技法で製作されたⅠ群がまとまって発見された。大型は底部が高く残されないⅠℓD1であり、器高が3.8㎝になるものもある。さらに集中出土地点上層からはG型と手づくね成形品も出土していることから13世紀後葉と思われるが、小型がⅠsD2・3の他に、より外反するものが回転糸切り、静止糸切りの両例に見られるのが特徴的である。

静止糸切りは、13世紀初頭と考えられるC型に大小ともに現れるが、本例とは時期が異なり、やや特殊な事例である。どのような系譜を辿れるのか現在は不明とせざるをえない。この事例がほぼ型式ごとに縄でまとめられて出土した状況、そして宴会儀礼が頻繁に行なわれたであろう政所とされる地域からの出土を鑑みれば、当調査地点での大量使用を前提に前もって納入され、保管されていたものであることを指摘できる。納入にあたって一つの工人集団が多型式のかわらけを納めたとするよりは、複数の、すなわち回転糸切り技法を用いる集団と静止糸切り技法を用いる集団の少なくとも2つの工人集団がかかわっていたとする見方が素直であろう[23]。こうした製作技法の違いも含めた複数型式の併存が中世鎌倉におけるかわらけの生産と使用の特色であるが、工人集団がどこにどれほどの数存在したのかについては不明な点が多い。

関東地方における中世土器生産の大きな特徴は、［服部1986a］や［浅野1988、1991］などが指摘しているように、椀、皿、壺、甕、片口鉢などの日常雑器を中心とする陶器生産がほとんど発達をみずに、日常生活用品の大部分を遠隔地の窯業製品に依存していたことであり、在地の土師器系の土器生産が食膳具のうち皿（かわらけ）の生産に終始した。それは古代末期の生産器種の集約化や成形・整形技法の簡略化、さらに器形の小型化といった過程を経たものである。ロクロ土師器の椀と小皿に集約される十一世紀後半以降、皿生産に集約された明瞭な結果がかわらけである[24]。

土器焼成窯

土器工人の系譜に繋がると想定できるかわらけ工人集団の存在形態を考古学的に考察するためには、焼成遺構の発見が確かなものであろう。その手始めにかわらけの胎土に用いられた粘土がどのような地域に産出したのかを探った研究を見ておく。福田と永田は複数遺跡出土土器製品と数地点の遺跡地地山層、それに粘

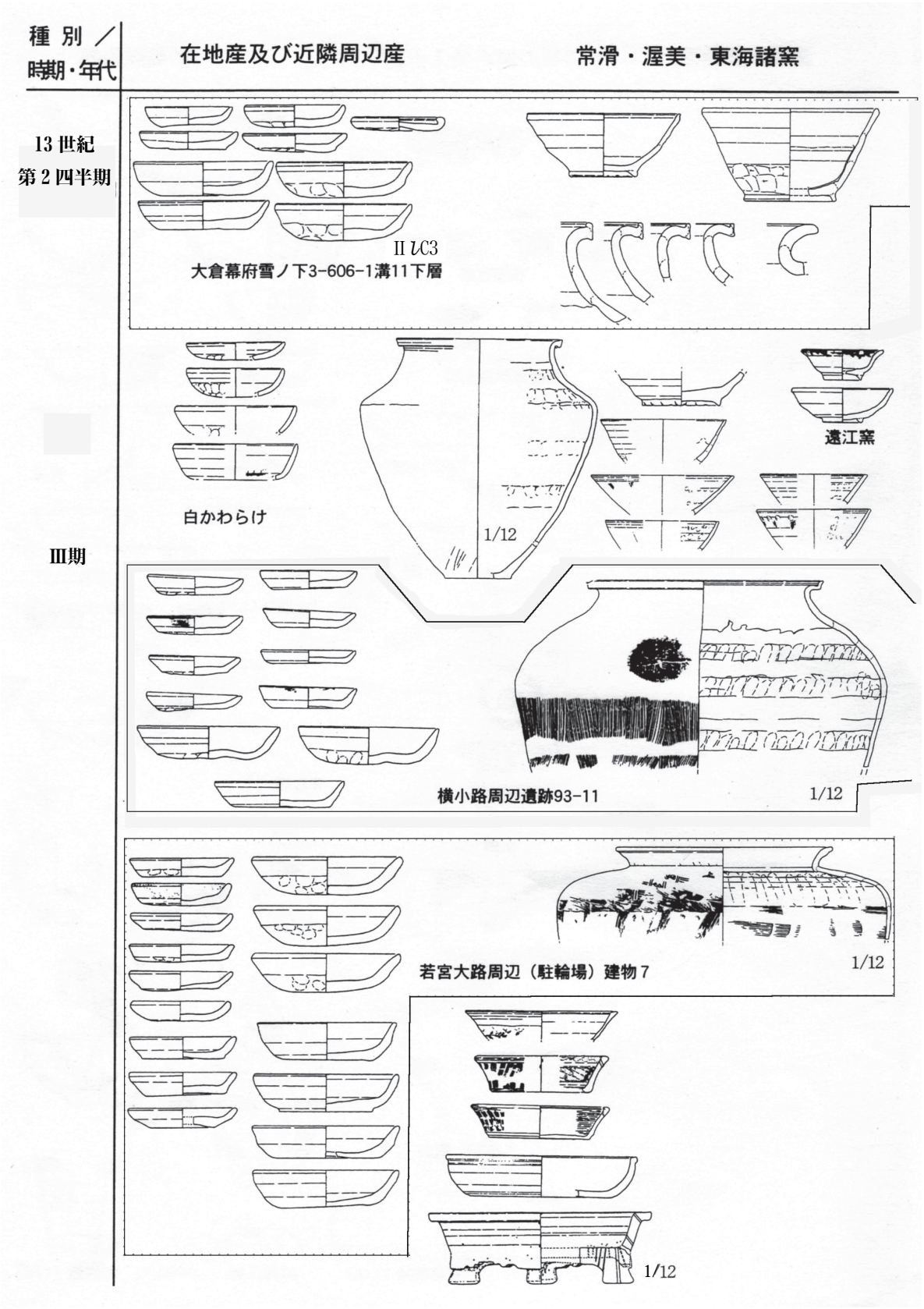
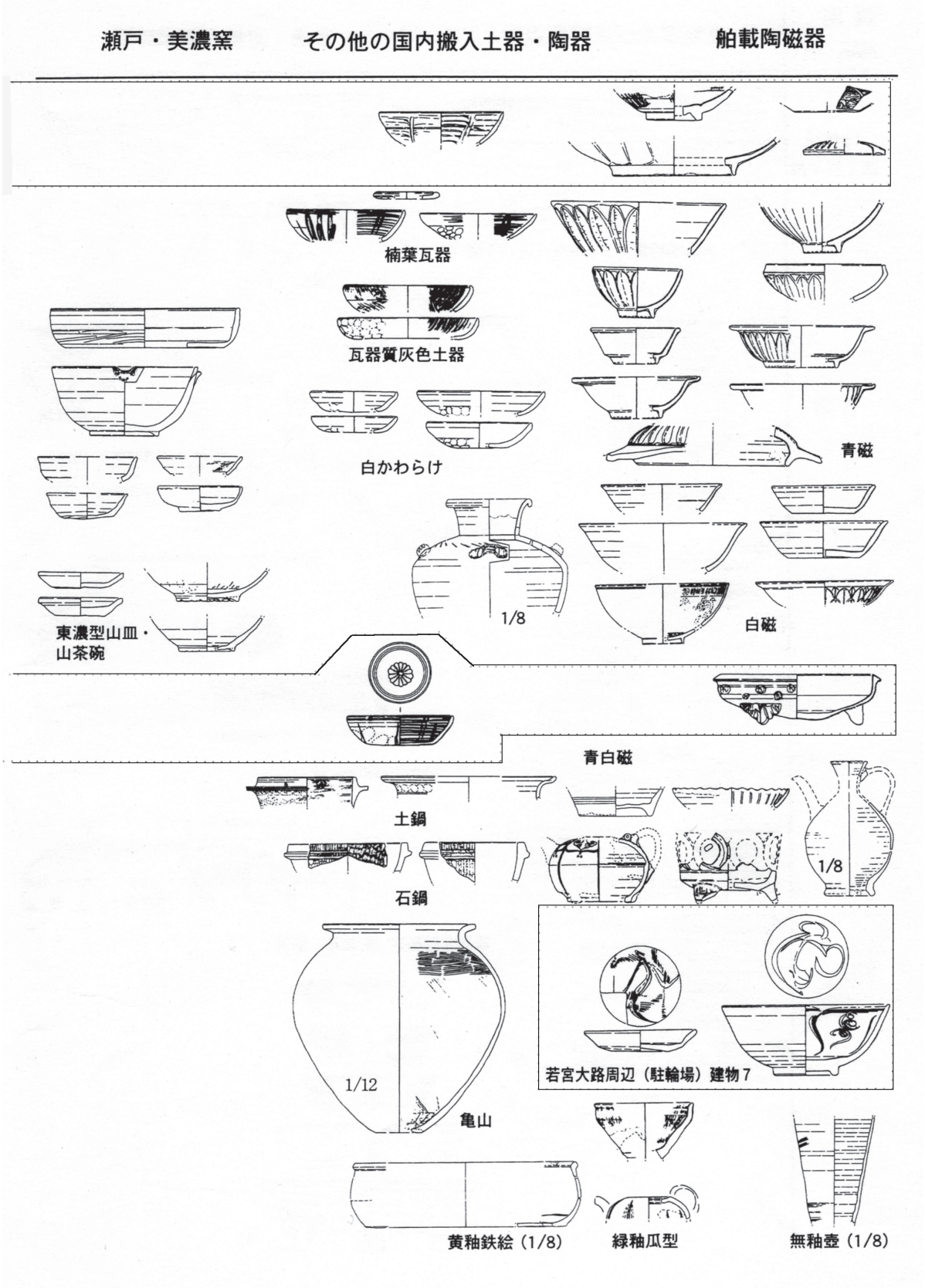

種別／時期・年代
在地産及び近隣周辺産
常滑・渥美・東海諸窯
13世紀
第2四半期
Ⅱ以C3
大倉幕府雪ノ下3-606-1溝11下層
白かわらけ
1/12
遠江窯
Ⅲ期
横小路周辺遺跡93-11
1/12
若宮大路周辺（駐輪場）建物7
1/12
1/12

図 24　出土遺物


瀬戸・美濃窯
その他の国内搬入土器・陶器
舶載陶磁器
楠葉瓦器
瓦器質灰色土器
白かわらけ
青磁
1/8
白磁
東濃型山皿・
山茶碗
青白磁
土鍋
石鍋
1/8
若宮大路周辺（駐輪場）建物7
1/12
亀山
黄釉鉄絵（1/8）
緑釉瓜型
無釉壺（1/8）

編年図（3）

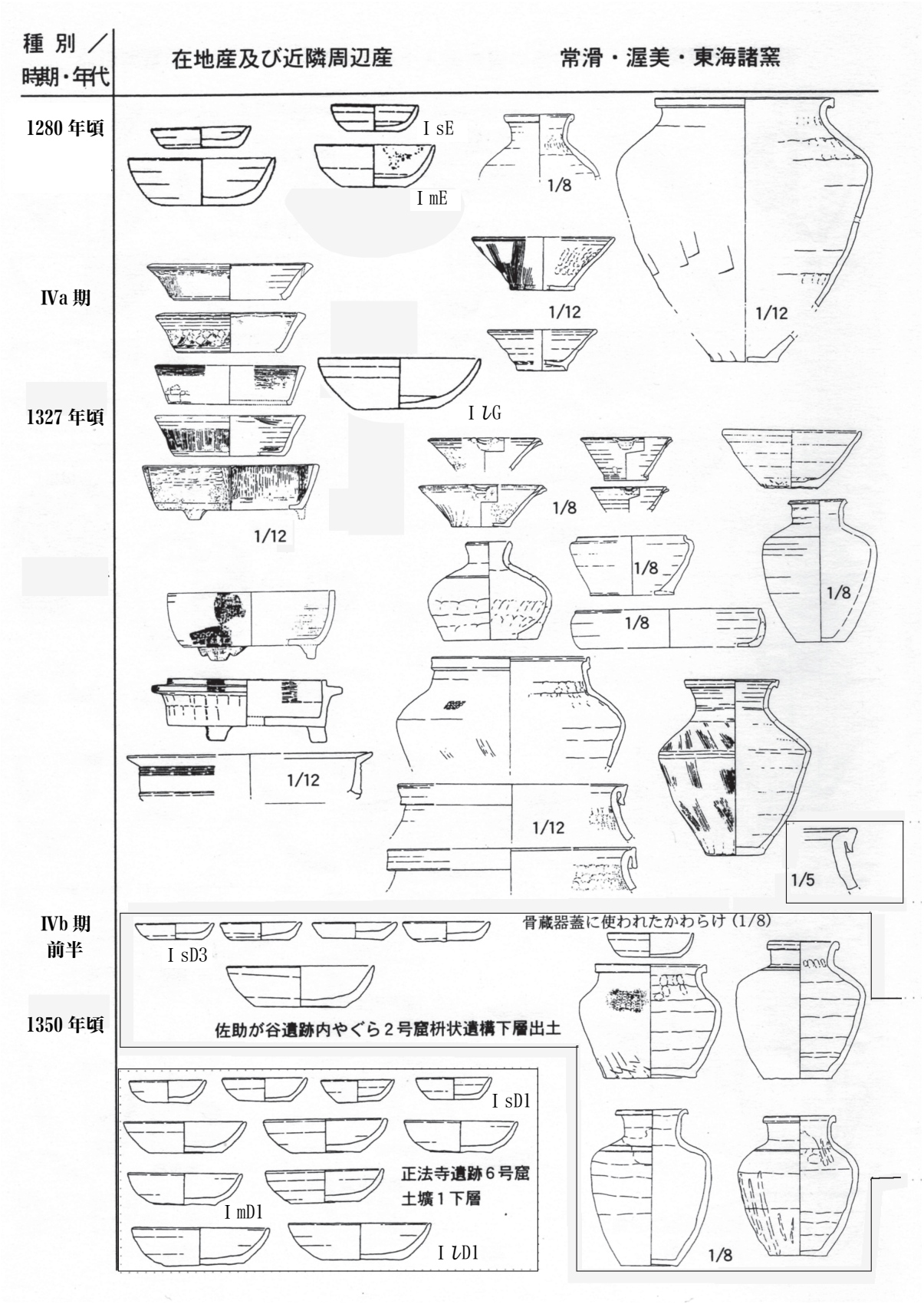
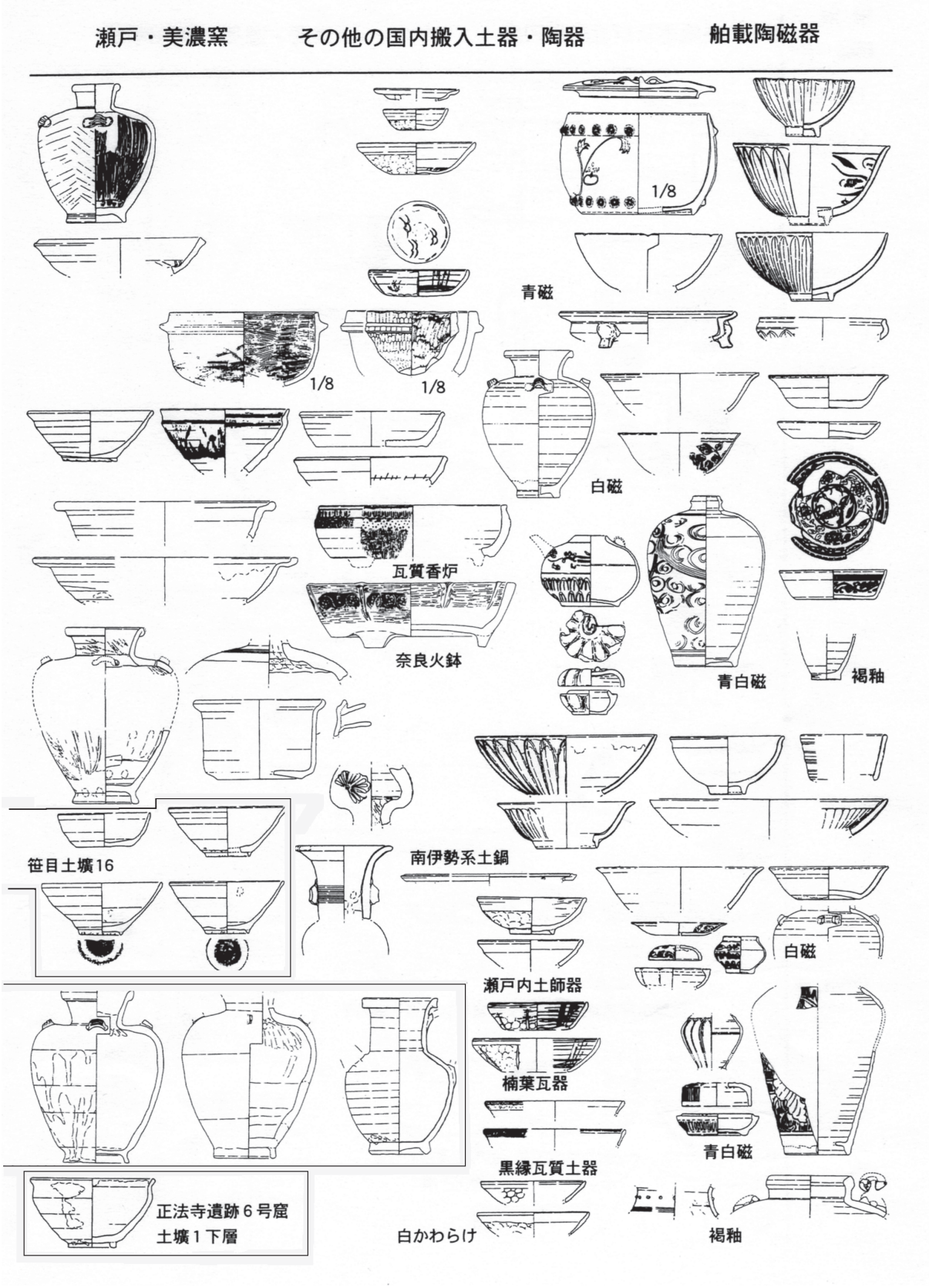

種別／時期・年代
在地産及び近隣周辺産
常滑・渥美・東海諸窯
1280年頃
IsE
ImE
1/8
1/12
1/12
IVa期
1327年頃
IレG
1/12
1/8
1/8
1/8
1/8
1/12
1/12
1/5
IVb期前半
1350年頃
IsD3
骨蔵器蓋に使われたかわらけ（1/8）
佐助が谷遺跡内やぐら2号窟枡状遺構下層出土
IsD1
正法寺遺跡6号窟土壙1下層
ImD1
IレD1
1/8

図25　出土遺物


瀬戸・美濃窯
その他の国内搬入土器・陶器
舶載陶磁器
1/8
青磁
1/8
1/8
白磁
瓦質香炉
奈良火鉢
青白磁
褐釉
笹目土壙16
南伊勢系土鍋
白磁
瀬戸内土師器
楠葉瓦器
青白磁
黒縁瓦質土器
正法寺遺跡６号窟
土壙１下層
白かわらけ
褐釉

編年図（4）

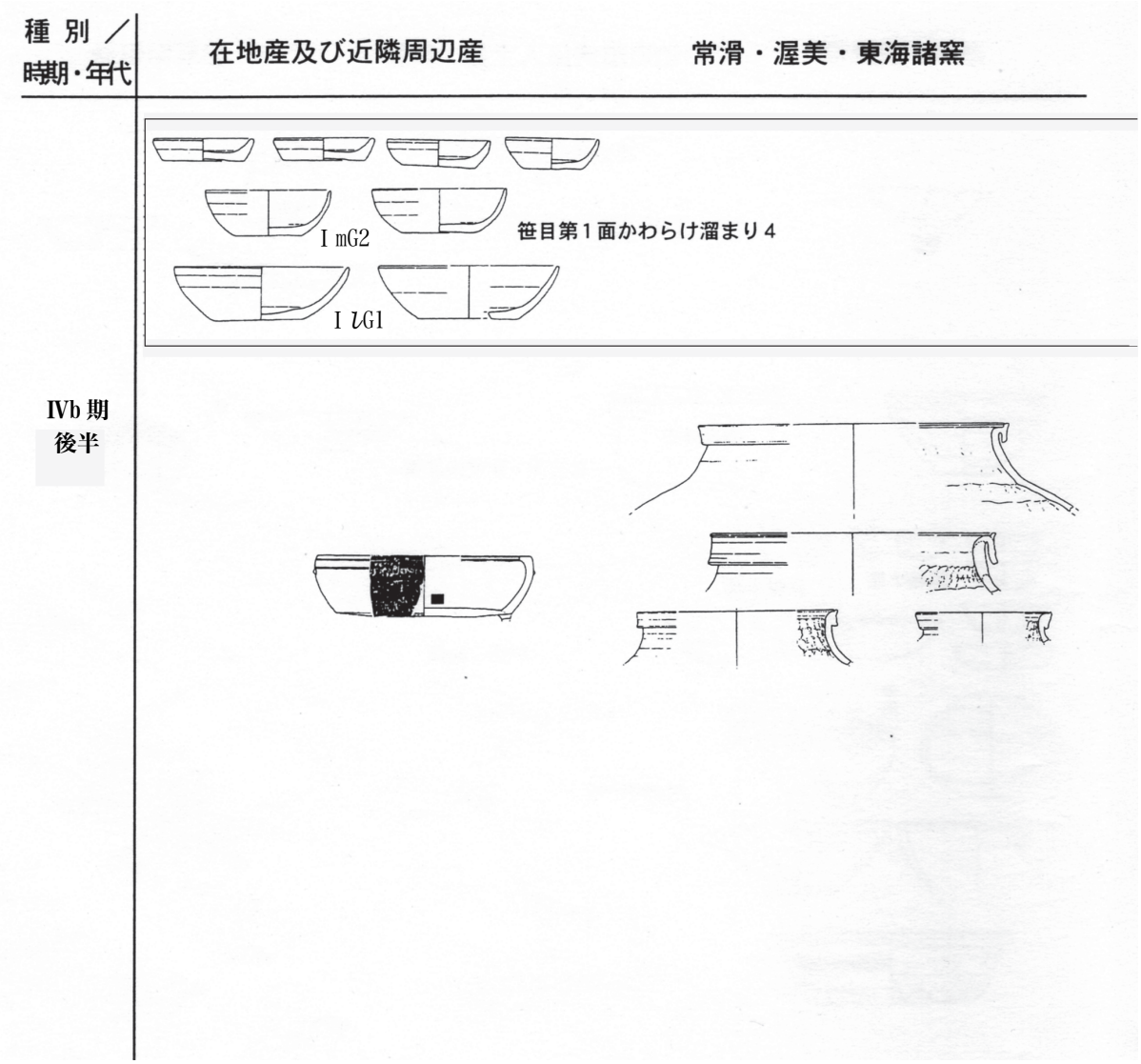
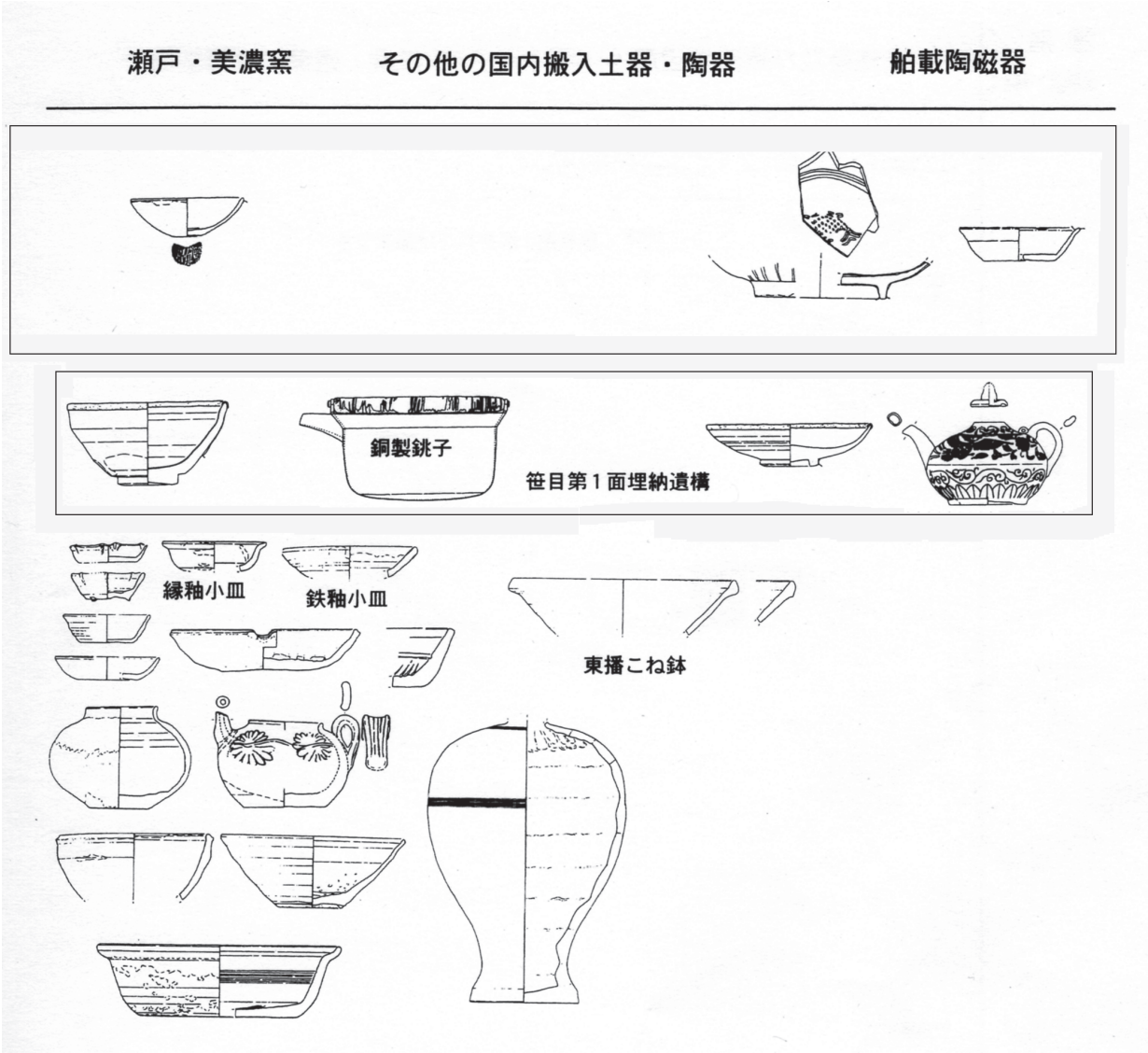


図 26　出土遺物

土採掘壙とされる地点の土壌の鉱物学的分析を行なった［福田・永田 2001、2002、2004］。その結果は、手づくね成形とロクロ成形品の胎土の違いを見い出せない一方、年代的差はあるものの鎌倉地域の第三紀三浦層群逗子層の岩石を母岩とする粘土であろうと推測している。手づくねもロクロ成形も製作技法の差を超えて、かわらけは鎌倉とその周囲に産する粘土を用いていたことになる。また、同様の分析を行なった平井（松吉）も福田・永田の分析結果を支持している［松吉 2010］[25]。

鎌倉出土のかわらけが鎌倉地域の粘土を用いているのであれば、その成形と焼成もその近隣で行なわれたであろう。土製品の焼成遺構としてこれまでに報告されている例は少ない。火熱を受けたと思われる浅い土壙状窪みが土器焼成遺構とされる場合もあるが、窯の可能性が高い事例は唯一、杉本寺周辺遺跡（二階堂字杉本 912 番 1 ほか地点）から報告されている。それは、焼土と炭化物が底面に堆積する溝状遺構で、その上層から出土するかわらけ（焼成不良、成形不良）をもって、煙管状土器窯とし、ここでかわらけが焼成され、出土したかわらけはその物原に打ち捨てられたものとされる［馬淵 2006、馬淵ほか 2002］。年代はかわらけの器型と伴出遺物から 13 世紀第 4 四半期から 14 世紀初頭であろう（図 30）。報告者はこの他にも土壙と報告する遺構も部分的に火熱痕跡を残し、焼き損じによって変形したかわらけが出土するとして、やはり煙管状土器窯であると認定している。報告では年代に若干混乱が見られるが、これらの土壙も土器窯とすれば 14 世



編年図（5）

紀の第１四半期から中頃まで土器製作が行なわれた場所となる。

鎌倉の主要河川である滑川は鎌倉の東方、六浦と鎌倉の境である朝比奈峠を水源として西流し、政所付近より南流する。杉本寺周辺遺跡は西流する滑川が杉本神社前で大きく南に湾曲した北岸に位置する。そのため、遺跡地周辺は第三紀三浦層群逗子層が浸食・風化され、堆積と風化作用を繰り返した粘土が河川による浸食で姿を現す地点でもある。

この滑川の北岸であり、また二階堂川の西岸でもある大倉幕府跡（雪ノ下三丁目 701 番 3 地点）で馬淵が土器焼成施設としていくつかの土壙を報告している［馬淵ほか 2005］。焼土とかわらけの散在を手がかりに幾度もの作り直しを含め 8 または 9 基の円形から矩形、楕円形の土壙状の窪みを土器焼成施設とするが、全景を知りえるものは少なく、また円形や矩形であれば昇焔式の単室窯となるのであろうか。出土遺物からは 14 世紀中頃の遺構と考えられるが、詳細が不明なため、土器窯と確定するには及ばない。14 世紀中頃のこの地域での土器焼成活動には疑問も感じるが、次のような指摘もある。

中世の土器窯に早くから注視していた森や中山が中世の土器窯についてまとめている。なかでも森は閉塞構造の瓦器椀と開放構造の土師器皿の焼成窯に煙管状焼成窯という低火度焼成の独特の窯型式が、須恵器生産との関連で小型の土師器製品を少量の燃料で効率良く多量に焼成する目的で生み出されたと指摘する［森 1994］。さらに 11 世紀代の窯跡の早い資料は豊前・防

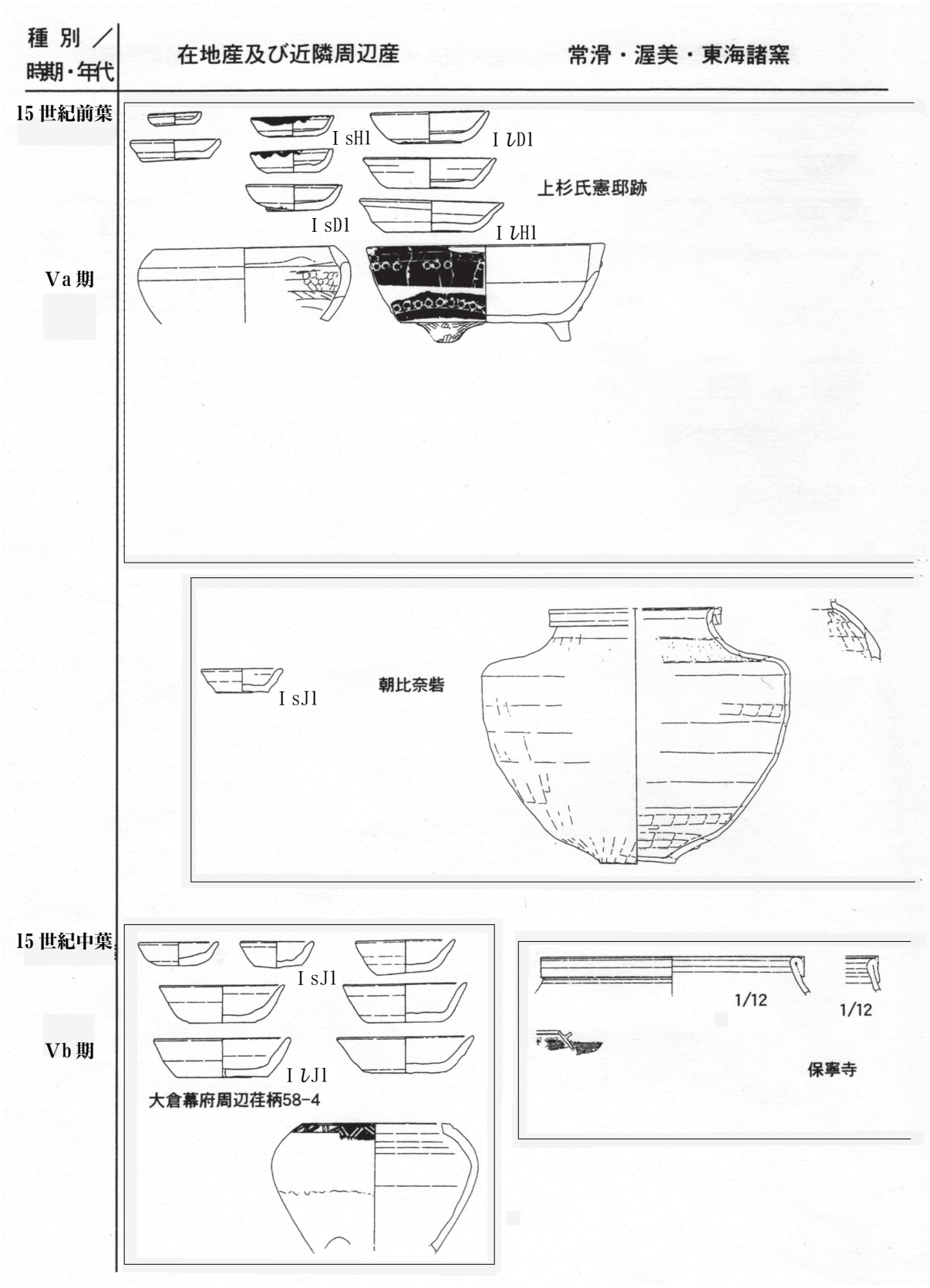
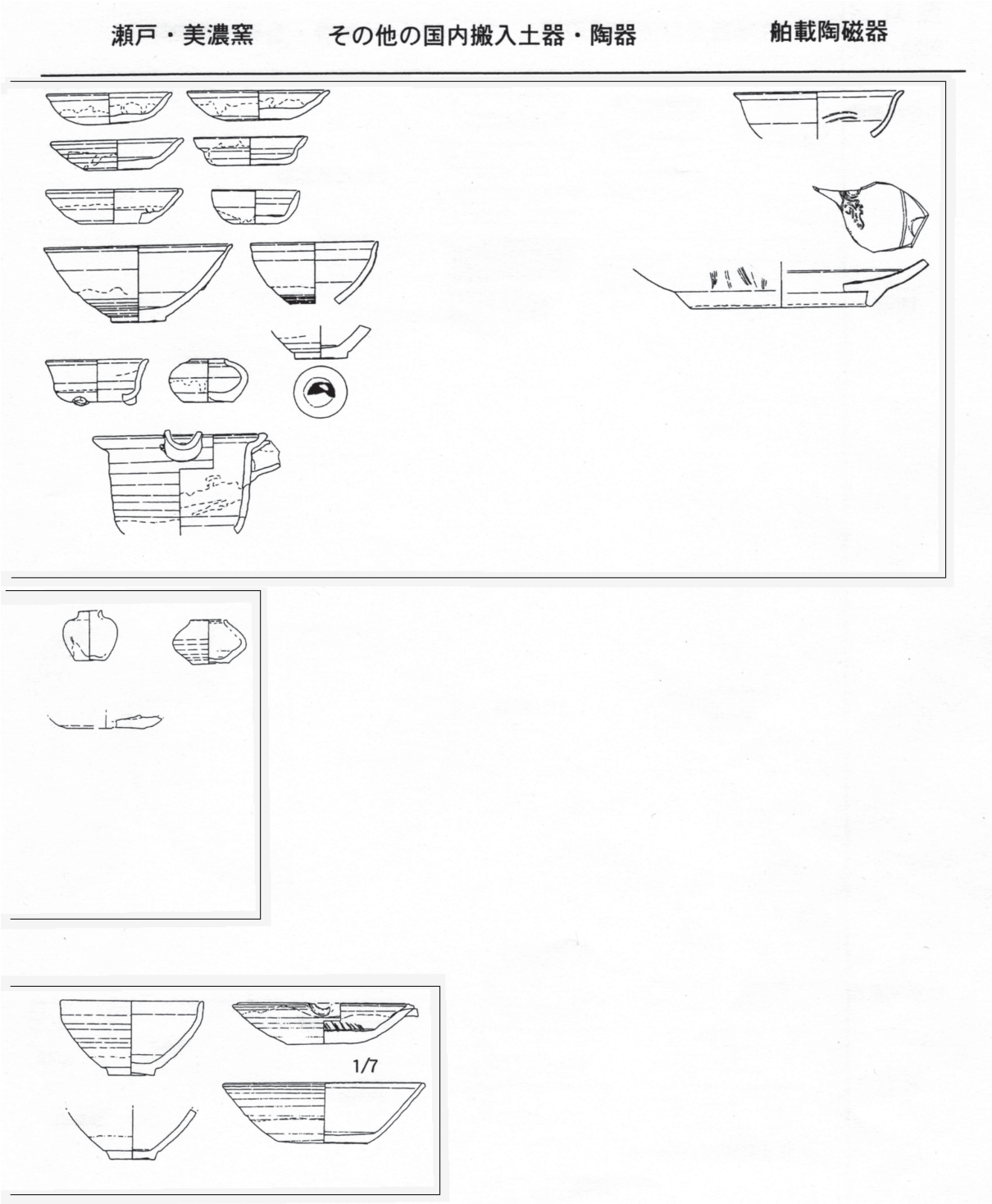

種 別 ／
時期・年代
在地産及び近隣周辺産
常滑・渥美・東海諸窯
15 世紀前葉
Ⅰ sH1
Ⅰ ℓD1
上杉氏憲邸跡
Ⅰ sD1
Ⅰ ℓH1
Va 期
Ⅰ sJ1
朝比奈砦
15 世紀中葉
Ⅰ sJ1
Vb 期
Ⅰ ℓJ1
大倉幕府周辺荏柄58-4
1/12
1/12
保寧寺

図 27　出土遺物



編年図（6）

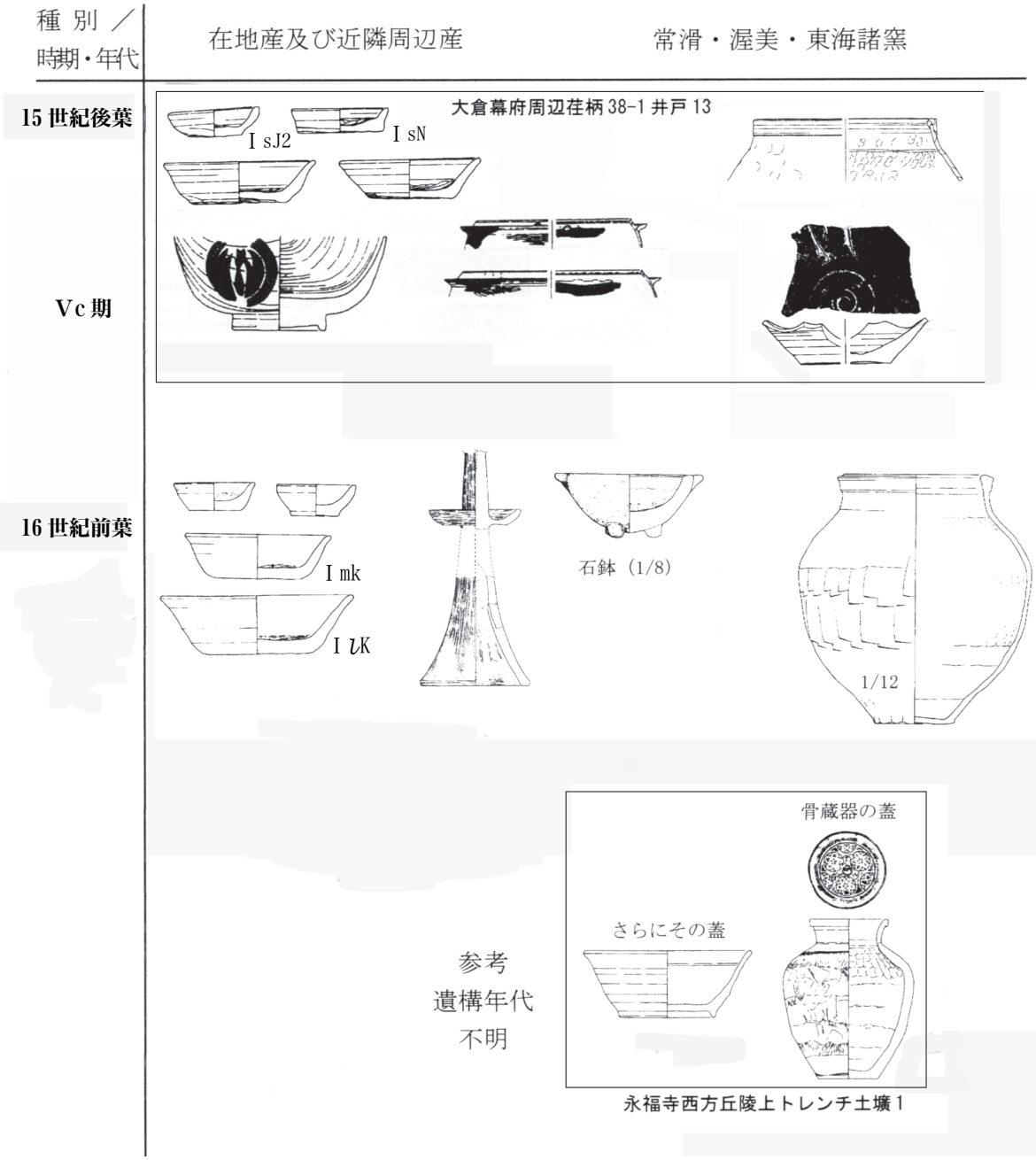
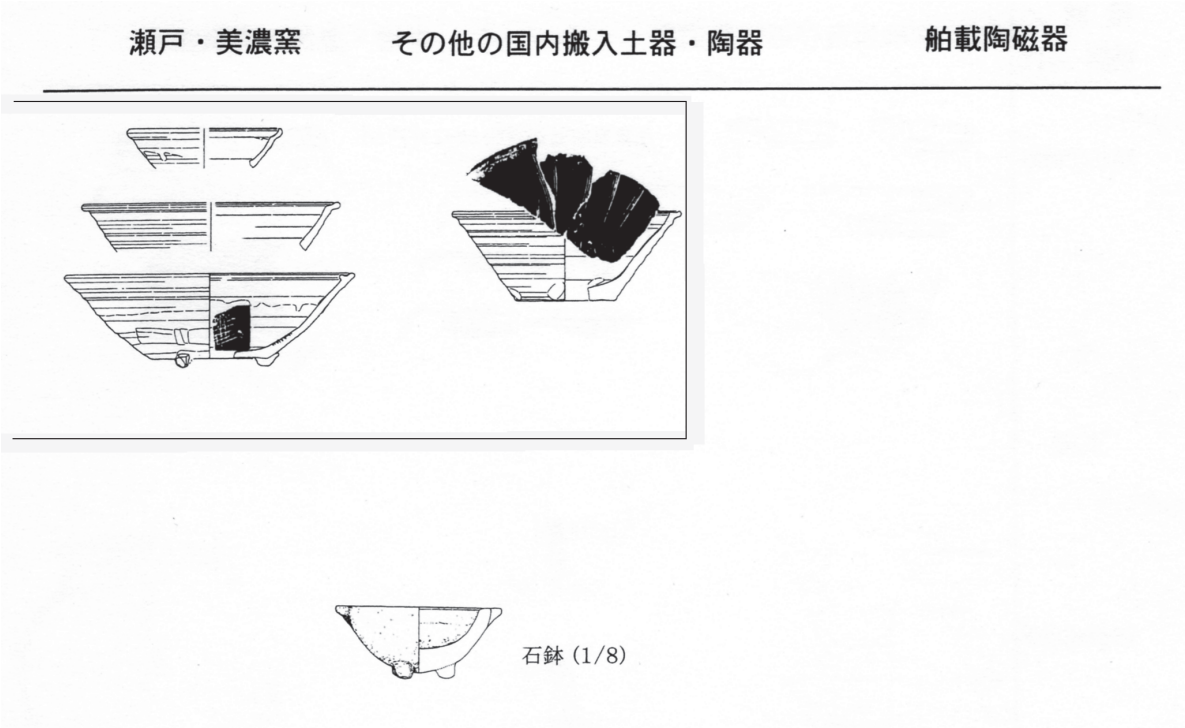


図28　出土遺物

長地域に底部に糸切り痕や回転ヘラ切り痕を残す土師器が焼成されていた点にも注目している［森1996］。陸奥地域の土器焼成遺構を集成した中山は、10世紀に土師器埦・皿を焼成した土壙から12世紀には煙管状焼成窯が出現する土器製作上の画期を指摘する［中山2001］。森や中山の事例集成と考察、さらに関東地域の土師器以来の土器生産集団の変遷を踏まえるならば、馬淵が指摘する煙管状土器焼成窯、そして土壙状の土器焼成遺構の蓋然性は高いと考えて良いであろう。とくに中山が示した12世紀の前庭部を持つ瓢型の平泉遺跡群和泉屋遺跡の土壙状の施設は大規模な建物の近隣に発見されたとする点は、先の大倉幕府跡の土壙状焼成施設の存在を肯定するものとなり得るかもしれない。

生産と工人集団

土器生産が貢納と流通の二面性をもっていた中世京都や畿内での状況をそのまま敷衍することはでき



編年図（7）

ないまでも［浅香 2005；遠藤 1985；橋本 2016；森隆 1993b；脇田 1986、1997］、松吉（平井）や福田・永田が示したように、鎌倉のかわらけが在地産であることは間違いない。また、これまでに出土した周辺地域の中世かわらけを観察する限り、その胎土は鎌倉のものとは全く異なっており、少なくとも鎌倉のかわらけは非常に流通範囲の小さな在地生産であることを示している［松吉 2010、森 1992］[26)]。他方、鎌倉の街中で出土するかわらけの型式分類からは、貢納であったかと見まがうばかりに政所跡と器型の関係性が強い例もみられ、橋本が広域流通品であった楠葉型瓦器椀の流通研究で指摘するような公権力の介在を想定できる様相も垣間見せている［橋本 1980］。粘土や薪の採取権を得るためにも公権力の許可または認可が必要であったろうから、その点においての貢納はあり得ただろう。そうした状況を勘案するならば、幕府機関は若宮大路方面にすでに移転した後であろうとも、大倉幕府跡のような居住地域に土器窯の存在はやはり懐疑的

にならざるをえない。

以上のように中世の鎌倉では在地産として土器が製作されていたと考えられ、煙管状土器焼成窯も 14 世紀前後には確認できる。しかしながら、その規模は鎌倉の中世遺跡に発見されるかわらけの出土量からすれば、そこで製作されたかわらけは全体のほんの一部であろうことは間違いない。また、何らかの貢納形態も存在した可能性も否定できないなかで、同時期に複数の型式が存在し、それぞれの型式変遷において小型のそれが遅れる様相は、各型式ごとの生産集団が存在し、鎌倉では必ずや複数の工人集団が存在したはずである。他方、皿形出現以前と以後の 1200 年前後の時期を境に胎土・焼成が異なることは、工人集団の組み換え、編成替えのあった可能性も想定しておく必要もあるかもしれない。

中世社会とかわらけ

これまでの議論をもとにかわらけの成立と変遷を視点として、以下で中世社会の成立と変容について考えてみたい。それにあたって、ここで扱う空間領域を関東を中心とする地域に限定して行ないたいが、そうした地域を指す用語として東国または坂東と言う言葉がある。

東国

国語辞書または歴史事典によれば、東国は古代において鈴鹿関、不破関（関ヶ原）より東側を指す言葉であり、坂東は足柄峠（坂）や碓氷峠（坂）より東側を指し示す。京より見て、より東北方の陸奥や出羽の国をのぞいて、坂の東である坂東はほぼ今日の関東地方の意味に用いても差し支えないであろう。しかしながら、本稿で論じた鎌倉を語る場合に伊豆を除くわけにはいかない。そこで、ここでは治承の乱の後、寿永二（1183）年十月宣旨によって追認された坂東と東海・東山道地域を含めた頼朝の実効支配地域を東国と措定して記述をすすめたい。

考古学からみた中世社会の成立諸論

前稿にてとりあげた［宇野 1984］、［橋本 1987a］、［森 1993a・b・c］や［鋤柄 1998、1999］は、いわゆる王朝国家的食器様式が中世食器様式へと転換する時期を 10 世紀から 11 世紀中頃までとして、中世開始期の設定は各論者によって異なっていた。ただし、「変革の開始と成熟のいずれに力点をおくかの違いで、決定的な論点の相違は存しない」と吉岡が指摘しているように［吉岡 1991：13］、大枠においては次のように捉えられる。10 世紀初葉に須恵器が姿を消し、大流通を介して農閑期専業による分業生産を基軸とする在地の村落形成を前提に［広瀬 1986］、土器の器種構成の単純化と産地別器種分業、そして製作手順の簡略化を伴う大量生産が近距離と遠隔地間交換という、いわば域内交換と中心地再分配の多重化と相まって中世社会が成立したとされる。

東国地域では坏と皿への器種構成の単純化、ロクロ土師器にみられる土師質土器における製作技術の移動と省力化を伴う手順の簡略化が 11 世紀前後より現れるが、産地別分業といった活発な窯業生産の展開はみ

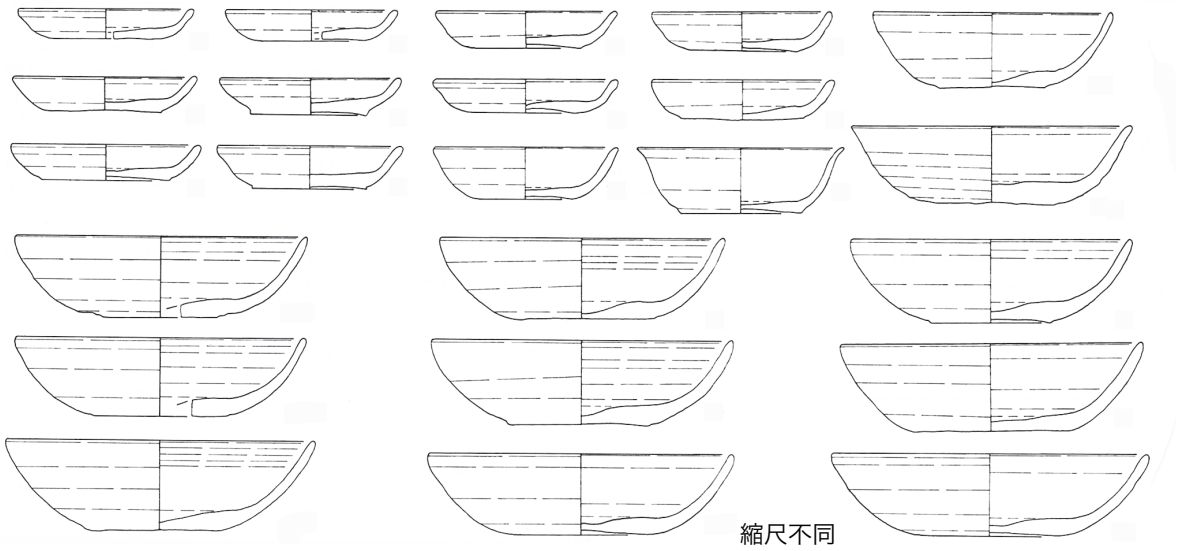


図 29　今小路西遺跡（御成町 200-2）池 3 中層出土Ｘ型かわらけ

られなかった。その背景には成熟した都市社会が存在せず、大量生産と中心地再分配機構の興隆がなかったためであろう［Renfrew 1975］。

越前から東方の東日本の古代末から中世の土師器とかわらけを網羅して、中世的土器様式の成立期を探った羽柴は「11 世紀中葉以降の東日本において、小皿と大型坏の組み合わせが目立つ（後略）」［羽柴 2011：83］としている。南関東、とくに相模地域の 11 世紀から 12 世紀初頭の土師質土器の様相はすでに述べたように不詳であるが、［若林 2009］は 11 世紀第 4 四半期から 12 世紀末までを新たに相模土器編年の 16 ～ 18 期として加えた。その 17 期以降にロクロ成形かわらけの器形を持つ土師質土器の皿の存在を認めることができた。あくまでも器形としてであるが、粘土板上に粘土紐を巻き上げてロクロで成形する際に自ずと生じてしまう底部脇の屈曲はロクロ成形かわらけそのものである（図 31）。上にとりあげた［羽柴 2011］では、古代末と中世の土器分類にあたって、器形や製作技法ではなく、京都産中世土師器皿の導入とその模倣をもって土器分類におけるかわらけを設定し、それは新たな儀礼の導入が前提にあったとしている[27]。すなわち、土器分類を用途のみを視点にして設定し、土師質土器群の小皿と大型坏・皿への器形集約は土師質土器としての変化であり、中世の土器様式への転換ではないとする［同上：83］。しかしながら、その新たな儀礼とはどのようなものか 示されていない。氏が論考の主眼とする平泉政権の性格を論じるなかで、12 世紀の在地有力者の居館を「院政期都市型居館」なる用語で把握する姿勢に「新たな儀礼」が文献史学で指摘される中世のイエ社会の成立を暗示しているのであろう。それであるならば、かわらけが京都産中世土師器皿を摸した手ずくね成形かわらけが最初に東国に現れたとの確証がないなか、手づくねかわらけを導入する下地がすでに東国社会に存在していたからこそ手づくね成形かわらけがもたらされたと考えるほうがより素直で論理的ではないだろうかとの感が残る。この点については後段にてみていくことにしたい。その前に、はたして土師質土器の器型変遷に中世的土器様式の成立を見出すことはできないのであろうか。

東国の中世土器様式の成立

［若林 2009］の古代出土土器・陶器集成編年をみるならば、17 期には東海地方の片口鉢と土鍋が出土している。ここには産地別分業の一端の他に 11 世紀中頃の 15 期まで残されていた土器甕がみられないことも煮沸形態の変化を示している。この 17 期に与えられている年代が 12 世紀第 4 四半期で多摩ニュータウン例がすでに存在するのだから、かわらけ器形の存在は当然とされてしまうだろう。しかし、土師質土器群の中からどのようにしてロクロ成形かわらけが現れてくるのかを探るには、重要な資料である。その一方で、挿図から見て取れるように、こうした皿器形と従来型の坏とがどのようにして大小のかわらけへと変遷するのか、そしてどのような器とセットになるのかなど、未だ資料的には不足している。

いずれにしても、ロクロ土師器に示される土器製作手順の簡略化と器種の単純化が 11 世紀以降に進行し、土器甕の消失という住環境、食事環境の変化は、食膳具の材質変化や生産地の移動を背景にしていただろう。宇野は畿内をはじめとする地域で土器以外の食器生産が廃れて、流通網の発達によってもたらされる製品を入手する社会が都市の消費生活を基点として中世的土器様式が現れると早くに指摘した［宇野 1984］[28]。服部は畿内などの西国と異なる古代末の東国を「ロクロ土師器の椀と小皿に集約される十一世紀後半以降（中略）、関東地方をふくむ東国においてなぜ在地の土器生産が急速に解体されるのか、または皿という特定器種のみの生産に集約されたのか（後略）」［服部 1986a：391］と、土器生産さえ特定器種のみに限定される古代末の東国の窯業生産の特殊性を明示すると同時に土師質土器の小型皿と大型坏・皿への収斂を指摘する。鎌倉幕府の成立後であるならば、鎌倉が都市社会として興隆し、ここを基点とした広域流通による他地域窯業製品の安定的入手を前提に土師質土器の器種限定を読み取ることはできよう。しかし、義朝の時代でさえ、その社会を窺い知ることが困難な状況である。土器生産の衰退を木器（漆器）生産の拡大にみる意見もあるが［四柳 2006、2009；四柳（編）1987；仲田 1993；飯塚 2000］[29]、依存率の悪い木製品からの論究もやはり困難である。

このような遺物出土状況であっても、本稿で取り上げた千葉地東遺跡のⅠℓA2 はより以降のかわらけと同様に大量に出土し、いわゆる日常の食膳具ではなかったことを示している。その成形技法は多摩ニュータウン No.692 の 12 世紀第 3 四半期のⅠℓA1 と同様である。さらに同一器型にあっての大小法量分化をみせている。資料的制約があるものの、製作手順と器形の単純化を成し遂げていた土師質土器は 11 世紀後半から 12 世紀中頃までの間に器高が高いために坏とも表現されるが、土師質土器ではなく同一器型が大小に法量分化したかわらけに移行し、東海系の山茶碗を使用するような、器種による産地別分業とその製品を受け入れた古代生産体制の崩壊と中世的食器構成の成立が起こっていたことを示している[30]。

成立過程は考古学的に漠然としたものに留まらざるをえない東国における中世土器様式だが、手づくね成

形かわらけが現れる時期は早くと 12 世紀第 3 四半期とされている［田中 2003；石川 2016］。石川は現在の埼玉県、北武蔵地域における出現期の手づくね成形かわらけを集成し、篠新田遺跡や河越館遺跡出土品の検討を行なっている。成形と整形技法を示す痕跡や胎土などの詳細な検討から、篠新田遺跡出土品に平泉の 12 世紀中葉とされる志羅山遺跡出土かわらけとの類似を、また河越館遺跡出土品に向けて次第に法量が縮小することを指摘している。胎土と焼成も篠新田遺跡の赤褐色から、灰白色を中心とする焼き上がりへと移行していくことも示唆している。石川は篠新田遺跡出土手づくね整形かわらけの年代を 12 世紀第 3 四半期でもより中頃にちかい時期を想定している［石川 2016］。

武蔵を中心とした古代から中世の土器供膳具を見渡した田中も河越館などの出土品を 12 世紀第 3 四半期に現れた京都系 T 種（手づくね成形）とし、その影響の下、12 世紀末までに内底面のナデと外底部板状圧痕を残す新規 R 種（ロクロ成形）が現れるとする一方で、12 世紀中頃までに黒色土器や脚高高台坏などは消失したとする。田中はこうした脚高高台坏とともに 11 世紀中葉から 12 世紀中葉までの前代に存在した大小の坏など、いわゆる土師質土器を新規 R 種と呼び、その末期に現れるロクロ目の強いものを新規 R 種ロクロ目強調型とする［田中 2003］[31]。

これらの論考では土器文化変遷全体を見渡すための視点が示されているものの、やや論理の混乱が散見される。新規 R 種は新規 R 種ロクロ目強調型とは全く

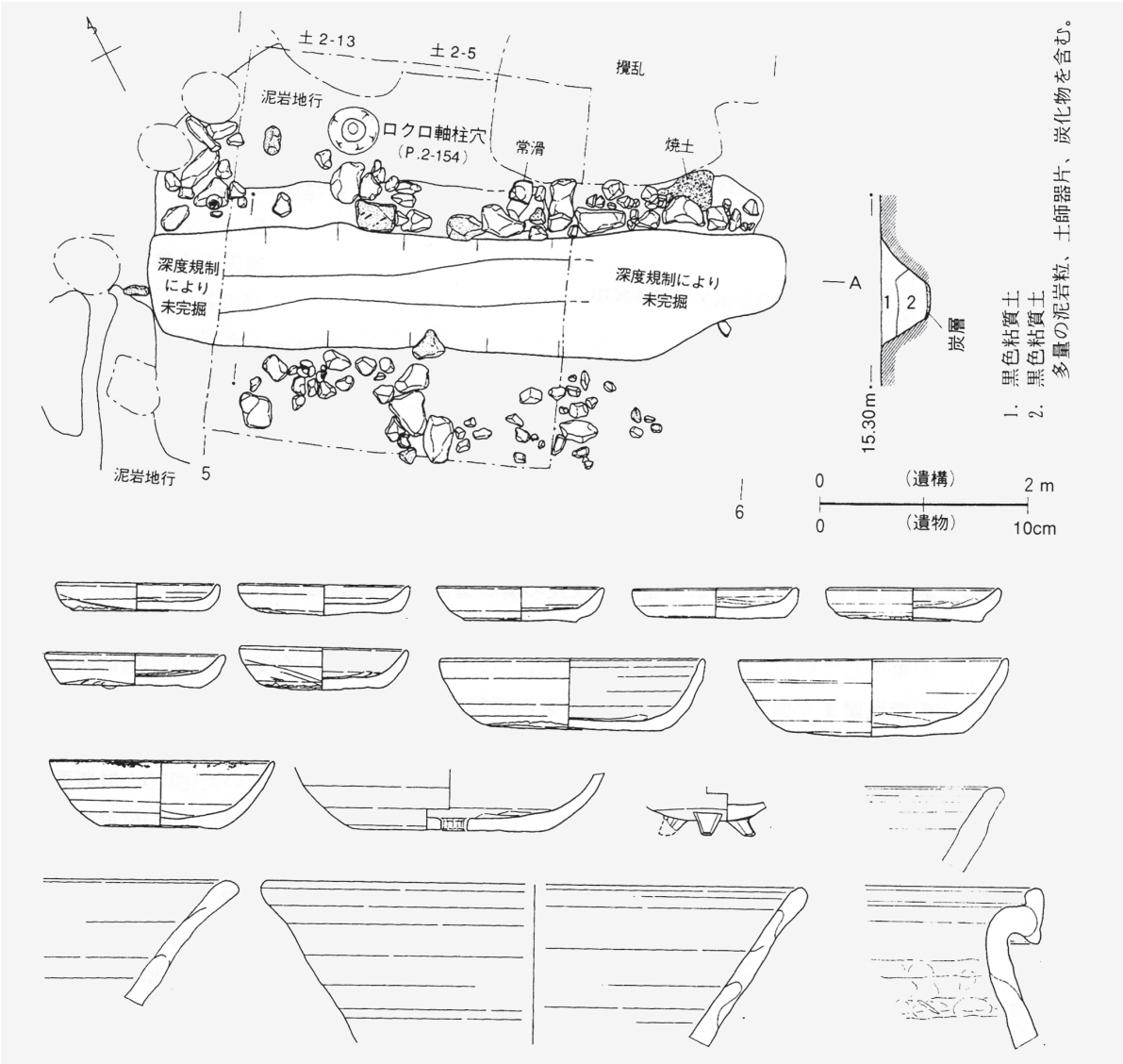


図 30　杉本寺周辺遺跡窯跡と出土遺物

異なる土器系譜なのだろうか。くわえて、新規R種が12世紀末以降、16世紀まで系譜的に継続することを指摘しているように、武蔵をはじめとする東国における中世土器を特徴づけるものである。そうした状況にあって、田中の新規T種ロクロ目強調型が手づくね成形かわらけの導入後に現れるとすることは、土師質土器群から高台付坏、脚高高台坏、黒色埦などが手づくね成形かわらけの導入によって消失したと論理的に行き着いてしまわないだろうか。そして、京都産中世土師器は一般的に褐色系とされる暗い肌色から淡橙色であるのに対して、篠新田遺跡の手づくね成形かわらけの赤褐色胎土が山王遺跡段階にはいち早く初期のロクロ成形かわらけに通有の灰白色に移り変わっている。中井が幾度も指摘するように、東日本のかわらけはあくまでも在地の工人による模倣であり、在地の従来の土器成形・整形技法を下地として製作される［中井2003、2016］。素直に考えれば、土師質土器の高台付坏や脚高高台坏、黒色埦が消失して、土鍋が煮炊具の主要な器種となり、東海地方産の片口鉢や山皿などが産地別器種として搬入されるなかで、土器が大小の坏・皿形に集約される時期をもって、土師質土器ではなくかわらけと把握し、中世土器様式が成立したとするべきである。同様の考え方はすでに［松本1992、1994など］で示されている。そこでは、土師質土器からかわらけへの移行を弁別していないが、基本的には大小の法量変化であると読み取れる。時間の推移においては、12世紀前葉にロクロ成形かわらけ、中葉に手づくね成形かわらけが導入されてロクロ成形かわらけも手づくねの形状を模倣する。そして12世紀後葉に手づくね成形がロクロ成形を凌駕するほどの量になると理解したい。

いずれにしても、手づくね成形かわらけが導入されることによって土師質土器とは異なるロクロ成形かわらけが生み出されたとする見解は一面的に過ぎるだろう。

東国の中世社会の形成・ 家族と社会

文献史学では家の形成を視点として中世社会の成立とする見解が大勢であろう［五味2016］。それは朝廷における院政の開始であり、武家社会の武士団の成立である。公家や寺院、武家などの諸権門のそれぞれの機能を集合して社会を統治するという権門体制論［黒田1994］もあるが、五味は政治の一段階と捉えている［五味2003：38］。その五味は中世鎌倉の成立から執権体制の確立までを描いた『吾妻鏡』を「武家王権の形成に関与した御家人・武士団の家の形成に関わる問題であり、彼らの一揆的世界においてこそ御家人の家の確立をみた（後略）」［五味2004：129］として、武士団内が一揆として糾合し、その集合体が武士の家として成立していたと理解する。すなわち、この11世紀から13世紀における社会の変化が東国に中世をもたらしたと考えている。この時期における武士の存在形態を伊藤は次のように見ている。院政期の貴族が都と補任先の在地で活動する兄弟などの親族は一族間での分業として有機的に結び付いていた古代末を経て、在地との繋がりを強めた一団が利害の対立する都の親族から分離して「一族之風」を持つようになったと重宗流源氏に家の形成を認める［伊藤2012］。

また、そうした東国武士の姿を野口は次のように記している。10世紀以降に東国における群盗の鎮圧を目的とした軍事貴族の東下、彼らが在地で力を養い国司と対立した平忠常の乱の鎮圧のために平直方などの他の集団が在地の糾合をなし、なお鎮まらない場合は更なる軍事貴族の配置が行なわれるという「東国武士が京都から供給・再生産される」状況が生まれていた［野口2015a：43］。この東国に配置された軍事貴族は、赴任先で在地勢力の統合と支配の一方で都での在京活動によって諸大夫などの身分の獲得と、より貴種との結び付きによって在地支配の強化を再生産する動きを一族で行なっていたという。なかでも源氏に代表される新来の「京武者」、東国下向軍事貴族は鎌倉幕府成立以前から大井・品川氏をはじめとして陸路はもとより河川を通じた流通や情報網の確保に力を注いでいた［野口2012、2015］。こうした視点は、野口が武家棟梁の条件とした物資流通の掌握による武士団統合に読み取れる［野口1994］。

武士団による交通の掌握については、岡が度々触れている。西国で活躍した平氏が海上交通に大きく関与していたことは良く知られているが、河内源氏も為朝の舅である阿多忠景が鹿児島の万之瀬川河口に位置する舶載陶磁を多数出土させた持躰松遺跡のある日置郡金峰町高橋にあったことことなどを引き合いにして武家の棟梁が物資の調達のため河海への進出を積極的に行なっていたことを示している［岡1997、1998a］。さらに陸路についても鎌倉時代に入るが、水陸の結節点に三浦一族を例にあげて房総と東京湾、そして三浦半島に連なる経路を重視していたことを探っている［岡1998b、2004］[32)]。

東国に下向し、当該地に勢力を扶植して、都の親族との利益相反から相対的に独立しながらも在京親族を介して身分の確保と権門との関係を築き上げて在地での勢力を拡大し、再生産しつづける東国武士団は、河海と陸上の交通路の掌握を目指し、武士団家長の下にその凝集力を高めたのである。そうした武士団の凝集性を維持するために、凝集性の根幹をなす家長や棟梁と配下の武士との関係性を確認する必要が常にあった

といえる。

そのあたりの心性を野口は鎌倉武士たちの行動から「執権泰時や侍所別当和田義盛のごとく、幕府の頂点にあってまさに調停機能の担い手たるべき存在までが、理非よりも族的結合を重んじて私闘に身を投じてしまう。そしてそれが称賛されるような意識が鎌倉武士社会を覆っていた」とし、武士たちの調停者として「頼朝は長年にわたって蓄積された東国武士社会におけるさまざまな武力抗争を収拾・調停することで自己の権力の正当化をはかろうとし、そのために、東国の武士たちにたいして源氏にたいする譜代意識の醸成・主従道徳の普及をすすめ、各家ごとに惣領を確定して、一族内の紛争を防ぐとともに役所賦課の便宜もはかった（後略）」（傍点は筆者による）［野口 2004：79–80］と当時の武士たちの家観念とその結び付きの強さを指摘している。

彼ら武士たちが家として親族や配下の者たちと凝集し、また武家の棟梁と家人がその結び付きを饗宴にて取り結んだ。興味深いその一例を野口は平清盛の東国下向計画に読み取る。計画を実行に移すには至らなかったが、大庭景親が松田郷に造営した「御所」にて二十五間の侍所で同じ床に座し、坂東はもとより甲斐・信濃・伊豆・駿河の武士を招き主従関係を結ぼうとしていたという［野口 2012］。

家の成立と主従関係の確認

11 世紀まで遡って、東国に下った軍事貴族を中心として武士たちが家としての武士団へ次第に結束していく姿を文献史学の成果から窺った。そして、交通の要所を掌握して物資調達を怠らず、また同じ床に座る饗宴を通じて人的結束を常に図っていた。饗宴で用いられるようになるのがかわらけである。では、なぜ河越館などの武蔵国北部で 12 世紀中頃に手づくね成形かわらけがかわらけとして最初に出土すると解釈されるのだろうか。

仁安三年（1168）に平家と白河院によって擁立された高倉天皇の即位とともに設けられた内裏大番役として東国武士が在京し、院を頂点とした都の儀礼に身近に接したためであろう。東国武士の在京はそれ以前から国司の館などでの宿直などとして出向いていたであろうが、内裏への出仕は京文化の取得に大きな契機であったろう。他方、浅野は手づくね成形かわらけが 12 世紀中ごろ以降、14 世紀前半にかけての東国の各地遺跡で出土するが、河越館遺跡出土のように武士団が存在した地の他に日光男体山や香取神社などの信仰対象地からの出土もあると指摘する［浅野 1991］。こ

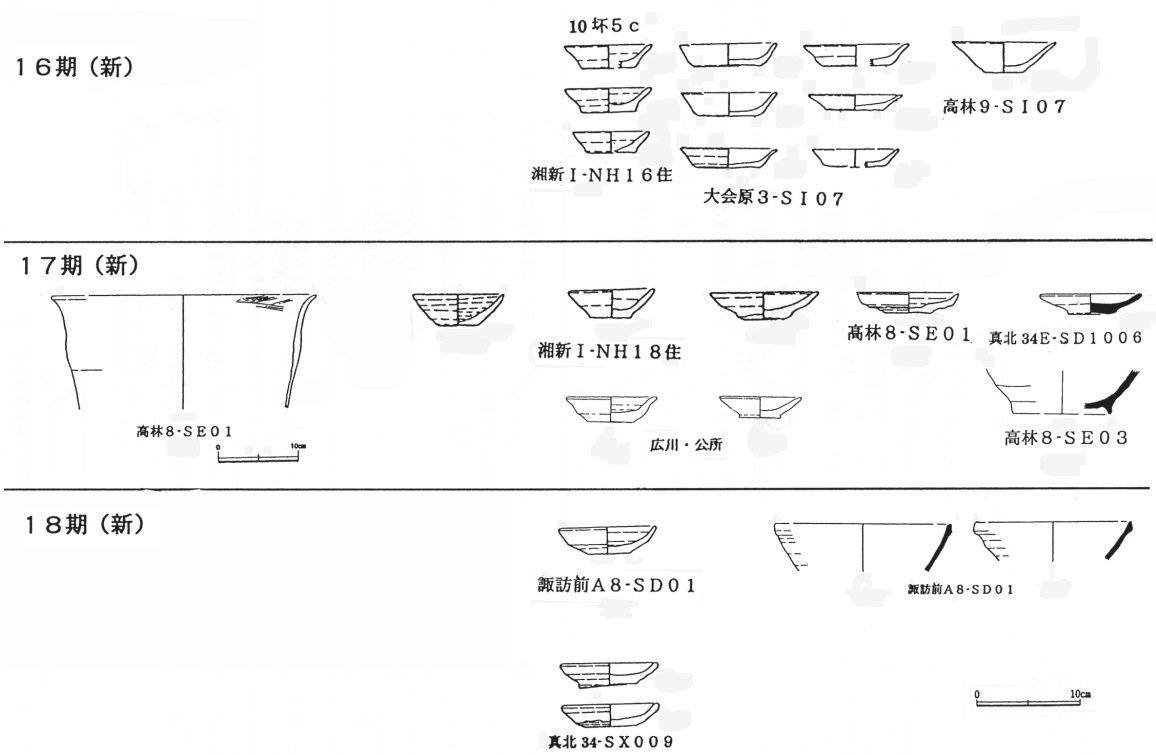


図 31　相模土器編年古代末［若林 2009］

の信仰対象地からは手づくねとロクロの成形技法にこだわらないかわらけが出土するが、これについて荒川は「「人と人」ではなく、「人と神仏」との関係を重視する傾向があって、その際にかわらけを使用した結果、寺院などの宗教関係の遺跡でかわらけが多く出土することになったものと推定される」［荒川 2003：92−93］と述べている。荒川はこうした現象を古代以来継続する在地の集団内では改めて人の結合を確認する必要性は小さかったとしている。その正否は措いておくにしても、武士集団の内部に人的結合を確認する儀礼としての饗宴が行なわれる必要性は、少なくとも 12 世紀以降には醸成されていたと考えられ、さらに神仏との繋がりを求める儀礼にかわらけが用いられるのであれば、土師質土器が大小に法量分化して中世的土器様式が生じた 12 世紀の中頃にはロクロ成形かわらけが存在していたと考えたい。間接的な論拠となるが、16 世紀に小田原北条氏領域内で再び手づくね成形かわらけが現れるが、ロクロ成形かわらけは中世以降近世まで一貫して存在したのであり、手づくね成形かわらけが東国で用いられるのは京都とのかかわりを強く求めた時期であり地域での事象である。

上に平泉でのかわらけの出現状況の概要を松本に従って垣間見たが、ロクロ成形かわらけと手づくね成形かわらけのどちらが時間的に先行して用いられ、どちらが量的に多数を占めるかは、それぞれの地域における武士集団の規模や都の権威をいつどのようにして必要としたかによるものと考えられる。すなわち、地縁や擬制的血縁関係で構成された武士やその配下の者などを惣領の下につなぎ止める家を維持するために、ロクロ成形かわらけを用いた集団と地域もあれば、血縁を中心とした小集団であれば荒川が指摘する神と人との結び付きによって人々が結束する例もあったであろう。他方、武士集団の強い結束が必要となった時点ですでに家の者が大番役などで京に上った経験から、初めから手づくねかわらけを用いた場合もあろう。しかし、繰り返しになるが、手づくね成形かわらけは東国に定着せず、いずれはロクロ成形かわらけに置き代わる様子に、東国のかわらけはロクロ成形を基本としていたことを知ることができる。

よって、筆者の編年においても手づくね成形の導入を画期とするのではなく、基本となるロクロ成形かわらけが形状変化する時期を画期とし、多摩ニュータウン No.693 を含むかつて提示した 1 期から Ⅱ 期までを 1 期とし、前者を 1a 期、後者を 1b 期と捉え、底径の拡大と皿形状化する時期を Ⅱ 期と変更し、以降の時期区分を一つづつローマ数字を繰り上げた時期区分とするが、次節で述べるように、さらに以降の区分も変更する。

かわらけの変容

鎌倉出土のかわらけはロクロ成形を基本とするが、手づくね成形品導入後はロクロ成形と手づくね成形かわらけが形状的影響を相互に与えあい、器高の増大と減少を繰り返し、新たに Ⅱ 期に設定した 13 世紀初頭より双方共に皿形になる。ところが、手づくね成形かわらけが消失した 13 世紀の第 3 四半期にロクロ成形かわらけに底径が小さく、器高の高い椀形が現れ、法量も大・中・小型化する。しばらくして、第 4 四半期、おそらくは 1280 年頃と思われる時期に従来「薄手丸深」と呼称された G 型が現れ、さらには他型式のロクロ成形かわらけも 14 世紀の中頃までには 3 法量となる。この椀形化と 3 法量化、そして G 型は 14 世紀の末まで継続して製作され続ける。とくに G 型はその存続期間が非常に長い。あきらかに 13 世紀の第 3 四半期以降のかわらけは、従来の皿形からは一線を画すものとなり、また 15 世紀代の箱形形状のかわらけとも異なる一時代を画するものである。この G 型の確立を待って、D 型が 3 法量化とともに器高が高まる。よって、当該期を a と b の 2 小期に分ける。

さて、田中は G 型を「鎌倉の得宗の土器」［田中 2003：183］とのべ、都市鎌倉の後半期に執権職を超えて実質的行政権をふるった北条氏惣領による得宗専制の時期のかわらけと捉えている。しかし、G 型は実際は北条氏滅亡後も用いられ続けた。

服部は早くに G 型を特徴とする器壁の薄さと 3 法量化に注目していた。氏が G 型と他の器型の大・中・小型化を分別せずに、南武蔵や相模地域全域に認められる複数の器型における器壁の薄手化と 3 法量化傾向として捉えている点は、筆者と意見を異にするが、それらが［大河内 1993］の指摘する漆器の器型変化と同調したものであるとしたうえで、器壁が厚いまま継続する一群と比べたとき、器壁の薄い一群は異なる生産集団による可能性の高いことを指摘していた［服部 1994］。

G 型と同様に器壁が薄く、椀形を呈する精良胎土の X 型は 13 世紀中頃の他の器型のかわらけとは整形手法が異なり、異なる工房の製品である可能性が高いと考えられる。この X 型には少数ながらも中型も含まれ、G 型などに先行して 3 法量化している。これまでに X 型の類例が他地域に発見されないため、鎌倉近郊が生産地であろうと考えられるが、その生産時期は注意を要する。G 型の 3 法量化と器壁の薄手化は早くとも 13 世紀の第 3 四半期である。G 型の椀形化や薄手化、3 法量化は X 型の模倣と考えるのが現時点では穏当なとこであろう。そうであるならば、X 型の製作地やその集団は不明ながら、G 型を含めて従来の整形手法を

踏襲するかわらけは、新たに現れた製作集団とするには躊躇せざるをえない。しかしながら、G 型はそれまでのかわらけに比べて明らかに異なる精良な胎土を用いる点が特徴であり、X 型製作集団が鎌倉のかわらけ製作集団の整形手法に倣い G 型を生み出した可能性も残る一方で、鎌倉のかわらけ製作集団が X 型の粘土原料入手とその調整法を学んで G 型が製作された双方の可能性を想定して、結論を急がない方が良いかもしれない。

さて、G 型の製作集団については保留せざるをえない状況であるが、この特異な型式のかわらけは他の器型にも影響を与えて、埦形化と 3 法量化を推し進める役目を果し、以後長期にわたって存続した理由は何であろうか。X 型までも含めれば、埦形化と器壁の薄手化は鎌倉に建長寺など北条氏がかかわる禅宗寺院が建立され始めた時期に当たり、執権政治の確立期でもある。その様な状況証拠から田中は「得宗の土器」と称したのかもしれないが、埦形で器壁が薄く、3 法量のかわらけは、法量は異なるものの、初期のロクロ成形かわらけの器形であった器高が高く、底径の小さな埦形に立ち返った感がある。ロクロ成形かわらけはかつて筆者が指摘したように手づくね成形かわらけの影響を受けて、皿形に変化したのであり、埦形化は先祖返りとも考えられる［宗臺 1998］[33]。15 世紀以降の戦国期でも東国のかわらけは埦形、または坏形である［服部 2002b］。

鎌倉で G 型が現れて埦形が定着する時期、入れ替わるようにして手づくね成形かわらけが消失する。この時期は政治的にも重要な時期であった。後嵯峨上皇の死後（1272 年）、後深草と亀山のどちらが治天の君になるかをめぐる持明院統と大覚寺統という天皇家の分裂状況にあって、鎌倉幕府は建治元年（1275）以降、皇位推戴の主導権を握り、ついで延慶元年（1308）には両党迭立を調停する。そして文保元年（1317）に幕府は皇位継承問題不干渉の態度を決定し、以後、京都の権力機構の枢要をなす皇位継承問題とのかかわりを投げ出す。こうした過程のなかで、鎌倉幕府は京都の天皇を中心とした政治と儀礼に対する心理的負い目を払拭したのではないだろうか。こうした鎌倉幕府・北条得宗の天皇や上皇とのかかわり方の変遷を背景として、手づくね成形の消失と先祖返りの新たなロクロ成形かわらけの登場を促したのではないか。なお、この時期に京都の白色土器模倣と考えられているロクロ成形の白色系かわらけが韮山で姿を消していき、京都の手づくね成形の白土器模倣と思われる白かわらけが鎌倉で登場してくるのは新たな儀礼の導入として注意すべきであろうが、出土量は少ない［河野 1981；高橋 1997b；池谷・望月・増島 1998］。これ以降、G 型は鎌倉幕府崩壊後、鎌倉府の時代にも製作続けられ、鎌倉府の混乱が顕著となる上杉禅秀の乱の直前まで用いられていた。北条氏滅亡以後も鎌倉で製作された G 型は「東国武家政権のかわらけ」であった。

東国武家政権のかわらけ

太平記が記すように、元弘三年（1333）、あちらこちらから炎上した鎌倉が灰燼に帰してしまったとは、上述の今小路西遺跡（御成小学校地点）の生活面構成から考え難い[34]。しかし、足利直義による鎌倉府は若宮大路から東方に遠く離れた浄妙寺周辺に移動した。宗教的にも康永元（1342）年 3 月に現在の浄妙寺のある谷戸に新に松岡八幡宮を勧請するなど、鎌倉の政治的空間軸が大きく転換し、宗教的にも新たな模索が試みられた［貫 1996］。第一に鎌倉府は、皇子将軍を仮想源氏として鶴岡八幡宮祭祀を行ってきた北条執権政治との決別を強く意識し、足利氏に密着した行政・宗教センターを作り上げようとしたことを窺える［宗臺 2005、2008］。そして、鎌倉の経済センターとしての機能に縮小は否めないながらも、急激な衰退はなかったのではないだろうか。鎌倉幕府時代に鎌倉の御家人屋敷へと本貫地から運ばれた物資、さらに将軍・幕府家産を支えた関東御領からの年貢とそれをあてにしていた俸禄取りの都市住民の生活など、幕府の倒潰がどれほど影響を与えたのであろうか。

政治的にみて、鎌倉には室町幕府体制の中にあって東国統治を管掌する鎌倉府が置かれ、また鎌倉公方が離れた後も関東管領の上杉謙信が鎌倉を訪れるなど、鎌倉を治めることの政治的重要性は、その後も失われなかった。こうした政治的重要性の背景に、鎌倉時代とくに「御家人の棟梁」が物資の確保を担って興隆した都市経済の繁栄がある程度継続していたからと思われる。出土する瀬戸窯製品や舶載磁器の出土様相から幕府崩壊後に急激な経済的衰退や人口の急減は窺えない（図 25・26、表 5）［宗臺 2005、2008］。古田土も 14 世紀の陶磁器組成から幕府滅亡後から 15 世紀にいたるまで高級品が消費され、山田が『余目氏旧記』の記述から室町時代の東国大名が鎌倉中に住むことができないほど人口が過密であったと示した成果［山田 2014］をひいて、人、モノが流れ込む急進的な構造は室町時代にかえって強化されたとする［古田土 2016］。しかし、上杉禅秀の乱前後と考えられている 15 世紀前葉の遺物を出土した上杉氏憲邸跡の調査では、古瀬戸後Ⅰ～Ⅱ期の縁釉小皿を初めとして卸皿、直縁大皿、平碗と天目茶碗、柄付片口、合子、香炉などの後期前半までの製品が主体を占め、舶載青磁では椀Ⅳ類が目立つ（図 12）。このように、瀬戸窯製品と

舶載品に袋物の調度品が見られず、天目茶碗を除けば日常生活の食膳・調理具が中心となり、古瀬戸前期や中期中頃までの調度品を保有し続けていた前代までとは明らかに異なる。こうした調度品の明らかな減少と日常品への傾斜は、鎌倉の都市としての繁栄の基盤に政治的な要素が欠落しはじめたことを明示している。

14 世紀の鎌倉は都市としての実体を保持していたが、鎌倉府の動揺とともに 15 世紀に入ると搬入される陶磁器の器種が従来と異なり、経済と社会が次第に縮小していく様子を窺うことができる。他方、朝比奈砦遺跡に発見された納骨穴には蔵骨器として常滑窯 8 型式の甕が据えられ、その内部から瀬戸窯小型壺と合子、それに卸皿の破片が発見された（図 27）。灰釉合子の身は古瀬戸中Ⅰ期、鉄釉小壺は中Ⅱ～Ⅲ期に比定できる。甕は 14 世紀後半と、それほど古いものでないが、合子と小壺などが長期間保有されていた傾向をみることができる［土屋（編）2002］。葬送行為とその担い手は、前代までの慣習を継承し、小型ながらも袋物を長期保有する居住者が存在したことを物語っており、都市鎌倉の衰退は 15 世紀に入り急激に進行したものの、いまだ都市民の居住は続いていたと考えられる［藤木 1997］。

まとめ

前稿にて先学に学び、本稿での課題は鎌倉のかわらけを型式分類し、その祖形と変遷を探ることであった。その過程において、編年作業は共伴遺物ではなく、伴出遺物による年代比定が有効であり、中世社会の成立は軍事貴族が京都の血族から分離した家の立ち上げとともに、食膳具における焼物の器種単純化と遠隔地間交易を前提とした器種別分業という中世土器様式を前提としたと考えた。その結果、器種の単純化という側面から土師質土器が坏・皿に単純化し、大小の法量分化をおこなう 11 世紀後葉から 12 世紀前半にかわらけの祖形が現れたと考えた。その前提に東国社会に家の形成と主従関係の確認が必要となり、また東国武士が大番役以前から在京するなかで都の文化に接して、饗宴儀礼がもたらされた可能性を考えた。

かわらけ成立以後の変遷と年代については、かつて筆者が示したかわらけと伴出遺物一覧を再度提示しながら、先ずⅠ期とⅡ期をⅠ期の ab2 小期として以後の変遷時期を一段階づつ減じた。また、共伴遺物がかわらけの年代を示す場合は少なく、器種別分業によって主に東海地方の遠隔地から運ばれた伴出遺物による年代比定が有効であることを改めて示した。部屋飾りなどの袋物や長期使用を前提とした壺・甕類の耐久消費財の生産年代よりは山茶碗などの消耗品の生産年代が有効であることを確認した。土鍋もまた有効であると考えられるが、一部を除いて今回は割愛した。そして、かつて「薄手丸深」とされた G 型に特徴的にみられる埦形と 3 法量化は、京都の政治的・文化的優位性を払拭した鎌倉幕府政権下で生み出された「東国武家政権のかわらけ」であったとした。瓦器埦や早島式土器（吉備型土器埦）の鎌倉での出土をもって地方より鎌倉に出仕した武士を想定し、その武士が鎌倉に京を見たのではないかと想定されることもあるが、そうしたえせ京都からの脱却がなされたことを示すのが G 型かわらけである［河野 1986a］。

「東国武家政権のかわらけ」はほぼ 14 世紀いっぱいまで多少の変化を経ながら作り続けられるが、脇田が土器を正式食器とすることは「天皇・皇族とは特に関係なく、天皇家の食器は、延喜式段階から中世を通じて、近世に至るまで、金銀器、銀器を基本とした事がわかった。（中略）「式三献」以下の足利幕府の「武家」を中心とする儀礼の発達は、蔵人所滝口の侍の儀礼に根ざし、鎌倉幕府の「大盤」に淵源を持っていることがわかった。いわば、王朝国家の侍の伝統の上にたって、その儀式の肥大化がなされたといえよう。その儀式やそれにともなう饗宴の盛行のなかで、土器の使用も逆に盛大化していくと考えた」［脇田 1997：493］と指摘するように、前稿で記した東国における京都に対する認識はあくまでも東国人が「都」と感得する事物であって、京都そのものではないことを再度確認しておきたい。さらに、京都で 14 世紀以降にかわらけの出土比率が増加し、いわゆるかわらけ溜まりも増加する状況は、かつて筆者が鋤柄の提示した資料から論じた点を補強し、加えて「東国武家政権のかわらけ」の使用法が東国武家によって京都にもたらされたことを指していないだろうか［鋤柄 1994；宗臺 2002］。

註

1) 多摩ニュータウン No.692 遺跡出土の土師質土器は、A ～ C の 3 つに分類されているが、12 世紀前半から中ごろの遺構である 1 号段切りの下層に伴うものは A 類とされ、ここでは A 類のみを取り上げる。

2) 相模国東南部の蓼原遺跡・佐原泉遺跡でも古代末のロクロ成形坏が出土していると報じられている。これらの資料については中三川による再検討を経て、蓼原遺跡の黒色処理土器はかわらけと判断され、佐原泉遺跡の例は 10 世紀末～ 11 世紀前葉の土師質土器とされている［中三川 2009］。蓼原遺跡の例は後述の千葉地東遺跡河川最下層出土例より遡るとされているが、器高の低化傾向が現れているため、それ程時期差がないものと考えられ、千葉地東遺跡例の直前あたりであろう。口径 14 ㎝前後、底径 6 ～ 7.2 ㎝、器高 4 ～ 4.7 ㎝。また、底部脇の器壁が厚いのは、相模Ⅶ期以来

の傾向を残している。

また、多摩ニュータウン No.692 遺跡出土かわらけとこれら相模Ⅶ期の土器との関連については、既に［宗臺 1998］で述べている。ここにその一部を抜粋する。「（多摩ニュータウン No.692 遺跡出土の土器は）底径が小さく、大型にはロクロ目が強く残され、後述の千葉地東遺跡河川下層出土大型かわらけとよく似ている。さらにこの土器は、すでに大小の法量分化をしており、それ以前の土器とは異なっている点が重要である。12 世紀前半の相模Ⅶ期の土師器である。相模Ⅶ期については多少の問題もあるが、多摩ニュータウン No.692 遺跡の土師質土器につながるものと考えて良いだろう。他方、相模Ⅵ期では、特徴的な脚高高台坏と回転糸切り底の土器が混在している。脚高高台坏は関東を中心にして東国の 10 世紀後半～ 11 世紀にかけて広範囲に広がるもだが、この時期の土器は同一器種には 1 タイプの法量しかなく、後の大小 2 つの法量分化とは異なる。この脚高高台坏を最後に、土器の坏は大小 2 つの法量分化へと大きく変ることを理解できるが、同時にこの変化に伴って、土器の甕、鍔釜などの調理加工に用いる器種はなくなり、焼き物別、原材料別に器種と用途を弁別したことの現れであり、土師質土器坏は木製の碗皿の影響を受け、回転糸切り底の大小 2 タイプに変化したと考えられている［仲田 1993］。こうした古代末からの土師質土器の流れをなぞるならば、12 世紀末頃と考えられた鎌倉の糸切り底かわらけは、この 12 世紀前半における材質別器種分化の中から生まれてきたと考えられる。

ただし、注意しなければならないのは、多摩ニュータウン No.672 遺跡の大型土師質土器は底径・口径比、そしてその器型からすれば、多摩御殿山 G5 様式須恵器を模倣した 11 世紀前半に現れる土師器終末タイプやロクロ土師器と非常に良く似ていることである。一方、小型の土師質土器は土師器の流れの中からは追えず、12 世紀に入って新たな展開として現れてきたものである。であるならば、多摩ニュータウン No.672 遺跡の大小土師質土器が、そのまま木器の影響から生まれ、中世へと移行したとは単純に考えられず、その間にはもう 1、2 段階の器種・器形変遷を想定しておかねばならないだろう。

このように底部糸切りかわらけは、まさに古代末の土器坏の系譜につながるものと考えられるが、器高の高い底部糸切りかわらけが中世に入り、急激に浅い皿形へと変化していく」。なお、A・B タイプに分類されている多摩ニュータウンの資料のうち、B Ⅰタイプにはスノコ痕とよばれる板圧痕がのこり、また、内底には横方向の指ナデ痕が観察できる［斎藤 1988：65］ため、B 類が出土する上層は時期的にかなり下るであろう。

3) 千葉地東遺跡ではここで取り上げた層位の出土遺物が多々あるが、それらの層位認定に混乱のあることをすでに前稿で記した。本稿においても本遺跡資料の利用にあっては、ここで扱った北東側河川 4 砂層下部出土遺物のみを用い、より上層出土遺物については考慮しないこととする。

4) ここに上げた文献では、手づくね成形をⅠ類、ロクロ形成かわらけをⅡ類としていたが、鎌倉を初めとして関東の多くの地域ではロクロ成形土師器の伝統のなかからかわらけが生じたと考えられるため、ロクロ成形かわらけをⅠ類、手づくねかわらけをⅡ類に変更する。

5) 中山はスノコ状圧痕を手づくねかわらけ整形後の乾燥の際についた乾燥台の痕跡であるとし、板状圧痕をロクロかわらけの内底面のロクロ目を消すために横方向のナデを行って生じたものであるとしている［中山 2003b：283］。本稿ではこれまでの調査報告例に基づいてロクロ成形かわらけの外底面に残る痕跡をスノコ状圧痕としておく。今後の各地域研究者によるすり合わせを待ちたい。

6) 鎌倉の二階堂に所在する永福寺跡の調査成果と出土瓦による年代の推定根拠については［原・宗臺 1996］を参照願いたい。

7) 本稿における陶器の分類は、次の文献に依拠する。常滑窯製品については［中野 2013a］、瀬戸窯製品については［藤澤 1995 ほか］、渥美・湖西窯製品については［愛知県史編纂委員会 2012］を基本として、その後の訂正・変更などを採用する場合は、その都度明示する。東遠江の山茶碗類は［松井 1993］をやはり基本とした。

8) 本稿おける磁器と搬入陶器の分類は、太宰府市の調査分類［山本 2000］にしたがった。

9) ここでの G 型が従来のいわゆる「薄手丸深」である。

10) 内底面のナデは、ロクロ成形かわらけの影響と考えられる［宗臺・宗臺ほか 1996］。

11) ここで示した各型式を配置するにあたっての出土層位と遺跡間の年代差は本文中で簡略に記したが、その詳細な出土層位とその層序関係については拙稿［宗臺 1991、1998、2002］をご覧いただきたい。

12) この点については［池谷 2018：12］が大量廃棄遺物群を用いて京都系かわらけ＝手づくねかわらけの技術的伝播を論じた論考で少しく触れている。また、筆者の意見は、以下の通りである。一括大量廃棄という言葉を使い、そうした遺構からした出土した遺物を優先的に用いる編年作業は、一括遺物の考古学的概念規定を逸脱するとともに、編年作業における優先順位は層序・層位別出土遺物にある。また、考古学の基本的考え方から逸脱している自らの方法論を以て導き出した編年を文献史学の成果に無理やりすり合わせることは、歴史研究としても認めることはできない。前稿の研究史でも度々指摘したように、鎌倉とその周辺における諸遺跡出土のかわらけは、いわゆる hord を明示する状況を確認できていない。鎌倉の調査にあって「かわらけ溜まり」とされる遺構出土遺物群が一時に捨てられたものであるのか、複数回にわたって廃棄された遺物群の総体であるのか明確な層序を認めることはできていない。平泉遺跡群での井戸状遺構出土のかわらけを大量に交えた遺物群でも同様である。井戸状遺構内土層堆積図を見る限り、一度の廃棄のみであるとする確定情報はなく、短期間の複数回廃棄であると理解する方がより妥当性が高いと考えられる。それを hord、一括遺物とすることは hord、一括遺物の拡大解釈であろう。その拡大解釈のどこに歯止めを求めるのか、そ

の規定がない限りはいたずらに「一括遺物」や「共伴」と言わずに「伴出」なる用語で対応すべきである。

13）ただし、その際の印刷の不具合によって、一括遺物群を括った細罫線が消えかかっていたために、読者には判読できかねるものであった。そこで今回、図 22 ～ 28 として再度提示した。

14）［中世土器・陶磁器編年研究と流通様相の年代的解明班（編）2005］の中で一括遺物と伴出遺物について（文言としては共伴遺物の言葉が使われている場面が多いが、）次のようなやり取りも行なわれている。佐々木建策：「（前略）一括遺物としては、人為的に一度に埋没されたとかお墓とかを中心に集めた方が、より慎重性の高い一括資料に集成できるのではないかと思って調査を開始して、実際に探してみると（中略）全体的に並べて検討するにはなかなか乏しくて、多少の遺物が集っているものを探すとなると、溝や廃棄とかいうものになってします（後略）」(214)。松井一明：「（前略）一括性の信頼性を持たせる資料が静岡県にはなく、例えば本島遺跡についても一括としている遺物でも、一点でも共伴していれば、それでもう一括と言えるのかという疑問も私は持っており、傾向しかわからないと思います（後略）」(242)。金子健一：「（前略）一括遺物といっても、土の中にまとめて捨てられたものの他に、例えば西に噴火や焼土でパックされたという性格のものもあると思うのですが、今回はそういいたものは含まれていません。そういったものの取り扱いについても言い出したら切りがないのですが、何年の噴火や焼土層であるという議論が出ますが、そういうこともどこまで厳密に追いかけて、小さな調査地点 1 ヶ所で、比定してもものを見てしまうことが往々にあります（後略）」(242)。吉岡康暢：「一括とうことをいえば、一括廃棄とか、墓を含めた一括埋納かと思います。そうなれば基準的にはまず火に合った（ママ）もの（中略）、いずれにしても一括土坑や火災とかになりましょう。（中略）ある程度量がないと駄目ですけど」(243)。藤澤良祐：「（前略）基本的には長期間の一括資料があっても全く構わないと思います。期間に限らず、一括性自体は遺構の発掘で決めるべきものではないか、どういう状況で出たのかで決めるべきものではないかと思っております。それで、基本的に中に何が入っていようが、埋まり方がどうなのだと言うレベルで一括というふうに理解していたところです。（中略）資料の使い方としては、その型式のものがどれだけ入っているかということを前提に見ていれば、それなりに使えるということがあるのではないかと思います」(243)。浅野晴樹：「（前略）一番良いという墓のデポとかでも（中略）絶対に（ママ）生活をあらわしていません。良い遺物かもしれませんが、（中略）ある意味から言うと精度は高いのですが、資料的にはちょっと落ちるかなというようなもんだと思います（後略）」(244)。前川　要：「（前略）やはり研究のいろいろな段階があると思うので、タイプとして認識されたものが最終的に並んだものということになるわけですが、まず私が柴垣さんとか浅野さんに言っていたのは、編年表の提示を考えているのです。来年のシンポジウムで出したいのは、編年表で、その編年表に至るまでのプロセスがあり、その段階では、タイプをまだ認識できない場合はある程度並べなければいけないということも生じてくるので、そういった中で他地域との比較を見ながらタイプが徐々に認識されてくるということもあると思います。研究のプロセスも大事だと思います。それができた上で、長期使用や遺構の性格などが考えられ、研究のプロセスというのがあるので、その段階まで一挙にはいかないのですが、そこに至るまでの準備段階も必要ではないのでしょうか」(245)。浅野晴樹：「（前略）一括資料はひとつの手段として用いられているかと思うのです（後略）」(245)（傍点は筆者による）。藤澤の見解は、吉岡の言うような、また本稿の中で筆者が述べたような一括遺物の学問的限定ではなく、研究目的と調査現状において、より現実的な対応を述べている。それは共伴や一括遺物ではなく、ある程度時間を限定できる遺構出土の伴出遺物の利用を述べている。前川の言葉も同様であろう。本稿においても、言葉は異なれども、伴出遺物の積み重ねを基本としながら、随時利用できる年代指標を用いてかわらけの年代を求めたい。

15）近年では日本中世土器研究会が「中世土器研究中軸資料の再検討　－畿内系土器類と東海系陶器類の並行関係」と題した研究集会を行ない、山茶碗を基準資料として編年の再考を行なっている［日本中世土器研究会（編）2015］。

16）竪穴建物の廃絶時期を建物内覆土出土の常滑窯産甕の型式から探った鈴木の論考もある［鈴木 2013］。

17）尾張型も東濃型も山茶碗・皿は 6 型式期に比較的多く搬入され、それ以前にも既に示してきたように搬入されていたが、東遠江型が少量であるものの却って多かった。搬入経路の変更が尾張型山茶碗・皿の搬入をもたらしたのであろうが、それがこの時期に止むのは南伊勢系土鍋の様相とも一致していることに注意したい［宗墓富貴子 2004］。

18）由比が浜中世集団墓地遺跡（由比が浜 4–1130）に発見なれた道路面版築層から文永九年の銘がある木簡とかわらけが出土しているが、未報告である。

19）暦年較正年代を求めるにあたって用いられたプログラムは以下の通りである。IntCal 13 のデータベースをもとに、OxCal v4.2 プログラムを使用している。

20）本稿の（前）編においても取り挙げたように、藤澤が蔵骨器を中心として用いた古瀬戸窯壺・瓶類の埋納品が生産から埋納に至までの期間が 50 年あまりにおよぶ点を指摘している［藤澤 2001］。

20）搬入品を含めた出土遺物総体から編年を試みたものに［馬淵 1997b］があり、その論点に立脚して 14 世紀以降の鎌倉の編年を見直した［服部 2002a］がある。本編の編年視点と異なるため、以下に若干のコメント記しておく。上記論考が重視するのは、遺物の出土点数の集積である。類別、型式別の集積の上で、何がいつの時期に多いとの考察は、遺跡や地域の社会・政治状況を論じる場合に有効であり、年代の論議には全く不向きではないだろうか。年代を論じる場合は出土品のうちの最新遺物の型式年代幅の中で捉えたうえで、他地点とのすり合わせを経て求められるものであ

ろう。もちろんそうしたすり合わせを出土点数の傾向で処理する姿勢は読み取れる。しかしながら龍泉窯青磁のI–5が今小路西遺跡の5面から、III類が4面から出現し、3面でピークを迎えて2面で減るのは、鎌倉の面構成と地業を考慮に入れなくとも、従前からの搬入品使用後の廃棄の集積であって、当然のことと考えられる。2面で減るのは急激な搬入量の減少が考えられる。この点を新安沈没船積載磁器型式年代と、それらが3面から出土しないことより、全体の年代を引き上げようとする論旨は、一度立ち止まってみる必要がある。なぜならば新安沈没船遺物以前の博多と鎌倉で同一年代とされる時期に出土する中国磁器が同じ型式組み合わせを持っていなかったからである。なぜ新安だけをよりどころにするのか、疑問である。この鎌倉好みともいえる龍泉窯青磁碗の長期にわたる大量出土については博多における白磁類のストック残庫が平泉に搬出されたとする田中の論考が興味深い視点を示している［田中克子2019］。

他方、藤沢の瀬戸窯編年は、筆者が従来より示し、今回再度提示した建長寺の遺構や今小路西遺跡出土瀬戸窯製品の最新器型で行った編年と10年も違うものではない。そうであるならば、舶載磁器の減少と瀬戸窯製品の増加を14世紀前葉に思い描くのではなく、用途分担の結果と考えるべきである。服部はそうした動きを食器様式の転換と捉えらているが、威信財と食器が産地と材質を明確に分担した結果ではないだろうか。そして、瀬戸窯の袋物が二次的な威信材としての地位を確立したのである。そのため、今小路西遺跡の2面に古瀬戸中Ⅳが少なく、1面に至っても少ないのである。そして、同様にそれらは中世鎌倉全体で少なく、幕府滅亡後の瀬戸窯製品搬入が全体に減少したものと考えられる。このように考えるならば、今小路西遺跡の2面は14世紀第2四半期以降となり、14世紀第2四半期から1333年を挟んだ時期になると考えて良いだろう。1333年を境に生活面が変わると考える必要はなく、元弘三年に生活面の更新があったとする解釈に固執する必要はない。

22）［宗臺富貴子1991］は今小路西遺跡（御成小学校地点）調査時点での年代観を援用しているため、本稿が提示した年代観より若干遅いため、本稿の年代観に添って読み直している。

23）この政所跡（雪ノ下三丁目988番地点）出土の静止糸切りかわらけには、確かに大型も存在するが、その数は少なく、大半が小型である点に留意する必要もある。また、縄で束ねられた各群の中には「回転糸切りと静止糸切りが混在しており、搬入されてから屋敷内で束ねられたものか、“かわらけ工房”で二系統の製作技術が併存していたのか、あるいは複数の工房から買い付けを行ない市内に売捌く“かわらけ売り”が存在していたのか、いくつかの可能性を示唆させる」［鈴木2008：19］と指摘されているように納入後にまとめられた可能性も高いが、それよりも複数工房が納入（貢納）組織の下に編成されていた可能性の方が高いと思われる。「貢納」の言葉は、かわらけ入手経路が不明の現在、使うべきでないであろうが、京都での事例（『醍醐雑事記』久安五年の記事［横田1988］）のように、粘土の採取と燃料の取得にあたって何らかの公権力の認可、後ろ盾が必要であったろう。

24）［河野1992］は「平安末に土器生産の基盤も伝統も失っていた場所に、急に多くの軍事的・政治的人口を抱え込んだのだから、土器にしろ手工芸にしろ搬入するか移入するしかなかったはずである」［同書：163］と述べているが、土器の生産伝統を全く失ったとは言い切れない。

25）松吉の場合は、かわらけだけでなく鎌倉の中世遺跡から出土する土製品の胎土分析とその搬入経路と製作者集団の見極めに軸足を置いている。それによれば、鎌倉中世遺跡から出土する白色胎土の白かわらけは、鎌倉地域で製作されたが、かわらけとは異なる成分を示したとする。かわらけといわゆる白かわらけは異なる工人集団によるものであり、その用途も異なっていたことを示唆している。

26）出土地点は明確ではないが、神奈川県内西部から中央部にかけての諸遺跡でG型が出土しているのを実見した経験があり、中世鎌倉のかわらけが地域外に全く搬出されていないとはいえない。しかし、それは非常に少数であり、物資として搬出されたとするよりは、鎌倉で何らかの会合に出席した御家人が個人的に持ち帰ったものであろうと思われる。

27）羽柴は東日本の広範な地域の古代末から中世初頭の土器群を比較検討する手法として出土土器をA～Gの7つの器種に分類して、各器種の消長から中世への移行期と土器食器構成を探っている。土器器種分類はA類が小型坏・皿、B類が大型坏、C類が高台付坏、D類が黒色椀、E類が小型器台、F類が手づくね成形かわらけ、G類がロクロ成形かわらけである。こうした分類をみても判るように羽柴の意図は細かな編年ではなく、広範囲な地域に共通して認識できる器種分類であり、用途の分類であることを認識できる。それであっても、かわらけ以外は器の器形をもって分類しているにもかかわらず、かわらけだけが「京都風の手づくねかわらけ」と「手づくねかわらけの影響を受けた皿形のもの」［羽柴2011：24］とあくまでも京都産中世土師器皿とその模倣によるものであり、「新規に導入される儀礼を念頭に入れ、前代の「土師質土器」と区別するため「かわらけ」の名称を用いる」［同上：23］と、京都風の儀礼を導入するために、その際に必要となる器をかわらけと規定している。そのため、羽柴は自らが示した11世紀中葉以降の土師質土器の大小の皿または坏への収斂を「土師質土器の変化であり、中世的な土器様式の出現と評価すべき現象ではない」［同上：83］として、12世紀代の平泉やそれ以降の手づくね成形かわらけの導入をもって中世的土器様式とする。そして、京都においても12世紀代に土師器が中心となった土器様式が成立しつつあったとする高橋の論考を挙げ［高橋1997b］、汎日本列島で12世紀が中世土器様式の成立期であるとする。なお、京都系手づくね成形かわらけが見込みにナデと外底面に板状圧痕を残すロクロ成形かわらけを新規に作り出すとする［田中2003］の見解とも通じる点がある。

28）宇野は「土師器系の土器（土師器・黒色土器・瓦器）以外

の食器生産がすたれ、発達した流通の体制によって他の必要な製品を入手するようになる地域とみなしうる」［宇野 1984：102］とし、「畿内、及び東国は大宰府・京都・鎌倉という都市をもち（中略）これらの消費が発達する地域は窯業の分野で競争に敗れた地域ともみなしうるが、むしろ必要な製品の一部を流通によって入手する経済力をもった地域と推測したい。中世的土器様式の認識の難しさの一つの理由は、この各地域において独自の様相が現れる一方で、一定の共通する動向と流通の関係をもつことにある。そして程度の差はあるが、生産地と消費地の広域流通の発達が各生産地と在地の製品の器種分業を生むという共通の動向に中世の食器の特質があると考える（後略）」［同書：103］としている。必要な製品の入手を流通体制の確立を前提に外に依存している姿の指摘は、陶器生産を行なう東北よりも中世の鎌倉に近似している。

29）註 28）で示したように宇野もこの点を重視している。

30）一つの器種、この場合は土師質土器の坏・皿器型への単純化については、堀内が平安宮での供膳形態が平安時代初期に「単純器種多器形型から多器種単純器形型へと変化をたどる」と述べていることにも通じる［堀内 1997：109］。

31）脚高高台坏と高台付坏を羽柴は器台としていた。また田中の成形手法の呼称は吉岡による。

32）ただし、こうした交通路がこの時期にはじめて形成されたのではなく、11 世紀以降の武士団が積極的に関与を深めて、家の凝集性を高めたと考えられる。これ以前の交通路についても田尾らが地域社会の接触や分裂・拡大がみられたことを考古学的資料から窺っている［田尾・新井 2017］。また、野口は近年の研究成果から「治承・寿永内乱以前の有力な東国武士も、それほど地域限定的な存在とはいえず、最近の研究からは流通や交通形態に規定された都市的な場をその存在基盤にしていたことが明らかにされている」［野口 2015a：25−26］とも述べており、武士団がその家を維持・再生して行くためにも物資流通拠点を押さえていたことが判る。

33）武家集団が己の使用するかわらけにこだわる姿勢は、『吾妻鏡』文治五年十月大一日 丁亥の条に「多賀の國府において、郡郷庄園所務の事、條々地頭等に仰せ含めらる。就中に國郡を費し、土民を煩はすべからさるの由、御旨再三に及ぶ。（中略）およそ奥州御下向の間、鎌倉御出の日より、御還向の今に至るまで、毎日御羞膳・盃酒・御湯殿おのおの三度、さらに御懈怠の儀なしといへとも、つひにもつて民庶の費を成さしめざるところなり。上野・下野両國の乃貢を運迭すと云々。人もつて欽仰せずといふことなし。また河野四郎通信、土器を持たしめ、食事に毎度これを用う」との記述から窺える。文脈では奥州遠征にあたり、行軍先（ここでは多賀国府であるが）で民からの兵糧等の徴収を行なわず、持参した趣旨を述べているのだが、その中にはかわらけも含まれていたようである。内容的には頼朝、または鎌倉軍が奥州を蹂躙しなかったことを述べようとしているのだが、図らずも西国出身である河野通信は平泉地域のかわらけを用いず、鎌倉のかわらけ、または東国のかわらけを持参して用いていたことを示している。鎌倉の軍門に降った平泉のものではなく、勝利した鎌倉のかわらけを用いることに意味があったのであろう。

34）註 21 を参照。

引用・参考文献（前稿の文献を含む）

愛知県史編纂委員会　2007『愛知県史　別編　窯業 2　中世・近世　瀬戸系』愛知県 .

愛知県史編纂委員会　2012『愛知県史　別編　窯業 3　中世・近世　常滑系』愛知県 .

アーヴィング・ラウス（鈴木公雄訳）　1974『先史学の基礎理論』雄山閣出版 .

赤星直忠　1937「鎌倉の考古学的研究（七）「かわらけ」について・「箸」について」『鎌倉』3（1）通巻 8：12−15、鎌倉文化研究会 .

赤星直忠　1980『中世考古学の研究』有隣堂 .

秋山哲雄　2004「都市鎌倉の形成と北条氏」『中世都市鎌倉の実像と境界』23−40、高志書院 .

朝香年木　2005『日本古代手工業史の研究』法政大学出版局 .

浅野晴樹　1988「東日本における中世在地産土器」『東国土器研究』1：168−169.

浅野晴樹　1991「東国における中世在地系土器について　－主に関東を中心として」『国立歴史民俗博物館研究報告』31：55−126.

浅野晴樹　1992「関東における模倣品としての在地土器」『貿易陶磁研究』12：83−96.

浅野晴樹　1997「中世在地土器の実態」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』8：247−264.

荒川正夫　2003「中世城館の成立と地域性」『中世東国の世界Ⅰ　北関票』81−98、高志書院 .

飯塚武司　2000「古代手工業生産における木工」『考古学研究』47（3）：63−83.

飯村　均　1998「東国のかわらけ」『中近世土器の基礎研究』13：13−26.

飯村　均　2004「土器から見た中世の成立　－その連続性と非連続性の視点から」『中世の系譜　東と西、北と南の世界』考古学と中世史研究 1：169−178、高志書院 .

飯村　均　2009「平泉から鎌倉へ」『中世奥羽のムラとマチ　－考古学が描く列島史』39−65、東京大学出版会 .

池谷初恵　2004「東国境界域の白いかわらけ」『中世東国の世界 2　南関東』207−226、高志書院 .

池谷初恵　2008「伊豆地域におけるかわらけの変遷とその背景」『地域と文化の考古学Ⅱ』201−218，六一書房 .

池谷初恵　2018「中世初頭の東国の京都系かわらけにみる技術の導入と変容」『中世の技術と職人に関する総合的研究　国立歴史民俗博物館研究報告』210：9−27.

池谷初恵・望月明彦・増島　淳　1998「伊豆国における白色系かわらけについて」『静岡県考古学研究』30：274−299.

石川安司　2016「12 世紀後半の北武蔵の手づくねかわらけ」『鎌倉かわらけの再検討　－大蔵幕府周辺遺跡の一括資料の分

析から』50−57、かわらけ研究会編、科学研究費補助金「平泉研究の史料学的再構築」刊 .

伊藤正人　2000「耳皿ノート」『中近世土器の基礎研究』15：237−274.

伊東瑠美　2012「11 ～ 12 世紀における武士の存在形態（上･下）」『古代文化』56（8）：237−48；56（9）：31−40.

伊野近富　1985「京都北部の中世土器について」『中近世土器の基礎研究』1：22−28.

伊野近富　1987「かわらけ考」『京都府埋蔵文化財論集』1：395−408.

伊野近富　1989「12 ～ 16 世紀の京都の土器」『中近世土器の基礎研究』5：115 ～ 122.

伊野近富　1998「中世前期の京都系土師器皿の伝播と受容」『中近世土器の基礎研究』13：3−12.

井上雅孝　2010「平泉かわらけの系譜と成立　－土器から見た「古代」と「中世」の二重構造」『兵たちの生活文化』156−185、高志書院 .

今井淳一　1991「能登の中世土師器編年と多変量解析」『考古学におけるパーソナルコンピュータ利用の現状』4：135−146、帝塚山考古学研究所 .

岩崎卓也　1998「総論」『古墳時代の研究』6:211−24、雄山閣出版 .

上村和直・山本雅和　2001『平安京左京二条四坊十町』京都市埋蔵文化財研究所調査報告 19.

宇野隆夫　1981「第 3 章　遺物～第 4 章　遺物の考察」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ　白川北殿北辺の調査』25−76.

宇野隆夫　1984「後半期の須恵器　－平安京・京都出土品にみる中世的様相の形成」『史林』67（6）：66−104.

宇野隆夫　1985「古代的食器の変化と特質」『日本史研究』280：3−28.

宇野隆夫　1997「中世食器様式の意味するもの　－計量分析による使用法の復元」『中世食文化の基礎的研究　国立歴史民俗博物館研究報告』71：377−430.

宇留野主税　1996「八王子城御主殿出土のかわらけについて」『八王子市埋蔵文化財年報　平成 7 年度』28−38.

宇留野主税　2000「中世後期における南武蔵・相模地域の地域様相　－かわらけの検討を中心として」『Archaeo−Clio』1：60−90.

遠藤元男　1985『古代中世の職人と社会』日本職人史の研究 2、雄山閣 .

大河内　勉　1993「漆器とかわらけの器形比較と相関性について」『鎌倉考古』26：1−5.

大河内　勉（編）　1990『笹目遺跡発掘調査報告書』笹目遺跡発掘調査団 .

大塚初重　1978「土師器・須恵器の編年とその時代」『日本考古学を学ぶ』1：211−24，有斐閣選書 .

大橋康二　1979「中世における赤土器・白土器雑考」『白水』7：40−44、白水会 .

大庭泰時　1999「博多かわらけ考 1　－土師器皿一括廃棄遺構を中心に」『法哈達』7：61−80、博多研究会 .

大三輪龍彦　1985『鎌倉の考古学』考古学ライブラリー 32、ニュー・サイエンス社 .

大三輪龍彦（編）　2005『浄光明寺敷地絵図の研究』新人物往来社 .

岡　陽一郎　1997「海からみた源氏　－西の浜から」『史学雑誌』106（12）：102.

岡　陽一郎　1998a「海と河内源氏」『古代文化』54（6）:13−22（大会報告）.

岡　陽一郎　1998b「中世陸上交通の一側面　－荷車からみた東国社会」『史学雑誌』107（11）：118（例会報告）.

岡　陽一郎　2004「義朝以前の鎌倉　－三浦一族との関係から」『三浦一族研究』8：24−38.

奥田直栄　1976a「土器三題（その一）」『世界陶磁全集第 5 巻月報』1−2、小学館 .

奥田直栄　1976b「土器三題（その二）」『世界陶磁全集第 14 巻月報』2−3、小学館 .

押木弘己　2016「相模国における古代末期の土器様相」『鎌倉かわらけの再検討　－大蔵幕府周辺遺跡の一括資料の分析から』36−47、かわらけ研究会編、科学研究費補助金「平泉研究の史料学的再構築」刊 .

押木弘己　2018「中世鎌倉の食器文化　Ⅰ鎌倉の「かわらけ」成立前夜」『考古学ジャーナル』716：15−16.

尾野善裕　2013「京都からみた〈山茶碗〉編年　－空白の 14・15 世紀をめぐって」『第 2 回東海土器研究会　渥美窯編年の再構築』74−92、東海土器研究会 .

小寺　律　1990「手つくねかわらけの製作技法の復元的研究のために」『中近世土器の基礎研究』6：92.

金子健一　2000「土師質煮炊具からみた中世の東海と東国−14・15 世紀の様相を中心に」『研究紀要』8：17-103、瀬戸市埋蔵文化財センター .

河合　修　2004「山茶椀流通の諸相　－遠江・駿河・伊豆における出土数量からみた試論」『中近世土器の基礎研究』18：35−44.

川添武胤　1959「臨済宗寺院」「曹洞宗寺院」『鎌倉市史社寺編』199−421、吉川弘文館 .

河野眞知郎　1981「鎌倉における「白かわらけ」の特徴と系譜」『鎌倉考古』10：4−7.

河野眞知郎　1982a「鎌倉に出土する瓦器埦･皿の特徴と系譜」『鎌倉考古』11：4−7.

河野眞知郎　1982b「千葉地遺跡出土の瓦器まね土器」『鎌倉考古』16：2−4.

河野眞知郎　1983「鎌倉に出土する瀬戸内系土師質土器」『鎌倉考古』17：4−5.

河野眞知郎　1986a「鎌倉における中世土器様相」『神奈川考古』21、シンポジウム　古代末期～中世における在地系土器の諸問題、192−205.

河野眞知郎　1986b「鎌倉の年代観」『神奈川考古』21 シンポジウム　古代末期～中世における在地系土器の諸問題、206−208.

河野眞知郎　1991『神奈川県鎌倉市山ノ内小袋山建長寺境内遺跡　庫裏改築に係る昭和 61 年発掘調査報告書』建長寺境内遺跡発掘調査団 .

河野眞知郎　1992「鎌倉の搬入土器と在地土器」『中近世土器の基礎研究』8：149−164.

河野眞知郎ほか　1990『今小路西遺跡（御成小学校内）発掘調査報告書』今小路西遺跡発掘調査団、鎌倉市教育委員会 .

かわらけ研究会（編）　2016『鎌倉かわらけの再検討　－大倉幕府周辺遺跡の一括遺物の分析から』科学研究費補助金「平泉研究の史科学的再構築」刊 .

神田・大野遺跡発掘調査団（編）　1984『四之宮下郷』湘南砂丘遺跡研究会 .

菊川英政編　1993「大倉幕府周辺遺跡群（No.49）雪ノ下三丁目606 番 1 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』9（3）：129−163.

木本元治　1991「東北地方における黒色台付き椀形土器　－古代末の土器群との関連で」『中近世土器の基礎研究』7：67−79.

工藤清泰　1997「考古学研究における境界性　－古代・中世への視点から」『青森県史研究』1：145−121.

國平健三　1986「相模国における古代末期の土器様相」『神奈川考古』21、シンポジウム　古代末期〜中世における在地系土器の諸問題、67−88.

国平健三　1988「綾瀬市宮久保遺跡出土の中世遺物について」『東国土器研究』1：79−100.

黒田俊雄　1994『権門体制論』黒田俊雄著作集 1、法蔵館 .

高林寺遺跡発掘調査団（編）　1985『四之宮高林寺 2』平塚市教育委員会、平塚市埋蔵文化財調査報告書第 2 集 .

古代学協会　1984『平安京左京四条三坊十三町　－長刀鉾町遺跡』.

古代研究部会　1997「三浦半島における歴史時代土器の研究（1）　－三浦半島古代土器編年試案」『横須賀考古学会紀要』1：1−122.

古田土俊一　2009「覚賢塔出土遺物報告　－嘉元四年（1306）のかわらけ」『かまくら考古』1：1−11.

古田土俊一　2016「鎌倉の消費動向　－陶磁器組成の変化を読む」『十四世紀の歴史学』457–486、高志書院 .

小林信一　1991「シンポジウム「土器から見た中世社会の成立」についてのコメント」『中近世土器の基礎研究』7：27−47.

小林康之　1989「関東地方における中世瓦の一様相」『神奈川考古』25：197−227.

五味文彦　2003「京・鎌倉の王権」『京・鎌倉の王権』日本の時代史 8：7−113、吉川弘文館 .

五味文彦　2004「鎌倉と京の王権　－歴史書の系譜」『中世の系譜　東と西、北と南の世界』考古学と中世史研究 1：119−138、高志書院 .

五味文彦　2016『中世社会のはじまり』岩波新書 .

斎木秀雄　1980「鎌倉出土のかわらけ編年試案」『鎌倉考古』1：4−6.

斎木秀雄　1983「かわらけ・出土かわらけの編年」『鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書・研修道場用地発掘調査報告書』73−95、研修道場用地発掘調査団 .

斎木秀雄　1993『佐助ヶ谷遺跡発掘調査報告書』佐助ヶ谷遺跡発掘調査団 .

斉藤　進　1988「多摩ニュータウン No.692 遺跡出土の遺物」『東国土器研究』1：45−70.

佐川正敏　1995「鎌倉時代の軒平瓦の編年研究　－よみがえる中世の瓦」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立 40 周年記念論文集、571−594.

笹生　衛　1989「房総における中世的土器様相の成立過程　－房総における古代末期から中世初期の土器様相」『史館』21：81−108.

笹本正治　2002「異郷を結ぶ商人と職人」『中世の日本 3』中央公論新社 .

柴垣勇夫（編）　2004『中世土器・陶器編年研究会記録　東海地方山茶碗研究の現在と課題』文部科学省特定領域研究『中世考古学の総合的研究』「中世土器・陶器編年研究と流通様相の年代的解明」班 .

清水菜穂　1994「かわらけ考（3）－鎌倉市内検出の一括廃棄遺構に関する若干の基礎的検証」『中世都市研究』3：197−142.

宗臺秀明　1992「中世、14 世紀かわらけの変遷」『考古論叢　神奈川』1：82−102.

宗臺秀明　1998「中世都市鎌倉の初期かわらけ」『中近世土器の基礎研究』13：67−81.

宗臺秀明　1999「方形竪穴建物の機能と変遷　－中世東国の半地下式建物」『考古学研究』46（3）：76−89.

宗臺秀明　2002「鎌倉出土の 14 世紀代かわらけ」『神奈川の中世　〜鎌倉から小田原へ〜　－土器様相を中心として』11−18、神奈川県考古学会 .

宗臺秀明　2005「中世鎌倉の出土の土器・陶磁器」『全国シンポジウム中世窯業の諸相　－生産技術の展開と編年資料集』295−316.

宗臺秀明　2008「中世鎌倉の都市性」『白門考古論叢Ⅱ』中央大学考古学研究会創設 40 周年記念論文集、203−222.

宗臺秀明　2009「漁撈産業の成立　－中世都市鎌倉にみる貝類の獲得と廃棄」『平成 20 年度考古学講座「貝塚とは何か　－縄文から近代まで、神奈川の貝塚に見る貝塚観の変移」』73−82、神奈川県考古学会 .

宗臺秀明ほか　1994『長谷小路周辺遺跡・由比ｶﾞ浜三丁目 228・229 番外（No.236）－中世前期の地割を伴う工芸職人居住地の調査』長谷小路周辺遺跡発掘調査団 .

宗臺秀明・宗臺富貴子ほか　1996『横小路周辺遺跡　二階堂字横小路 110 番 3 地点　－永福寺関連遺跡の調査』横小路周辺遺跡発掘調査団 .

宗臺富貴子　1991「統計処理に見る鎌倉出土かわらけ　－今小路西遺跡（御成小学校内）、長谷小路周辺遺跡（由比ヶ浜三丁目 194 番 24）、下馬周辺遺跡（由比ヶ浜二丁目 18 番 12 他）を比較しながら」『中世都市研究』1：89−125.

宗臺富貴子　1996「鎌倉・今小路西遺跡（御成小学校内）の瀬戸窯製品について　－古瀬戸前期から後期までの出土様相」『研究紀要』4：75−104、瀬戸市埋蔵文化財センター .

宗臺富貴子　2004「南関東の陶磁器流通」『中世東国の世界 2　南関東』181−206、高志書院 .

進藤康夫　1988「八王子市八王子城出土の中世遺物」『東国土器研究』1：140−151.

鋤柄俊夫　1992「土器碗と木器椀」『考古学と生活文化』同志社

大学考古学シリーズ 5：359−369.
鋤柄俊夫　1994「平安京出土土師器の諸問題」『平安京出土土器の研究』古代學研究所研究報告 4：162−224.
鋤柄俊夫　1998「畿内における古代末から中世の土器　－模倣系土器生産の展開」『中近世土器の基礎研究』4：11−85.
鋤柄俊夫　1999『中世村落と地域性の考古学的研究』大巧社 .
鋤柄俊夫　2002「都鄙のあいなか　－中世の京都をめぐって」『古代・中世の都市をめぐる流通と消費　国立歴史民俗博物館研究報告』92：167−225.
鈴木弘太　2008「二つの工房で作られた「かわらけ」　－鎌倉・政所跡のかわらけ一括出土事例」『鶴見考古』7：15−23.
鈴木弘太　2013『中世鎌倉の都市構造と竪穴建物』同成社 .
鈴木康之　1989「草戸千軒町遺跡Ⅳ期の土師質土器」『中近世土器の基礎研究』5：133−149.
鈴木康之　2002「中世土器の象徴性　－「かりそめ」の器としてのかわらけ」『日本考古学』14：71−87.
田尾誠敏・荒井秀規　2017『藤澤市史ブックレット 8　古代神奈川の道と交通』藤沢市文書館 .
高橋照彦　1997a「「瓷器」「茶碗」「葉椀」「様器」考　－文献にみえる平安時代の食器名を巡って」『中世食文化の基礎的研究　国立歴史民俗博物館研究報告』71：531−588.
高橋照彦　1997b「出土文物からみた平安時代の儀礼の場とその変化」『都市における交流空間の史的研究　－権力表象の場と儀礼（平安京　－古代から中世へ）国立歴史民俗博物館研究報告』74：63−76.
高橋典幸　2003「武家政権と幕府論」『京・鎌倉の王権』日本の時代史 8：114−145、吉川弘文館 .
滝沢晶子・安藤龍馬（編）　2017『神奈川県鎌倉市　若宮大路周辺遺跡群（No.242）発掘調査報告書　鎌倉市雪ノ下一丁目 148 番 4・190 番地点』株式会社　博通 .
田代郁夫　1996「かわらけ編年基礎資料（2）　－佐助ヶ谷遺跡内やぐら出土の常滑骨蔵器とその蓋（かわらけ）」『東国歴史考古学研究　東国歴史考古学研究所通信』2：9−10.
田代郁夫　2002「15 世紀のかわらけ」『神奈川の中世　～鎌倉から小田原へ～　－土器様相を中心として』19−123、神奈川県考古学会 .
田代郁夫・大坪聖子　1996「かわらけ編年基礎資料（1）　－天王寺やぐら出土の「かわらけ」と瀬戸仏花瓶」『東国歴史考古学研究　東国歴史考古学研究所通信』1：6−7.
田代郁夫・原　廣志（編）　1991「佐助ヶ谷遺跡内やぐら　鎌倉市佐助一丁目 B」『平成元年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』佐助ヶ谷遺跡内やぐら発掘調査団 .
田中克子　2019「「博多」にもたらされた中国陶磁器　－国内消費地との比較材料として」『貿易陶磁器と東アジアの物流　平泉・博多・中国』51−78、高志書院 .
田中　信　2000「絵巻物の食膳具を読む　－『一遍聖絵』を中心に」『物質文化』69：59−79.
田中　信　2003「武蔵の在地土器供膳具　－十世紀中頃～十四世紀の変化と画期」『中世東国の世界 1　北関東』169−212、高志書院 .
田中　信　2006「平安朝の饗宴食膳具にみられるカラーシンボリズム　－特に白－青、白－赤について」『吉岡康暢先生古記記念論集　陶磁器の社会史』615−626、桂書房 .
田中　信　2016「中世食器論ノート　－主にかわらけを通して」『亀井明徳氏追討・貿易陶磁研究等論文集』182−192、桂書房 .
田中　琢　1967「(4) 畿内」『日本の考古学』Ⅵ　歴史時代（上）、191−212、河出書房新社 .
塚本和弘　1994「皿山古窯跡群の成立と終末について」『向坂鋼二先生還暦記念論集　地域と考古学』445−466、向坂鋼二先生還暦記念論集刊行会 .
中世土器・陶磁器編年研究と流通様相の年代的解明班（編）　2005『関東、東海地方における中世土器（煮炊具）の最近における研究成果』文部科学省研究費・特定領域研究：中世考古学の総合的研究 .
中世土器研究会　1991「シンポジウム「土器から見た中世社会の成立」討論記録」『中近世土器の基礎研究』7：81−108.
中世土器研究会　2015『第 34 回中世土器研究会　中世土器研究中軸資料の再検討　－畿内系土器類と東海系陶器類の並行関係』中世土器研究会 .
土屋浩美（編）　2002『朝比奈砦発掘調査報告書　－鎌倉市十二所字関ノ上 310 番 1 の一部他 5 筆地点』鎌倉市教育委員会 .
手塚直樹（編）　1993『保寧寺跡　－第 2 次調査』保寧寺跡発掘調査団 .
手塚直樹ほか　1982『神奈川県鎌倉市千葉地遺跡　－鎌倉市御成町 15−5 番地所在　中世市街地遺跡の発掘調査』千葉地遺跡発掘調査団 .
手塚直樹・宗臺秀明　2008『文部科学省特別研究促進費　中世考古学の総合的研究　－学融合を目指した新領域創世空間動態研究部門計画研究 C01−1B 日本中世における貿易陶磁の生産と需要の構造的解明　持続する京都・興隆する鎌倉・衰微する平泉　－鎌倉地方資料修正編』.
手塚直樹・田畑佐和子　1992「政所跡（No. 247）雪ノ下三丁目 988 番」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』9（3）：165−275.
中井淳史　1998「〈京都らしさ〉のある風景　－「京都系土師器皿」概念の再検討」『中近世土器の基礎研究』13：115−150.
中井淳史　2003「平泉・韮山・鎌倉　－中世初頭の土師器生産に関する二、三の素描」『中世諸職』51−77、シンポジウム「中世諸職」実行委員会編 .
中井淳史　2005「文献からみたモノ資料　－法会・神事における土師器の使用」『中世の城館と集散地　中世考古学と文献研究』175−198、高志書院 .
中井淳史　2011『日本中世土師器の研究』中央公論美術出版 .
中井淳史　2015「京都産土師器編年の現状と暦年代」『中世土器研究中軸資料の再検討第 34 回中世土器研究会資料』23−40.
中井淳史　2016「京都からみた大蔵幕府周辺遺跡の土器」『鎌倉かわらけの再検討　－大蔵幕府周辺遺跡の一括資料の分析から』65−71、かわらけ研究会編、科学研究費補助金「平泉研究の史料学的再構築」刊 .
中島恒次郎　1998「北西九州からみた豊前国の食器相　－古代から中世前期」『中近世土器の基礎研究』8：151−194.

中島圭一　2016「中世的生産・流通の転回」『十四世紀の歴史学』351−372，高志書院 .

中田書矢　2003「中世奥羽おけるかわらけの意味」『中世奥羽の土器・陶磁器』303−322、高志書院 .

仲田茂司　1993「東国古代の挽物　－食膳における土器との補完関係」『考古学研究』39（4）：97−120.

中田茂司　1999「東国中世の漆器」『考古学研究』46（1）：72−90.

中野晴久　2013a『中世常滑窯の研究』愛知学院大学大学院博士号請求論文 .

中野晴久　2013b「常滑窯の展開」『知多半島の歴史と現在』17：13−23、日本福祉大学知多半島総合研究所 .

中三川　昇　1998「近年の発掘調査からみた中世の三浦半島」『三浦一族研究』2：106−115.

中三川　昇　2009「横須賀市域の様相」『相模国の中世と鎌倉〜中世のはじまりを探るシンポジウム要旨集』13−20、NPO法人鎌倉考古学研究所 .

中三川　昇　2015「三浦半島東岸中部の古代末〜中世初期遺跡群について」『考古論叢　神奈川』21：73−96.

中三川　昇ほか　1997「三浦半島における歴史時代土器の研究（1）　－三浦半島古代土器編年試論」『横須賀考古学会研究紀要』1：1−122.

中山雅弘　1988「福島県における中世土器の様相」『東国土器研究』1：114−125.

中山雅弘　1992「福島県の手づくねかわらけ　－いわき市岸遺跡資料の検討」『いわき地方史研究』29：63−83.

中山雅弘　2001「陸奥国における中世前期の土器窯」『中世土器研究論集　－中世土器研究会20周年記念論集』135−145.

中山雅弘　2003a「総論」『中世奥羽の土器・陶磁器』9−13、高志書院 .

中山雅弘　2003b「奥羽における土器の生産」『中世奥羽の土器・陶磁器』279−288、高志書院 .

贄　元洋（編）　2013『第2回東海土器研究会　渥美窯編年の再構築』東海土器研究会 .

日本中世土器研究会（編）　2015『中世土器研究中軸資料の再検討　－畿内系土器類と東海系陶器類の並行関係』第34回中世土器研究会資料集 .

貫　達人　1996『鶴岡八幡宮寺　鎌倉の廃寺』有隣新書 .

野口　実　1994『武家の棟梁の条件』中公新書 .

野口　実　2004「鎌倉武士の心性　－畠山重忠と三浦一族」『中世都市鎌倉の実像と境界』65−84、高志書院 .

野口　実　2007「坂東武士と京都」『本郷』70: 19−21.

野口　実　2012「平清盛と東国武士　－富士・鹿島社参詣計画を中心に」『杉橋隆夫教授退職記念論集』537−546、立命館大学人文学会編、立命館大学出版 .

野口　実　2015a『東国武士と京都』同成社 .

野口　実　2015b「頼朝以前の鎌倉」『古代文化』45（9）：22−30.

野場喜子　1988「『兵範記』にみる食器」『名古屋市博物館研究紀要』11：88−124.

野場喜子　1997「大饗の食器」『中世食文化の基礎的研究　国立歴史民俗博物館研究報告』71：517−52.

羽柴直人　2001「平泉遺跡群のロクロかわらけについて」『岩手考古』13：41−62.

羽柴直人　2003「平泉におけるかわらけの用途と機能」『中世奥羽の土器・陶磁器』289−302、高志書院 .

羽柴直人　2011『東日本初期武家政権の考古学的研究　－平泉勢力圏の位置づけを中心に』総合研究大学院大学学位請求論文 .

橋本久和　1980「中世土器の地域色と流通」『考古学研究』26 (4)：8−16.

橋本久和　1987a「中世の土器　－その成立前後を中心に」『考古学ジャーナル』280：26−30.

橋本久和　1987b「中世土器の製作技法ノート」『中近世土器の基礎研究』3：175−183.

橋本久和　1987c「西日本からみた古代末〜中世の土器」『神奈川考古』23：255−263.

橋本久和　1990「中世成立期の土器様相　－畿内を中心として」『日本史研究』330：36−69.

橋本久和　1991「畿内周辺の回転台土師器」『考古学研究』38 (1)：73−85.

橋本久和　2004「土器の生産・流通からみた系譜」『中世の系譜　東と西、北と南の世界』考古学と中世史研究1：149−168、高志書院 .

橋本久和　2015「中世土器基準資料の再検討　－瓦器碗・土師器皿・山茶碗を中心に」『中世土器研究中軸資料の再検討＝畿内系土器類と東海系陶器類の並行関係』第34回中世土器研究会資料集、1−9.

服部敬史　1982「南武蔵における古代末期の土器様相」『東京考古』1：96−124.

服部敬史　1986「基調報告　関東甲信地域における古代末期の土器様相」『神奈川考古』21、シンポジウム　古代末期〜中世における在地系土器の諸問題、1−9.

服部実喜　1984「中世都市鎌倉における出土かわらけの編年的位置づけについて」『神奈川考古』19：171−188.

服部実喜　1985「鎌倉旧市域出土の中世土師質土器　－所謂かわらけの編年を中心に」『中近世土器の基礎研究』1：84−90.

服部実喜　1986a「関東地方における中世土器群の構成とその特質について」『神奈川考古』22：369−394.

服部実喜　1986b「関東地方における中世土器様相」『神奈川考古』21、シンポジウム　古代末期〜中世における在地系土器の諸問題、169−175.

服部実喜　1988「関東地方における平安時代後半期の土器様相　－主として関東地方西部地域の動向について」『神奈川考古』24：157−180.

服部実喜　1992「南武蔵・相模における中世の食器様相（1）　－中世初期の様相」『神奈川考古』28：129−167.

服部実喜　1994「南武蔵・相模における中世の食器様相（2）　－中世前期の様相」『神奈川考古』30：95−124.

服部実喜　1995「南武蔵・相模における中世の食器様相（3）　－中世後期の様相Ⅰ『神奈川考古』31：83−101.

服部実喜　1996 南武蔵・相模における中世の食器様相（4）　－中世後期の様相Ⅱ」『神奈川考古』32：357−376.

服部実喜　2002a「鎌倉と周辺地域における南北朝・室町期の土器・陶磁器　－鎌倉編年の見直しを中心として」『中近世土器の基礎研究』16：13−28.

服部実喜　2002b「16 世紀のかわらけ」『神奈川の中世　～鎌倉から小田原へ～　－土器様相を中心として』25−34、神奈川県考古学会 .

原　廣志　1986「鎌倉における瓦の様式　－鎌倉時代の瓦当文様を中心に」『仏教芸術』164：59−65.

原　廣志　1992「東国出土の中世瓦」『浄土庭園と寺院　－永福寺跡の発掘調査を中心として』永福寺創建 800 年記念シンポジウム発表資料 .

原　廣志　2005「古代末～中世瓦の様相」『中世の伊豆・駿河・遠江』273−292、高志書院 .

原　廣志はか　2005「今小路西遺跡(No.201)御成町 200 番 2 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』22（1）：157−339.

原　廣志（編）　2002「大蔵幕府周辺遺跡（NO.49）二階堂荏柄 58 番 4 外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』18（1）：1−128.

原廣志・宗臺秀明　1996「遺物の編年　第 1 項かわらけの分類と比較　第 2 項かわらけと瓦の廃棄・転用」『神奈川県鎌倉市横小路周辺遺跡　二階堂字横小路 110 番 3 地点　－永福寺関連遺跡の調査』112−120、横小路周辺遺跡発掘調査団 .

原田信男　1997「古代・中世における共食と身分」『中世食文化の基礎的研究　国立歴史民俗博物館研究報告』71：497−515.

広瀬和雄　1986「中世への胎動」『岩波講座日本考古学』6：296−356.

福田健司　1986「南武蔵における平安時代後期の土器群」『神奈川考古』21：43−66.

福田　誠・永田勝久　2001「鎌倉出土「かわらけ」の化学組成分析」『鶴見大学紀要』38（4）：103−115.

福田　誠・永田勝久　2002「鎌倉の岩石・粘土の化学組成分析（中世在地産土器の基礎研究　2」『鶴見大学紀要』39（4）：53−59.

福田　誠・永田勝久　2004「鎌倉の岩石・粘土の化学組成分析（中世在地産土器の基礎研究　3」『鶴見大学紀要』39（4）：131−143.

藤木久志　1997『戦国の村を行く』朝日選書 .

藤澤良祐　1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』3：111−134、三重県埋蔵文化財センター .

藤澤良祐　1995「瀬戸古窯跡群Ⅲ　－古瀬戸前期様式の編年」『瀬戸市埋蔵文化財研究紀要』3：77−256.

藤澤良祐　2001「埋納された古瀬戸製品　－特に大型壺・瓶類を中心として」『瀬戸市歴史民俗資料館紀要』18：1−88.

藤澤良祐　2002「中世都市鎌倉における古瀬戸と輸入陶磁　－中世前期の補完関係につして」『陶磁器が語るアジアと日本　国立歴史民俗博物館研究報告』94：313−327.

藤澤良祐　2013「施釉陶器の生産形態　－瀬戸窯を中心に」『知多半島の歴史と現在』17：25−35、日本福祉大学知多半島総合研究所 .

藤原良章　1988「中世の食器・考　－〈かわらけ〉ノート」『列島の文化史』5：59−94.

保立道久　1990「町の中世的展開と支配」『日本都市史入門Ⅱ：町』1−19、東京大学出版 .

堀内明博　1997「古代末期都城における供膳形態の一様相　－土器組成からみた各宮域の空間利用の特質」『都市における交流空間の史的研究　－権力表象の場と儀礼（平安京　－古代から中世へ）国立歴史民俗博物館研究報告』74：77−111

文化財建造物保存技術協会（編）　1976『重要文化財　浄光明寺五輪塔修理工事報告書』浄光明寺 .

前川嘉宏　1994「三重県における山茶椀の出土状況」『研究紀要』3：151−178、三重県埋蔵文化財センター .

前田清彦　1997「土器祭祀類型試論」『北陸古代土器研究』7：73−78.

松井一明　1993「遠江における山茶碗生産について　－遠江の山茶碗研究 1」『静岡県考古学研究』25：19−37.

松吉（平井）里永子　2010「中世鎌倉出土かわらけ再現のための基礎実験　－予備調査としての鎌倉出土土器の胎土比較」『鶴見考古』9：2−7.

松吉（平井）里永子　2012「中世鎌倉のかわらけ研究史の視点について」『文化財學雑誌』8：45−50、鶴見大学文化財学会 .

松吉里永子　2016「鎌倉かわらけ研究史」『鎌倉かわらけの再検討　－大蔵幕府周辺遺跡の一括資料の分析から』17−31、かわらけ研究会編、科学研究費補助金「平泉研究の史料学的再構築」刊 .

松本建速　1992「柳之御所におけるかわらけ存在の意味　－柳之御所のかわらけの系譜と平泉におけるかわらけの出現から見た文化変容の一様相」『紀要』12：45−71、岩手県文化振興財団埋蔵文化財センター .

松本建速　1993「柳之御所跡出土かわらけ編年試案」『研究紀要』13：53−79、岩手県文化振興財団埋蔵文化財センター .

松本建速　1994「ロクロかわらけと手づくねかわらけ」『岩手考古』6：23−33.

松本建速　1995「平泉のかわらけと平安京のかわらけの比較」『紀要』15：73−84、岩手県文化振興財団埋蔵文化財センター .

松本建速　1996「絵巻物に見る器とその解釈」『物質文化』60：46−59.

松本建速　1998「12 世紀代東北地方におけるかわらけ存在の意味」『中近世土器の基礎研究』13：27−65.

馬淵和雄　1985『鎌倉市二階堂向荏柄遺跡発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会 .

馬渕和雄　1993「大倉幕府周辺遺跡　－二階堂字荏柄 38 番 1（No.49）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』9（2）：1−144.

馬淵和雄　1995「上杉氏憲邸跡（No.258）浄明寺一丁目 699 番外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』11（2）：215−286.

馬淵和雄　1997a「付 −1　鎌倉」『中世食文化の基礎的研究　国立歴史民俗博物館研究報告』71：311−330.

馬渕和雄　1997b「中世食文化の諸相　－食器から見た中世鎌倉の都市空間 −」『中世食文化の基礎的研究　国立歴史民俗博物館研究報告』71：431−471.

馬淵和雄　1998『鎌倉大仏の中世史』新人物往来社 .

馬淵和雄　2006「鎌倉・杉本寺周辺遺跡群発見の中世土師器生産址」『吉岡康暢先生古記記念論集　陶磁器の社会史』409−425、桂書房 .

馬淵和雄　2018「中世鎌倉の食器文化　Ⅱ中世的食器様式の成立と展開」『考古学ジャーナル』716：17−19.

馬淵和雄ほか　2002『神奈川県鎌倉市　杉本寺周辺遺跡　二階堂字杉本 912 番 1 ほか地点発掘調査報告書』杉本寺周辺遺跡発掘調査団編集、鎌倉市教育委員会発行 .

馬淵和雄ほか　2005「大倉幕府跡（No. 253）雪ノ下三丁目 701 番 3 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』21（1）：201−401.

三浦圭介　1990「日本海北部における古代後半から中世にかけての土器様相」『シンポジウム土器からみた中世社会の成立』29−42.

水口由紀子　1989「考古遺物からみた中世成立期の様相」『文化財の保護』21：118−139.

水澤幸一　2005「越後の中世土器」『新潟考古』16：97−112.

水澤幸一　2006「出土層位からみた鎌倉遺跡群の遺物様相」『吉岡康暢先生古稀記念論集陶磁器の社会史』484−491、六一書房 .

溝口彰啓　2005「山茶碗　－遠江･駿河･伊豆における生産･流通･消費」『中世の伊豆・駿河・遠江』249−272、高志書院 .

村田晃一　1994「土器からみた官衙の終末　－東北地方の場合」『古代官衙の終末をめぐる諸問題』第 1 分冊：54−65、東日本埋蔵文化財研究会 .

桃崎祐輔　1999「常総地域の中世陶磁器と土器　－中世びとのくらしとうつわ」『焼き物にみる中世の世界　－県内出土の土器・陶磁器を中心として』48−59、土浦市上高津貝塚ふるさと歴史の広場刊 .

百瀬正恒　1985「平安京及びその近郊における土器の生産と消費」『中近世土器の基礎研究』1：1−7.

百瀬正恒　2002「京都を旅立った土師器のゆくすえ　－戦国時代の波と東北日本海から北海道」『日本考古学協会第 68 回総会研究発表要旨』124−127.

百瀬正恒・橋本久和　1988「中世平安京の土器様相と各地への展開」『考古学ジャーナル』299：15−25.

森　隆　1990a「西日本の黒色土器生産（上）」『考古学研究』37（2）：85−110.

森　隆　1990b「西日本の黒色土器生産（中）」『考古学研究』37（3）：70−105.

森　隆　1991「西日本の黒色土器生産（下）」『考古学研究』37（4）：59−81.

森　隆　1992「中世土器の生産にみる地域型の提唱と工人集団の系譜について　－西日本の土器椀生産を中心とした」『中近世土器の基礎研究』8：3−54.

森　隆　1993a「中世的土器生産の特質と成立過程」『古代文化』45（5）：20−33.

森　隆　1993b「中世的土器生産の特質と成立過程」『古代文化』45（6）：29−40.

森　隆　1993c「中世的地域社会の形成過程」『古代文化』45（12）：36−46.

森　隆　1994「中世土器の焼成窯」『中近世土器の基礎研究』10：219−262.

森　隆　1996「中世土器の焼成窯　−2」『中近世土器の基礎研究』11：237−246.

森島康雄　2016「変革する土器様式」『十四世紀の歴史学』419−455，高志書院 .

八重樫忠郎　1994「常滑・渥美窯産甕の 12 世紀後半における変化　－国産陶器一括廃棄事例から」『岩手考古』6：34−44.

八重樫忠郎　1997「輸入陶磁器からみた平泉　－分布傾向からの分析」『貿易陶磁研究』10：134−156.

八重樫忠郎　2014「平泉と鎌倉の手づくねかわらけ」『中世人の軌跡を歩く』23−38、高志書院 .

八重樫忠郎　2016「従前の鎌倉かわらけ編年について」『鎌倉かわらけの再検討　－大蔵幕府周辺遺跡の一括資料の分析から』72−97、かわらけ研究会編、科学研究費補助金「平泉研究の史料学的再構築」刊 .

安井俊則　2013「渥美窯の展開」『知多半島の歴史と現在』17：1−12、日本福祉大学知多半島総合研究所 .

八峠　興　1998「山陰における中世土器の変遷について－供膳具・煮炊具を中心として」『中近世土器の基礎研究』8：83−113.

山川　均　2004「中世都市奈良と土器『大乗院寺社雑事記』にみるその認識と評価」『古代・中世における流通・消費とその場　国立歴史民俗博物館研究報告』113：243−260.

山田邦明　2014『鎌倉府と地域社会』同成社 .

山本信夫　2000『太宰府条坊跡 XV　－陶磁器分類編』太宰府市教育委員会 .

横田洋三　1981「出土土師皿編年試案」『平安京跡研究調査報告第 5 輯　平安京左京五条三坊十五町』46−55、古代学協会 .

横田洋三　1984「土師器皿の分類と編年観」『平安京跡研究調査報告第 11 輯　平安京左京四条三坊十三町　－長刀鉾町遺跡』54−58、古代学協会 .

横田洋三　1988「中世土師器皿と生産地」『滋賀県文化財保護協会紀要』1：77−85.

吉岡康暢　1991「中世的食器組成の成立と時期区分覚書　−90 年シンポに寄せて」『中近世土器の基礎研究』7：13−26.

吉岡康暢　1997a「“カワラケ”小考」『都市における交流空間の史的研究　国立歴史民俗博物館研究報告』74：125−129.

吉岡康暢　1997b「総括」『中世食文化の基礎的研究　国立歴史民俗博物館研究報告』71：350−374.

吉岡康暢　2003「中世陶器工人の存在形態」『中世諸職』11−49、シンポジウム「中世諸職」実行委員会編 .

四柳嘉章　2006『漆 1・Ⅱ』法政大学出版局 .

四柳嘉章　2009『漆文化史』岩波書店 .

四柳嘉章（編）　1987『西川島　－能登における中世村落の発掘調査』石川県穴水町教育委員会 .

若林勝司　2009「平塚市域における古代末・中世土器の変遷について」『相模国の中世と鎌倉　～中世のはじまりを探るシンポジウム要旨集』31−20、NPO 法人鎌倉考古学研究所 .

脇田晴子　1986「中世土器の生産と流通」『中近世土器の基礎研

究』2：93−115.

脇田晴子　1997「文献からみた中世の土器と食事」『中世食文化の基礎的研究　国立歴史民俗博物館研究報告』71：473−496.

レンフルー、C.・P. バーン / 池田ほか訳　2007『考古学　－理論・方法・実践』東洋書院 .

Renfrew, C.　1975 “Trade as Action at a Distance: Questions of Integration and Communication”. in Sabloff and Lamberg−Karlovsky (eds.) *Ancient Civilizaton and Trade,* 3−59.